ISBN4-8457-1035-8

C0010 P3605E

リブロポート
定価3605円
(本体3500円・税105円)

7. 道具を使う人間、旧石器時代
8. 道具を作る人間、新石器時代
9. 種族、青銅器時代
10. 封建制

5.
サイバー身体的
ステージ
感覚情報の操縦

6.
サイバー・
エレクトロニクス・
ステージ

7.
サイバー遺伝子
ステージ
DNA-RNA
データの操縦

8.
サイバー・ナノ・
テクノロジー
ステージ
原子情報の操縦

11. 国家、低次の産業
12. 多国籍、高度な産業
13. 個人的消費者の快楽主義
14. 個人的美学の習得
15. 快楽主義的-美学的連結
16. 脳とエレクトロニクス・テクノロジーへの個人
17. 脳とエレクトロニクス・テクノロジーの個人的習熟
18. 神経-エレクトロニクス・ネットワーク
19. 遺伝子テクノロジーを通した個人による脳管理
20. 遺伝子テクノロジー情報の個人的習熟
21. 遺伝子テクノロジー情報のエレクトロニクス・ネットワーク-連結
22. ナノ・テクノロジー(原子情報)への個人消費者のアクセス
23. ナノ・テクノロジー(原子情報)への個人的習熟
24. ナノ・テクノロジー(原子情報)の連結

進化の周期律表は神経学的進化の24のステージを明確にする
12は地球的-機械的-集合的、残りの12はポスト地球的-量子的-電脳的。

大気圏外進化論

一九九五年一〇月三〇日　初版第一刷発行

著者　ティモシー・リアリー
訳者　菅　靖彦
発行者　市原　穣
発行所　株式会社リブロポート
〒一七〇　東京都豊島区東池袋四-二七-一〇　サン・ソウゴ池袋
電話　〇三(三九八三)六一九一(代)
印刷　図書印刷株式会社
製本　大観社製本株式会社
ブック・デザイン　鈴木一誌・竹内さおり
手動印字　長久雅行

ISBN4-8457-1035-8 C0010

歩とは、人間のイマジネーションの拡大であり、そうした意味で霊的な進化と密接に関わっているのだ。とくに、電子を情報に変換して密接に繋がりはじめている現在の人類が、遺伝子レベルの情報を自在に操れるようになれば、個人性の基盤（私とは何者かということ）が大幅に揺るがされることになるだろう。そのことが、人類を真の意味での惑星文明に導いていくのか、それとも、多様性をエサにした不可視の全体主義的文明の形成に導いていくのか、今のところは分からない。ただ、今後、個人の自由が拡大していけばいくほど、ティモシーが再三繰り返しているように、他者の自由を侵害してはならないという倫理の重要性が増してくることは確実だろう。

ティモシーが自由に死ぬ権利を行使しようとしている今、彼の主著の一つとみなせる本書を日本の読者に提供できることは望外な喜びである。二〇世紀後半の激動の時代に挑発的なメッセージを送りつづけてくれた現代の偉大なシャーマンの精神に、本書を通して、できるだけ多くの人が触れてくれることを願っている。

本書（ファルコン・プレス版、一九八七年）のタイトルは『情報心理学』(INFO-PSYCHOLOGY)となっていたが、あえて『大気圏外進化論』というタイトルにしたのは、もともとの原題である『大気圏外心理学』のニュアンスを少しでも残したいという配慮からである。できるだけ読みやすい訳を心がけたつもりだが、ティモシー独特の造語が多く、その訳に苦慮した。意見や感想があれば、どしどし寄せてほしい。読解困難な箇所は例によって同僚のティム・マクリーンの助けを借りた。彼には感謝の言葉もない。最後に、本書の出版を快諾し、さまざまなアドバイスをしてくれたリブロポートの石原さんにこの場を借りて感謝の気持を申し述べたい。彼の助けがなければ、本書はこのような形で世に出ることはなかっただろう。

菅　靖彦

一九九五年九月一四日

より、宇宙ステーションを作ろうという計画が着々と進められており、人類が宇宙空間で活動しはじめるのは秒読み段階に入りつつある。さらに、このまま人口の増加がつづいていけば、一世紀もたたないうちに地球上が満員となり、深刻な食糧危機や環境の危機が訪れることは必死と予測されており、人類の存続にとっても宇宙空間の利用は避けられないものとなるだろう。

しかし、いずれ人類が宇宙に進出していくことが避けられない事実だとしても、「宇宙移民」が現実化すると考えることは、まだやはり夢の領域に属しているといってよいだろう。そこで、ティモシーが注目したのが、八〇年代に入って急速な発達を遂げはじめたエレクトロニクス・メディアであった。個人の自由と人間の解放とを一貫して追い求めつづけてきたティモシーにとって、パーソナル化とインタラクティブ性を強めていくハイテク・メディアは、サイケデリック・ドラッグに匹敵する再プログラミング（意識変容）の道具であり、「生命の拡張」と「知性の増大」を可能にし、地理、政治、言語、階級、宗教を超えるグローバリズムを後押しする促進剤とみなされたのである。

本書はもともと一九七〇年代の半ばに『大気圏外心理学』と題して出版されたものだが、ここに訳出したのは、一九八七年にファルコン・プレスから出版されたその改定版である。前半部分に、今日のデジタル情報革命を宇宙へと拡大していく人類進化の中間ステージとして位置づけ、その進化論的意義を明らかにする文章が付け加えられている。ある意味で、彼のラディカルな意識進化の考えをきわめて分かりやすく、図式的に解説した「ティモシー・リアリー入門書」だといってもいいと思う。

われわれはともすれば、霊性と科学とを相反するものとみなしがちだが、科学やテクノロジーの発達そのものが、それまで人間が制御できなかったもの、たとえば、電子や遺伝子、さらには原子の制御を可能にすることを通して、人間の存在そのものを根本的に変容させる霊的な力をもっていることを、本書を通して感じていただければ幸いである。科学の進

て、巨大な棕櫚や緑色のシダになる体験をして以来、サイケデリック文化の矢面に立ち、持ち前のラディカルな精神を武器に、数々の挑発的なヴィジョンを提示しつづけてきた、根っからの自由主義者である。彼が一貫して主張してきたのは、「個人の自由」であり、「個人の独立」であり、「自分自身で考える」ということである。彼にとってサイケデリック体験とは、自分が所属する文化による「洗脳」プログラムを解除し、自由に思考する「個人の独立」を獲得するための手段にほかならない。

本書は、そのあまりにラディカルな行動ゆえに体制側に目をつけられ、ティモシーが入獄を繰り返した一九七〇年代の半ばに、刑務所内で執筆されたものである。刑務所内の閉じられた空間が、逆に、人類が宇宙に向かって進化していくという壮大な解放的ヴィジョンへの憧憬を掻き立てるキックになったと本文の中で述べている。

しかし、本書で述べられている、「宇宙移民」「知性の増大」「生命の拡張」という三本柱からなる、スマイル(SMI^2LE)・プロジェクトと彼の命名する人類進化のヴィジョンは、決して単なる夢想の産物ではない。それは自らのサイケデリック物質による覚醒体験をベースにして、宇宙科学と生命科学と脳科学の成果を彼独自のスタイルで繋ぎあわせた知的コラージュなのである。

一九七〇年代の半ばといえば、人類を月面に送りこんだアポロ計画が一段落して、新たにスペースシャトル計画が発進し、オニール博士が宇宙コロニーの構想を打ち出していた時期である。人類が宇宙に向かって進出していくことが単なる夢ではなく現実になろうとしていたのだ。そんな時代の雰囲気が、ティモシーの内的な体験に色濃く反映され、宇宙的規模の進化論的ヴィジョンをもたらしたのは、ある意味で、時代の必然だったといえるかもしれない。

もっとも、ソ連の解体による東西の冷戦構造の終焉とアメリカ経済の衰退により、その後、宇宙開発計画が大幅に減速することになったことは事実だが、宇宙へ進出しようとする人類の夢が断たれてしまったわけではない。国際間の協力に

1. 宇宙論――サイバーないし集団の用語によって定義される起源の理論。

量子宇宙論――科学的、量子的、数的形態で表現可能な起源の理論。

2. 政治学――個人(サイバー)ないし集団、いずれかによって定義される支配、制御、自由、服従の理論。

量子政治学――精神幾何学的な座標とデジタル言語で表現される支配、制御、自由の理論。コンピュータ・ソフト、「マインド・ミラー」参照のこと。

3. 認識論――真実(サイバー個人の信念)と事実(集合的・社会的信念)を規定する理論。

量子認識論――デジタル言語と量子物理学的記述で表現される真実と事実。

4. 倫理学――「善/悪」(サイバー・主観的)「美徳/悪徳」(社会的・集合的)を決定する理論。

量子倫理学――精神幾何学の天文物理学的言語で定義される善と徳。

5. 美学――主観的美、社会的芸術、個人的快楽、集団からの報酬を定義する理論。

量子美学――数、デジタル言語、幾何学で定義される美、芸術、快楽、報酬。

6. 存在論――サイバー(個人的)ないし集合社会的態度に基づくリアリティの性質に関する理論。

量子存在論――科学的、技術的、量子的なデジタル単位で定義されるリアリティの性質に関する理論。

7. 目的論――サイバー個人的、ないし集合社会的態度のいずれかに基づく進化、退化、停滞の理論。

量子目的論――測定可能な索引、量的パターン、幾何学に基づく進化、停滞の理論。

8. 終末論――サイバー個人的、集合社会的な終末の理論。自分自身の終末に責任をもてない人間はおそらく一般的な進化の終末論を構築できない。

量子終末論――量子化、デジタル化、幾何学に基づく終末の理論。

量子心理学

大気圏外心理学の同義語。人間の思考や行動は、コンピュータ、イコンの言語によって説明される。

轟きの二十世紀

二十世紀のそれぞれの十年は、電子(デジタル)情報へのアクセスを容易にし、その制御能力を増大させる情報装置や新しいコミュニケーションとアートの形態の出現を目撃してきた。量子的な装置には、電話、ラジオ、写真、映画、テレビ、ポータブル・カセット、CBラジオ、家庭用シンセサイザー、CDなどが含まれる。

サイバー

サイバーという言葉はパイロットという意味のギリシャ語〈Kubernetes〉に由来する。ハイゼンベルグの不確定性原理は、観察者が観測技術や解釈に用いる地図／モデルの性質によって、自分が観察するリアリティを決定(定義)することを証明した。

サイバー人間

ハイゼンベルグの不確定性原理を理解し、自らが定義して、その中で生きるリアリティに責任をもつ個人。この自己決定という一般原則は、ヒンドゥー教、仏教、グノーシス、スーフィの哲学者たちによって何千年も前から述べられてきた。作家、芸術家、詩人、劇作家、発明家、シャーマン、賢い魔術師といった創造的な人々は、何世紀にもわたってこの原理を理解していた。かれらはそれを人間の文化や科学の栄光を築くために用いてきたのだ。けれども、これまではリアリティを生み出すサイバー人間の能力は、象徴、イコン、神話、原稿、芸術的・哲学的表現などに限定されてきた。情報構造をわれわれはアートと呼ぶ。最近まで、量子的リアリティを表現する人間の能力は量子的テクノロジーに無知だったため、物質的な次元にまで広がることができなかった。前産業時代、哲学者からサルタン、農奴にいたるまで、人間は技術的な近視眼のあわれな犠牲者だった。産業の世紀は、物質的リアリティを操作する人間の能力を集合的レベルで大幅に進歩させた。轟きの二十世紀になってはじめて人間は宇宙が情報構造であることを発見した。そしてデジタル化された思考の束で考えるサイバー量子的知性に習熟することによってその構造を探究し、使いこなすことができることを見出した。

サイバー量子的心理学

個人が自分自身の個人的目的のために、電子的知識のテクノロジーにアクセスし、それを操縦する。伝統的な哲学の八つの領域がサイバー量子的心理学によって再定義できる。

家庭化された霊長類

自分自身で考えない人間。部族、州、教会、厳格な組織、国家、産業社会に所属する人間。個人主義的なサイバー・ライフに先行する段階。これは自分自身で考えない人間をけなすもう一つの典型的なスーフィ(グルジェフィアン)用語である。ある人たちに歓迎されない「冗談」。

ポスト象徴的

文字や声による主張よりデジタル化された量子の束を用いる思考の段階。

集合的

個人の独立に先行する人間進化のすべての段階。同義語として蜂の巣的群れ、群衆などがある。普通、風刺的な意味で用いられる。

地球的

宇宙移民やサイバー量子的思考に先行する段階。

量子的

「量子的」という言葉は一つのビット、すなわち基本単位をさす。形容詞としての「量子的」は、主体がデジタル化された要素の数と束、情報の単位によって定義されることを示す。

量子物理学ないし情報物理学

これは、質量、力、仕事、エネルギーといった問題に関心を寄せるニュートンの機械的・物質的な物理学と対象をなす。

量子物理学

宇宙を一時的な情報単位の束、言い換えればオン、オフされるデジタル・ビットでつくられていると定義する。

量子宇宙

イコール情報宇宙。

量子物理学は情報科学に帰する。

多くの複雑な次元での宇宙の信号の解読。ニュートン的宇宙が明らかな固体の物質からなっているのに対し、情報宇宙はデータ構造からなっている。

量子的人間

データ宇宙に住み、情報世界の中に生きている。

大気圏外心理学

ポスト地球的存在の心理学。

情報心理学

ポスト産業社会の心理学。大気圏外心理学に先行し、それを補足する。

デジタル言語あるいは量子言語学

量的なパターンよってパッケージされて蓄えられ、処理・伝達される思考。H_2Oは〈wasser〉〈l'eau〉〈aqua〉〈water〉といった文字化された思考のデジタル化(量子化)された表現である。

宇宙

普通、物質構造として定義される地球外の宇宙、太陽系、銀河。

情報宇宙

情報によって定義・測定されるわれわれの世界、銀河、宇宙。電子的知識のテクノロジー、つまり人間の脳とその電子的延長によって記録・蓄積・処理される信号、ビット、デジタル要素の宇宙。

喉頭-手(L-M)

口と手による言語。手作りの工芸品や道具の創造。狩猟採集時代の後で、封建時代、産業時代、量子時代の前に訪れた、道具を作っていた旧石器、新石器の(部族的な)人間進化の段階。

幼生的

宇宙移民や量子テクノロジーの個人的習熟の実現に先行する人間進化の初期原始段階。幼生的人類は本能的、自省的に集団に結びつけられていない。かれらはサイバー的な(自己操縦的な)自動思考の段階に達していない。私は非礼を承知で故意にこうした挑発的な言葉を用いているのだ。同僚を原始的な進化の段階に所属するとみなすことは、よく思われないかもしれない。この風刺的な用語法は著者のケルト的な遊び心が監獄での憂鬱な生活で増長していることを反映するものである。

ステージ二十二、二十三、二十四――一九七五年版の原子意識や原子工学の領域についての説明は思索的なものに聞こえたのかもしれない。しかし、この十年のうちに、量子的リアリティを泳ぎ回る知的サイバーの概念に似たものが証明されようとしている。「超生理学的パイロット」の大きな波はエリック・ドレクスラーの『創造のエンジン』とともにやってきた。現在の分子生物学のテクノロジーは、近い将来、原子の操作を可能にし、自己複製や細胞の修復ができ、分子サイズのコンピュータを生み出すことができる「ナノ・マシーン」を創出できるというのは、ドレクスラーの理論的根拠をもった信念なのである。

これは原子消費主義、原子工学を可能にし、新しいレベルの錬金術的分子構造の構築を可能にする。

以上のことを念頭において、ステージ二十二、二十三、二十四の灰色の線に言葉を書き添えてもらいたい。

ステージ二十四のブラック・ホールへの言及は意図的に詩的であることを狙った。最新の天文物理学の問題を考えていたら、重々しいヒンドゥー教の荘厳な空性の概念が偉大な比喩として浮かんできたのだ。

いずれにしろ、「反物質の渦」は未来を待望させる本の終末を飾るにふさわしいものである。

『大気圏外心理学』では最初、マリワナによって体験される身体快楽的な体験が強調された。
今日版には、開放的な禅の状態で、感覚的刺激を受けとるサイバー身体的人間がいる。
矢印を両端で終わる形にし、「快楽主義的受容性」と命名してほしい。

ステージ十四――このステージは積極的に身体に精通する段階である。
灰色の線を延長し、十三と十五につなげてほしい。そして「美の習熟」と命名してもらいたい。

ステージ十五――抜け目のない読者なら、ここでの議論に欠けているのが、「情報」と「情報宇宙」の概念であることに気づくだろう。

ステージ十六、十七、十八――一九七五年版は変性意識状態や、リアリティの神経電気的性質の内的自覚を強調している。サイケデリックな神経伝達物質は脳の「ウェットウェア」を活性化する真新しいテクノロジーであった。
当時欠けていたのは、電子テクノロジーの使用と、コンピュータ、シンセサイザー、電子画面を用いる情報世界の構築だった。

ステージ十九、二十、二十一――生存のための集合的反射の刷りこみが引き離され、個人が意のままに再結合することに注意してもらいたい。
灰色の線に、「第二部の目次が適切な用語を提供する」と書き添えてほしい。

S.M.I².L.E.　S.M.I².L.E.　S.M.I².L.E.　S.M.I².L.E.　S.M.I².L.E.

灰色の線に「国際的な産業化」と名付けてもらいたい。
目敏い読者なら、ステージ十二の説明を読んで、一九七五年当時の概念を現行のパラダイムに翻訳することができるだろう。著者は、読者に、これらの重要な問題の「インタラクティブな共著」に参加することを要請したい。

進化の十二の大気圏外ステージ

この議論は興味深い考古学的な遺物である。一九七五年に書かれたそれは、「進化した」神経系のステージの活性剤として神経伝達ドラッグの役割を強調する。そのような考えは、レーガン政権の反ドラッグの魔女狩り的な風潮が強まっている中では、「非現実的」と思われるだろう。
しかし、これらの考えは依然として妥当性をもっているのだ。
これらの考えの今日版は情報社会を強調する。量子的世界は、ポスト集合的な未来のリアリティの海を泳ぎ回るサイバー人間からなっている。
サイバー人間は家族や政府といった集団への刷りこみから離脱する。かれらは自分の身体、脳に責任をもち、RNA／DNAの形成を管理し、最終的には超極微の原子的リアリティに責任をとるようになる。
サイバー人間は共にまとまって新しい遺伝子プールや新しい情報社会を作る。
ステージ十三から二十四までの図においては、古い世界や集団への刷りこみ線が分断されていることに注意してもらいたい。サイバー人間はこれらの十二の生存線を自らが選択するあらゆる環境につなぐことができるのだ。

ステージ十三――このステージは受動的な快楽主義的消費者である。

的王国の形成が広範な社会的役割を生み出した。
このステージの歴史的重要性は、国民をまとめる情報テクノロジーの登場にある。むろん、それらは中央の権威の独占下にあった。彩色写本、筆写者、教皇性支持者、天命など。
灰色の矢印を逆転させ、封建社会の役割や行動の刷りこみを示すものにしてもらいたい。そして「封建文化」とそれを命名したい。

ステージ十一——**『大気圏外心理学』**は個人の発達を強調した。思春期の後、親としての大人の家庭化がはじまる。
トフラーの最近の著作に基づく『情報心理学』は、封建文化が産業時代にとって代わられることを論理的に主張する。
ステージ十一は、資本主義、民主主義、組み立て工場が出現する十九世紀の産業化した「国家の段階」に言及する。強調点は「国」という言葉に置かれる。古典的な例はイギリス、ドイツ、アメリカなどである。
「性的な家庭化-両親」を「産業文化」に置き換えていただきたい。
灰色の線を中心から下方へと移動させてほしい。「第四の社会-性的-家庭的リアリティ」は「産業文化」となる。ここでは工場文化の社会的集合性が刷りこまれなければならない。
その矢の名称は「産業的集合性の刷りこみ」である。

ステージ十二——**『大気圏外心理学』**では、「集合的社会化」(社会的昆虫化)と命名されていた。ご存知のように、二十世紀の産業化は国際的な産業化、多国籍企業、OPEC集団、グローバルな企業連合を生み出してきた。ステージ十二の古典的例は日本である。
日本の産業機械のパワーは精密な集合的構造にあることをわれわれは知っている。

ステージ八――象徴を発明し、道具を制作する能力は人間の進化の重要なステップである。実際、われわれの種である**ホモ・サピエンス**の誕生は、われわれが人工物を制作しはじめた時にまで遡ることができる。

この行動は刷りこみ可能だ。成長した子供たちは、両親や部族の「モデル」たちから、新しい道具を作るこの魔術的な限りない技能を学ぶ。

図の中央に下に向かって一本の線を引いてもらいたい。地面に接するところでその線は鋏状ないしフォーク状になる。これは人さし指と向かい合わせになった親指、つまり、リアリティを作ることを可能にした素晴らしい装置を象徴している。この線を「発明する道具制作者」と名づけたい。

ステージ九――ステージ七、八、九の説明はしばしばL-M（喉頭と手）の行動に言及する。

この解剖学的用語は混乱を誘うかもしれない。「用語解説」で述べたように、「L-M」という言葉が出会ったら、即、「道具制作」や「象徴的-人工物の制作」という言葉に翻訳してみていただきたい。

霊長類の群れが孤独な捕食動物のあとに登場したように、労働を分担する種族集団は孤独な新石器の道具制作者の進化した形態なのだ。

ステージ九の矢の隣に「道具制作集団」という言葉を付け加えてほしい。

ステージ十――**「大気圏外心理学」**の初版では、この進化のステージは思春期に体験される「性的役割の形成」を強調した。

今回の版では、ステージ十が「封建的な」種の進化のステージを表していることを強調してきた。高度に組織化された封建

動きのマスターを表現してもらいたい。そうしたらそれを「哺乳類の威圧反射」と命名してほしい。

ここで問題がある。いくつかの種が地上を走り回り、嚙み、飛びつき、吼え、威圧すべく神経学的に配線され、解剖学的に組み立てられていることをわれわれは知っている。人間の遺伝子プールの中にある一定程度の個人はこうした役割を演じるよう遺伝子的に設計されているのだろうか？

ステージ六――強力な捕食段階の次にくる論理的な進化のステップは何だろう？　誰がジャングルの獰猛な主に太刀打ちできるだろう？　集団すなわち社会的な動物である。

霊長類の群れは、**DNA**をより高い複雑性のレベルにあげる遺伝子戦略として木登りと口頭によるコミュニケーションを用いた。

下向きの矢の隣に「グループ・コミュニケーション」という言葉を書き添えてもらいたい。

ステージ七――次の三つの進化の段階は道具の使用を含んでいる。ステージ七は旧石器（棒と石を用いる）、ステージ八は新石器（最初の道具制作の段階）である。ステージ九は集合文化を導入する。心的な道具制作ステージは労働の分担を要求する。道具を作る前に、鉱石を掘り、輸送し、精練しなければならない。

個人の発達がこのステージの特徴である。子供は道具作りを模倣し（七）、道具を使った遊びを発明し（八）、道具を使って遊ぶ集団に加わる（九）ことを学ぶ。

灰色の矢を逆転させてもらいたい（このステージでは、個人が象徴的環境や人工的環境を「拾いあげる」）。矢に「旧石器の道具」と書き添えてもらいたい。

S.M.I^2.L.E.　S.M.I^2.L.E.　S.M.I^2.L.E.　S.M.I^2.L.E.

環境から栄養を吸いあげているのだから、どうかステージ一の矢印の方向を逆転させてもらいたい。そして「刷りこまれた吸啜反射」と書き加えてほしい。

ステージ二の矢印は有機体の身体／脳の内部に位置づけられている。これは誤りである。図の中心から環境に向かって下降する矢印を描き、「刷りこみにかけられた噛む反射」と書き添えていただきたい。そのほうがピッタリくるのではないだろうか？

ステージ三の矢印は種と個人の両生類的な反射を表している。それは正しく地上に向かっている。この矢印に「刷りこみにかけられた匍匐反射」と書き添えていただきたい。

これらの段階の説明は、社会的昆虫がさまざまな段級に、たとえば働き蜂、雄蜂、女王蜂といったように分けられているように、人間がさまざまな行動の役割を演じるよう遺伝子的に配線されていることを示している。

ある人間は牡牛座の役割を演じるよう厳密に配線されているのだろうか？

誰が知ろう。そうした考えはほとんどの人にとって妨げになるだけだ。それは科学チェックに値するだろうか。

ステージ四――ここで遺伝子の企みが厚みを増す！

精通しなければならない新しい環境が存在する。固い地面である。地上的な哺乳類の冒険がはじまる。

個人と種に三つの新しい反射が発現しはじめる。4. 逃走、5. 闘争、6. 集合化である。

ステージ四の矢印は間違った方向に向いている。矢印の方向を下方に変え、「逃走反射」と名付けてほしい。

ステージ五――灰色の矢を地面に向けて下向きにしていただきたい。何度かそれをなぞり、このステージに関わっている威圧と地上での

私は十二の星座を、何世紀にもわたって偉大な心理学者たちに用いられ、おそらく相当の民衆の智恵を救いあげてきたパーソナリティのタイプとみなす。それらが順序よく並んでいるという事実は非常に興味深い。双子座は牡牛座の次、蟹座の前にくる。これはパーソナリティ・タイプのステージあるいは順序をほのめかしているように思われる。

刑務所に一人で監禁されていたあいだ、その時間を使って私は、統計分析を行い、古代の古典的な序数システムを現代の発達論と結びつけようとした。私が本書に星座を収めたのは、これらのシステムの科学的研究を奨励したいがためである。これはあまりいいアイデアではなかったかもしれない。オカルティストは自分たちの信念を科学的用語に翻訳されるのを好まなかった。そして科学者たちはいうまでもなく、これを私の愚かな逸脱とみなした。

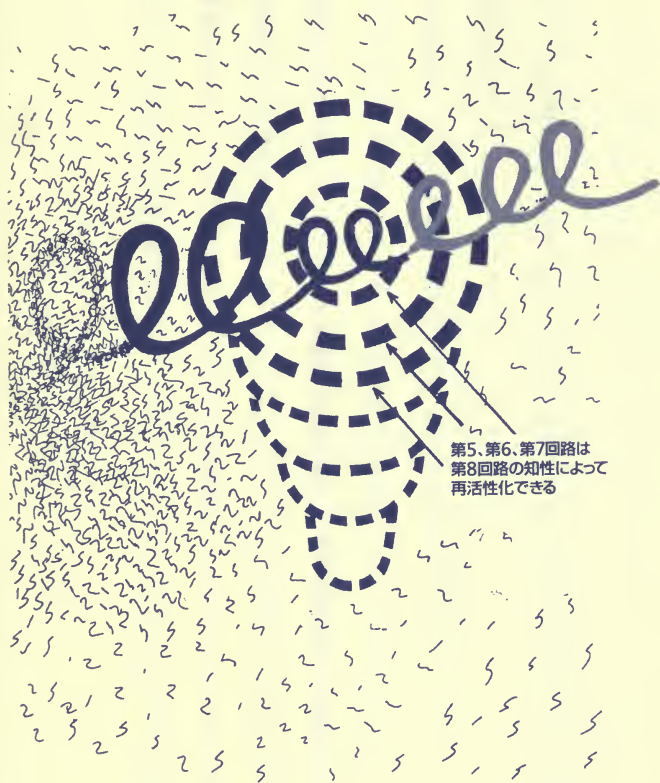
人々が私の星座について尋ねる時、私は典型的なサイバー人間の反応をする。その時々によって好きな星座を選ぶのだ。二時頃、ふつう、私は魚座になり、夢見がちになってアメーバに似てくる。真夜中ごろになると、蠍座や射手座になることを好む。

ステージ二――各ステージが種の進化によって定義されることに注意していただきたい。一は無脊椎動物、二は魚の脊椎動物というように。各ステージはまた個人的な発達のステージとしても定義される。一は乳呑み児であり、二は噛むステージである。言及は星座だけではなく、タロット・カードやギリシャ・ローマの神話にもなされている。これは原始的な心理学システムを現在の発達段階の理論に結びつける試みの延長である。

ステージ三――注意深い読者は、説明されている段階が灰色に色づけられていることにお気づきだろう。ステージ一の矢印は環境から上方に向かい、このステージの受動性を表している。実際には、矢印の方向は逆転すべきである。幼児（アメーバ）は積極的に

補遺　図についての注釈

第二部は進化のステージを規定する二十四の図を表している。各図には注釈がつけられている。最初の十二の図は進化の最初のステージを扱い、人間が各ステージでどのように環境を刷りこむかを示している。完璧に社会化された人間（ステージ十二）は、自分を子宮惑星の集団（遺伝子プール）に結びつける十二の刷りこみをもっている。図十三から二十四は、十二のポスト幼生期のポスト集合的個人のステージを説明する。ここでは個人は支配的な遺伝子プールにひっかけられてはおらず、環境のあらゆる側面に意のままにつながったり、その繋がりを外したりすることができる。

ステージ一――遺伝子のステージと星座を結びつけることは、古代の前科学的な世界を現代のステージや局面の概念に関連づけようとするどちらかといえば無謀な試みだった。本書はオカルト占星術に深く関与するものではない。誕生時の惑星の位置が後の行動に関連する証拠はない（二、三の研究者が重要な繋がりを報告してきたが、それも十パーセント以下の確率でしかない。その相関関係はいかなる因果的な繋がりをほのめかすものでもないことを心にとめておくことが重要である）。私は占星術を愚かで、本気で受け止めるに値しない企みだが、比喩的な価値をもっているものと考えている。

ステージ二十四
水瓶座二
神経原子的融合

ステージ二十四は、第八の脳が他の神経原子的知性と繋がる時に活性化される。系統発生的に、神経原子的な、家庭化－ブラック・ホール的融合は水瓶座二と呼ばれる。

れないと考えられている。

非常に興味深いことに、多くの物理学者たちは、核内の素粒子がブラック・ホールである——原子核をまとめている「強い力」が超重力的なものだ——という結論に達しつつある。

もしこの理論が本当なら、ブラック・ホールは最後の融合を提供する。最後の渦巻。万物の宇宙を万物の無と繋ぐリンケージ。

ステージ二十四：超生理的融合

これまでの七つの回路で見てきたように、探求的な受容性の後に、統合的な制御がつづき、その次に、同じコンテリジェンスのレベルで他の要素との共生的な融合が起こる。

神経遺伝子的融合（星の光）は星間規模の力の場を含み、統一された銀河意識をほのめかす。

宇宙を包含する重力、電磁気力、核力の力の場が連続した意識的ネットワークの一部であるという推測がなされる。

銀河的融合についてのすべての終末論的な論議はブラック・ホールの現象を含まなければならない。反物質の渦。

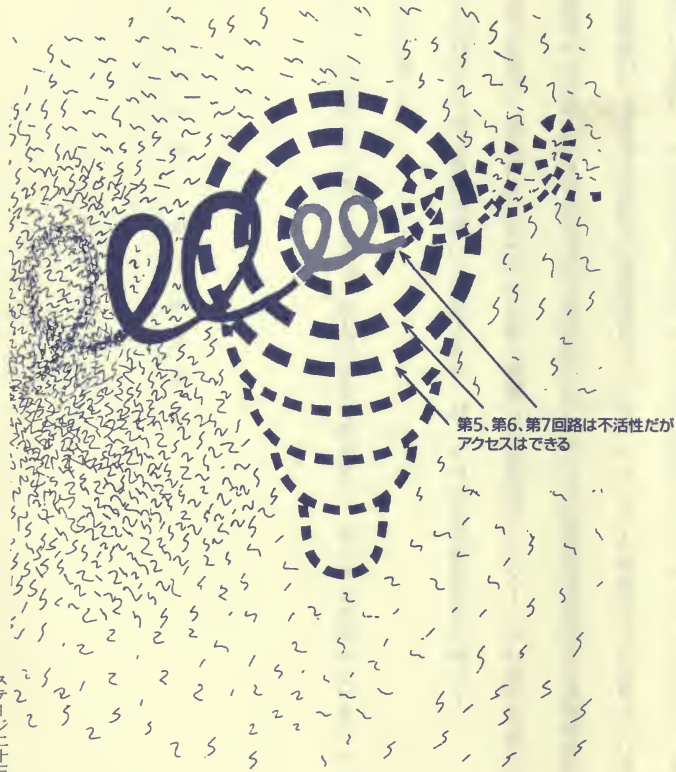
多くの天文学者は、われわれの銀河には何百万というブラック・ホールが存在すると信じている——実際、銀河の中心はブラック・ホールかもしれない。

ブラック・ホールの強烈な引力は周囲の物質を吸引する。ブラック・ホールはポジの宇宙の反物質的、反エネルギー的な確当部分かもし

ステージ二十三

山羊座二

神経原子的知性──超生理的

第5、第6、第7回路は不活性だがアクセスはできる

ステージ二十三は、第八の脳が原子核エネルギーの信号を統合し、操作しはじめる時に活性化される。系統発生的にみると、このステージは超生理的で、山羊座二として人格化される。

子が相互作用した場合、それらはある意味において、量子を構成するレベルで、永遠に結び合わされる。……一度、われわれは何かと、あるいは誰かと相互作用したら、それらと永遠につなぎ合わされるのだろうか？　探魂法について、また人格の解釈や「しつこさ」についてベルの定理は言うべきなにをもっているのだろう？　切った髪の毛や爪は敵の魔術師によって悪用されぬよう気をつけるべきなのだろうか？　どのようにしたらこの不思議な繋がりを体験的に育むことができるのだろう？　手相占い、マッサージ、性的融合のうちベル・タイプの相互的繋がりを育むのに一番効果的なのはどれなのだろう？　ホット・タブで共に坐るというのはどうなのだろう？　……意識の隠された変数の理論に対して展開された反論と同様な理由で、ベルの驚くべき定理は人間の出来事ではまったくなんの役割も果たさないのかもしれない。……ベルの定理が実際に分離性についてわれわれになにを教えてくれるかをひるまず考えることは、個々の科学者の心／世界の中に同様の非局所的な状態を生み出す一種の霊的な修練として機能するのかもしれない。それを理解する人々にとって、ベルの定理は、物事がかくかくしかじかであらねばならないというわれわれの素朴な考えをやすやすと乗り超える自然の能力を思い出させてくれる、強力なイメージとして働く可能性がある」

（ニック・ハーバード）

「量子を構成するエイリアンのライフ・スタイルに関する「大気圏外生物学」への斬新な最初のアプローチは、いわゆる物理現象を単なる物理的なものとして扱うのではなく、聖書の中に類推やカバラ的な推論による秘密のオカルト的な意味が見出されるのと同じように、現象世界を「意味」をもったものとして扱うものである。われわれは物理的世界を広大な持続する「メッセージ」として解釈し、刻々と語られつつあるものに対して敏感であろうとする。こうした見解に立つと、量子力学的な平均値をもった物質科学全体が、物質の複雑な活気に満ちたシンポジウムの「言説的な統計」を表すにすぎないものとなる。それは個別的な出来事そのもの――特定の情景――であり、われわれの周囲のいたるところで生じている歌への参加を含んでいる」

「量子レベルの底に存在する本質的な不可解さの観念のいくつかは最近の定理であるJ・T・ベルの定理によって提供される。その定理は言う。もし量子力学が正しい結果を与えるとすれば、量子を構成する世界は本質的に「非局所的」である――瞬間的な関係の織物の中で密接な方法でつなぎ合わされている――に違いない。この見解によると、一旦、二つの粒

ォーカーの理論は二つの世界を想定する——Pの物理的世界（すなわちエネルギー、長さ、空間、時間などといった物質変数）とCの意識的な隠された変数の世界。PとCが一緒になって存在の全宇宙を構成する。不活性物質はPでできており、われわれは意識的な時、Cの生命——スピリットの生命——に満ちている。……中枢神経系のネットのような領域では、（シナプスの極性を消すそれぞれのパルスで）ごく少量の神経伝達物質しかリリースされない。スピリットが人間の形態を取るのは、脳のこうしたゆるく抱き合わされた領域においてである」

「隠された変数の世界（Cの生命）との存立可能な繋がりを通して、われわれは通常の物理的法則を侵犯するかに思われるプロセスに参加することができる。われわれの共同参加のあるものは、Pの世界の中で、超心理学的な現象として表面化する。われわれ以外にどんな種類のエンティティがCの生命の量子構成要素の世界を占拠しているのだろう？　それは伝説に聞く飛び去ったスピリットたちのサマーランドの世界なのだろうか？　悪魔や天使の一団を引き連れた目的をもった神のような存在の不可視の顕現なのだろうか？　Pの物理的世界からは完璧に独立した複雑なエイリアンの文化が、現象世界の表面下にはびこっているのだろうか？」

学者たちをひどく落胆させた。けれども、かれらの中でもより知的で柔軟性をもった何人かの学者は、この深く根差した不確実性をなにか有益なものに変えられるのではないかと考えた。原子構成要素のレベルで新たに発見された自由は、めいめいの人間が内部に抱えている意志の自由の主観的体験と同じものではないだろうか？　心／身の問題に対するこの適切な回答は物理学の共同体によってさまざまな理由からほぼ満場一致で拒絶されてきた。たとえ、脳の中のいくつかの小さな臨界系が不可解にも量子的な揺れの影響をこうむることが発見されたとしても、これらの揺れは無作為のものにすぎないだろう」

「無作為性は、われわれが体験しているように思われる内的自由と対立する。無作為性は自由の反対である。簡単に言えば、そのようにして意識の隠された変数の理論に対する反論が繰り広げられる。……こうした風潮の中で、E・H・ウォーカーは基本的な原子構成要素の混乱によって提供される入口を通して、心を物質の世界に侵入させるための可能なモデルを詳細に探求する決意をした。……ウォーカーは中心的な定理として、量子力学的な揺れによって支配されているすべてのシステムは意識的であると主張する。……とりわけ人間は量子の揺れと物質を繋ぎ合わせる直接的な例である。……ウ

ある。脳は記録装置である。自然をL・Mの象徴的精神が作りあげる三次元モデルに合わせるのではなく、われわれの神経系が生のデータによって刷りこまれるのを許し、DNA、エレクトロン、原子構成粒子のように思考-体験することをわれわれは学ばなければならない。

「今日のミクロ世界の物理学のすべては量子物理学である。いかなる競合理論もない。量子力学は世界を偶然の分離した出来事からなるものとして思い描き、基本的に統計的な方法で記述する……集合性の理論である量子力学は分離した出来事が組み合わさって平均値を作ることについては一切語らない。……量子力学がこれらの根本的な出来事の現れについて沈黙しているというのはまったく真実ではない。……これらの出来事は本当に法則をもたないのだ——量子的な無法者。アインシュタインをして、神が宇宙とサイコロ遊びをするとは信じられないと言わしめたのは、量子の図のこのアナーキックな側面だった。

こうした量子的出来事を説明し、量子物理学者を政府援助のカジノからひっぱり出して、再び「真の」力学へと引き戻すことができる超理論はあるのだろうか？　そのような理論は〈hidden-variable theories〉（隠された変数の理論）と呼ばれる。……量子レベルのラディカルな無政府状態の発見は予測可能な時計じかけの宇宙に希望を託してきたヴィクトリア的物理

子といったコンテリジェンスの単位の意味論的な意味を突き止めることが、超生理的「脳」を理解する最初のステップである。

こうした考察は空想的に思われ、「頭の固い」科学者からさげみすの目で見られるかもしれない。しかし、それらの実用性を証明する良い例が出てくるかもしれない。すべての核物理学者の考えは宇宙論的な概念や目的論的な概念——それらがどんなにあいまいで無意識的であっても——によって影響を受ける。すべての科学者は子供時代に哲学体系を教えられ、それらの初期の宗教的考えが、たとえ暗黙のうちにではあれ、後年の自然観に甚大な影響を及ぼす。実際、子供時代の無意識の宗教的前提は、核物理学者がデータを扱う場合の、基本的な指針や要因となるのだろう。現在、アメリカ物理学協会の会員を構成している科学者たちが、三十年前の子供時代、日曜学校で恒星間神経遺伝子的な理論に定期的にさらされていたと想像していただきたい。もし実際にそうなら、最初の植民宇宙船がすでに太陽系を離れ、われわれの超生理的信号の理解は、はるかに進んでいただろう。

未来の進化の可能性を期待できないのは、遺伝的に愚かなことである。どのような変異の投影であれ、現在の科学的データに基づいている限り、なにもないよりましである。われわれは未来を探さないかぎり未来を見ることができないのだ。

同じぐらい重要なのは、科学的データに生命を吹き込み、人格化する必要性である。われわれが自然の法則、原子や原子構成要素の出来事について知っていることはすべて、神経系によって仲介される。すべての科学は神経エコロジーである。宇宙の観察はすべて神経学的な出来事で

ステージ二十三：神経原子的コンテリジェンス

先行ステージは高エネルギーをもった原子核の言語に脳をさらす。

超生理的コンテリジェンスは核粒子を統合、処理、組織し、原子を生み出す。

このステージでは、宇宙内のあらゆる構造を含む基本的エネルギーが管理可能となる。超生理的コンテリジェンスが原子、DNAの鎖、分子、神経細胞を構築する。そして核粒子と重力場を操作することによって、あらゆる形態の物質を彫り、設計し、構築する。

進化のこの時点では、コンテリジェンスはもはや身体、神経細胞、DNAの設計図を必要としない。宇宙は一つの神経系——コンテリジェンスのネットワーク——で、核を構成する構造物が基本的な神経信号として働くのかもしれない。力の統一場の時空間座標は恐らく、生物神経系のそれ——一秒の何十億分の一のタイム・スパンと何十億光年が共存する——とは非常に異なった秩序をもっているのだろう。

核物理学者は現在、原子構成要素の出来事を表すための語彙を開発しつつある。ミューアン、レプトン、ボソン、ハドロン、Jサイ粒

ステージ二十二

射手座二

神経原子的受容性——超生理的意識

第7回路は
核エネルギー信号を受信できる

第6回路は
核粒子エネルギーを刷りこむ

第5回路は再活性化できるが、
第8のエネルギーレベルでは存在しない

ステージ二十二は、神経遺伝子的な脳が原子核信号を受け取りはじめる時に活性化される。系統発生的にみると、このステージは超生理的で、射手座二として人格化される。

結果生まれたのかもしれない。

われわれの身体の各細胞は原子からなっている。それぞれの原子の核構成粒子の出来事が基本的なプロセスを決定する。だから、われわれの身体や神経系は核構成粒子の出来事に依存すると言うことができるのだ。

第八の進化の時期は核信号の神経遺伝子的知性による信号のやりとりを含んでいる。その会話は明らかに存在する。ポスト人間的コンテリジェンスが核構成粒子のメッセージを受け取りはじめると、ステージ二十二が達成される。人類は惑星を離れた後に接触する高次の知性体によって核信号を受信する仕方を教えられるのではないかと予想される。

神経原子的意識の受容段階(二十二)は他の受容段階(十三、十六、十九)と同じように、快楽主義的な探求を含んでいることが予想される。必然的に次のような実際的な提案がなされる。核物理学者はノーベル賞を獲得したいという希望で光子を攻めたてる操作的な科学者としてではなく、新しいエネルギー・レベルの力とスリルに満ちた啓示を体験しようとする若者として、自らの研究する現象にアプローチすべきだということだ。そのような控え目な姿勢はより複雑な理解(ステージ二十三)と融合の様式にかれらを備えさせてくれるだろう(ステージ二十四)。

神経原子的コンテリジェンスのステージ(二十二、二十三、二十四)は、ここでは、人間の進化の未来について考えることや研究することを刺激するために、人格化された形態で提示される。物理学者たちは現在、エネルギー言語を作りあげる高速の粒子をつきとめるために核構成粒子の領域を研究している。これらの科学者によって用いられる道具は、実験的なハードウェア(直線的な加速器など)によって拡大され、感じやすくさせられた人間の神経系である。大気圏外心理学は核物理学者が核構成粒子の出来事を人格化し、体験できるようにする概念を提供する道を探る。

科学者が自然のプロセスに体験的に感情移入することに成功する時、自然の出来事の理解に大きな飛躍が起こる。有機化学の基礎を築いたケクレの蛇の夢を思いだしてもらいたい。そして、原子の出来事を体験するために物理学者が用いたビリヤードのモデル。

基本的なエネルギー・プロセスの直接的な体験を伴う啓示を証明するもっとも劇的な例をアルバート・アインシュタインの人生に見ることができる。アインシュタインは明らかに第三回路の象徴で自己表現することに悩まされなかった。すなわち、七歳になるまで話をしなかった。

伝説の語るところによれば、スイスで亡命生活をしていたこの脆弱なユダヤ人少年は、光子になることがどんなことかを想像することに多くの時間を費やした。

エネルギーと物質との基本的な等式を書くことのできるアインシュタインの能力は、自分自身の身体や脳の中で光速の旅行——これについては何世紀も前から神秘家やヨーガ行者が報告してきたが、かれらは数学的な形でそれらを象徴化することはできなかった——の意味を体験した

ジェンスは宇宙の台本を書くのだ。DNAを含む分子は高次の知性によって伝達されるテキストであり、宇宙的な神経系の超神経細胞なのだ。

そのような推測は「並み外れている」が、信じられる点では正当派のキリスト教、イスラム教、ユダヤ教、ヒンドゥー教、仏教などの宇宙論にひけをとらない。ましてや、物質的科学者たちの盲目の偶然性という蓋然性の理論などよりはるかに信じられる。神経原子核的理論を自動的に拒絶する前に、読者はより論理的で自学自習的な宇宙論を提唱するよう求められる。*

* 神学的に洗練された読者は、大気圏外心理学が自学自習的な文脈で科学的な言語用い、古典的なカソリックの教義を提示していることに気づくだろう。魂(DNA)が天国(惑星間移民)に昇り、聖人のコミュニティ(先行のDNAコンテリジェンス)に加わり、創造者と交わり、融合する。

高次の知性を、恒星間の空間／時間の次元を横断してつながり、コミュニケーションし合う原子核内に位置づけることは、きわめて実用的、経験的な決定であり、控え目に見ても、より高度な生物学的知性を細胞核のような小さな空間に見出す分子生物学の縮小化傾向と一致する。

神経遺伝子的理論は、惑星からの移民の後、ポスト幼生期の人間はDNA-RNAの信号を受信(十九)、統合(二十)、伝達(二十一)することを学び、われわれのものよりはるかに進化した遺伝子的脳とコミュニケーションし、共生的に結びつくだろうと主張する。これらの古くて賢い脳から、人類は恐らく核構成粒子のアルファベットを解読し、そのような粒子によって伝達される信号を受信し、体験する方法を学ぶだろう。

このプロセスの論理的推測はＤＮＡを含む分子を設計し、構築するマスター・プランを原子核内に位置づけることである。

高次の知性を原子核内に位置づけることは、目的論的で推測的である。それは、他のみんなは避けているが、哲学者には避けることができない、究極の挑戦的な問いに対する単純な自学自習的回答である。次のような質問にしつこく直面させられるのは、哲学という職業につきまとう災いである。

「よろしい、遺伝子的知性は身体を超えて生き残る、不死の目に見えない魂だとあなたは言う。ではＤＮＡはどこからやってくるのか？」

「よろしい、あなたの言う通り、生命は進歩した遺伝子的知性の形態によってこの惑星上に植えつけられたとしよう。では誰がＤＮＡをこしらえたのか？」

現在ある科学的な証拠に基づくなら、高次の知性をもった創造者に関する質問に対する最良の回答は、核物理学と量子力学からやってくる。基本的なエネルギー、超生理的なコンテリジェンスは恐らく原子核の内部にある。

大気圏外心理学のマニュアルである『エネルギーの周期律表』と『生命のゲーム』の中では、元素の周期率表が進化の設計図を伝達する基本コードであることが主張されている。それぞれの化学元素は基本的なエネルギーのアルファベット文字とみなされる。それを用いて核コンテリ

ステージ二十二：超生理的受容性

読者は今や、大気圏外心理学が銀河的スケールで働くコンテリジェンスの階梯を想定することに気づくだろう。

地球への刷りこみを撤退させた後、人間のコンテリジェンスは身体に中心を置く(回路五)。

進化の六番目の時期は、知性が身体から引き、神経系に電磁気的なトランシーバーとしての刷りこみを行う時にはじまる。

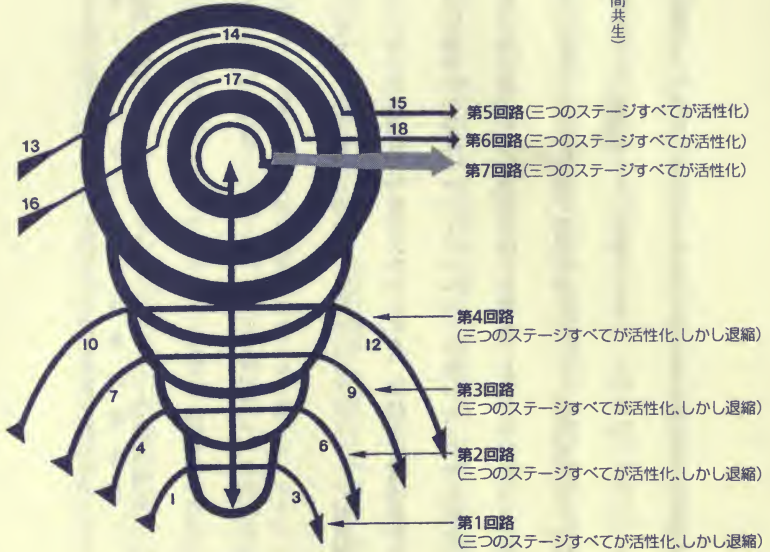
進化の七番目の時期は、コンテリジェンスがRNA-DNA構造に中心を置く時にはじまる。

八番目は神経遺伝子的な意識が原子を構成する量子力学的なコンテリジェンスによって刷りこみを行われる時にはじまる。

逆説は一貫している。時間／空間でのエネルギーの規模が広がれば広がるほど、脳の中心は縮小する。

身体は脳によって制御され、指揮される。

脳は細胞核の内部に、数十億年の進化の青写真を含む遺伝子的知性によって設計／構築され、制御される。

ステージ二十一
蠍座二
神経遺伝子的融合（異種間共生）

ステージ二十一は、第七の脳が他の神経遺伝子的なエンティティと繋がる時に活性化される。異種間共生。アミノ酸信号によって行われる神経遺伝子的エンティティ同士のコミュニケーション。すべてのポスト地球的人間はこのステージを通過するよう設計されているが、この役割を演ずべく遺伝子的に配線されている人物は蠍座二と呼ばれる。

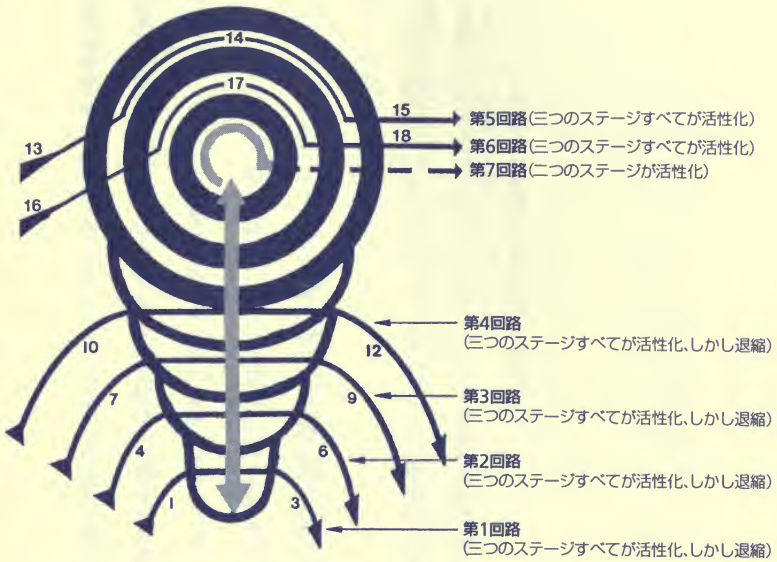
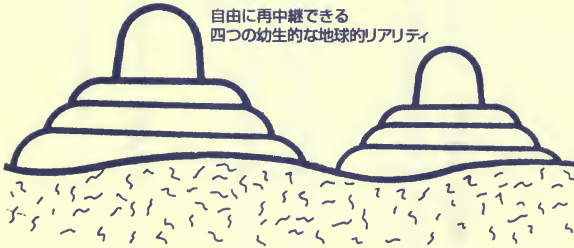
高次の知性を特徴づける鍵は、種の間の直接的なDNA-RNA-神経的コミュニケーションである。遺伝子工学者(ステージ二十)が遺伝子を他の種と融合させはじめる時、意識的な異種間共生が起こるだろう。これらの遺伝子的融合でもっとも意義深いのはわれわれより進んだ種——すなわち未来のわれわれ——との融合であろう。

神経遺伝子的融合：他の遺伝子的知性とのコミュニケーション。異種間の共生。ＤＮＡのエネルギー・レベルにおける有機体の連結。

異種間の生殖――意識的及び計画的。

種の恒星間集合化の形成。種子の協調。種の知性間の創意に富む会話。

ステージ二十の神経遺伝子的魔術師がＤＮＡ-ＲＮＡの会話に向上すると、すべての有機的生命が統一された言語体系であることを理解するようになることは明白である。

アラン・ハリントンは生命の目的を理解した最初のポスト・アインシュタイン的哲学者の一人である。「人間とは……ＤＮＡが自らを理解する方法である」。人類は、運命づけられた子宮としての惑星からすべての生命を旅立たせる一時的だが重要な役割を果たす。人間は過去と未来のすべての種のために働くＤＮＡ工学者である。宇宙移民の後、神経学的に進歩した不死の種がホモ・サピエンスから進化するだろう。

ステージ二十
天秤座二
神経遺伝子的知性

ステージ二十は、第七の脳が神経遺伝子的信号を制御、統合、組織し、染色体を操作することを学ぶ時に活性化される。すべてのポスト地球的人間はこのステージを通過するよう設計されているが、この役割を演ずべく遺伝子的に配線されている人は天秤座二と呼ばれる。

不死性はDNAの制御——ステージ二十——を通して達成される。

遺伝暗号を制御するには、DNA-RNA信号を受け取り、体験的にそれらと共鳴、同一化する必要がある（ステージ十九）。

アラン・ハリントンが神経遺伝子的魔術の外的な側面を提示した。

「……救済は医学工学以外のなにものにも属さない。……人間の運命は第一に、自分の技術的な進歩の適切な管理にかかっている。……われわれの救済者は聖域ではなく化学や生物学の実験室で白衣を着ているだろう」（『不死の人々』ランダム・ハウス、一九六九年）。

ハリントンの賢い分析が指摘しそこねているのは、ステージ二十の遺伝子工学者が神経遺伝子的信号に開かれ、それらの信号を意識する自らの脳を基本的な道具として活用するだろうということである。DNAの神経細胞の繋がりだけが、不死性や他の種——遺伝子的なアルファベットにおける異なった文字を表す——との象徴的な連結を生み出すことができる。

ステージ二十：神経遺伝子的知性

遺伝子信号の選択、識別、組織、評価。

神経遺伝子回路はＤＮＡのように考えはじめ、ＲＮＡの語彙を学ぶ。そして、何十億年の生命のネットワークを包含し、種の生存期間の中でそれを処理する遺伝子的知性と同一化しはじめる。

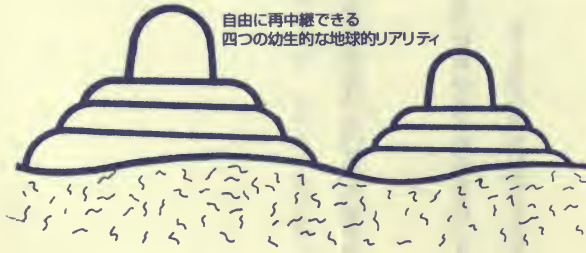
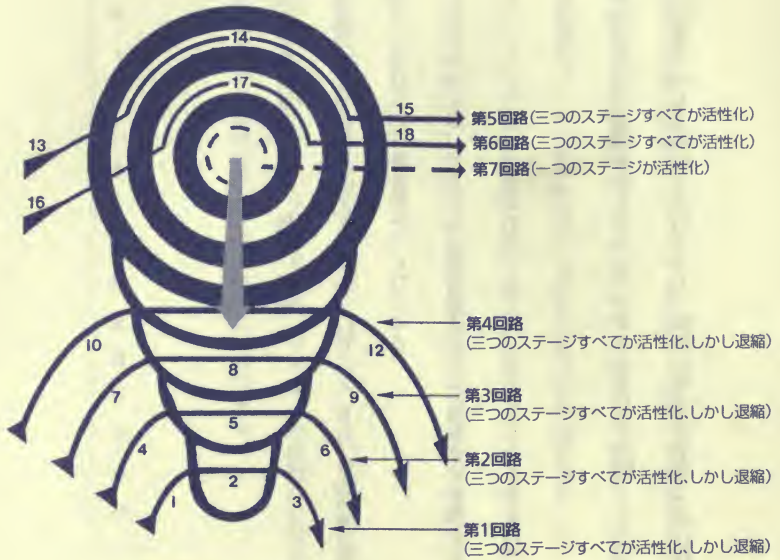
幼生期の知性には、ＤＮＡの設計図の複雑さや豊富さを説明する言語はないが、ＤＮＡのアルファベットを理解し、グアニン、アデニン、シトシン、チミンという語彙で書かれているアミノ酸のスクリプトを解読し、書き換えることができる遺伝子的な魔術師、ＤＮＡ工学の出現を予測することはできる。

神経遺伝子的知性の機能はむろんプログラムされた加齢プログラムを止めることである。

生命の基本的な目標は不死性である。知性の増大（神経制御）と宇宙移民は寿命延長プロセスにおける補助の役割を果たす道具にすぎない。

ステージ十九

乙女座二

神経遺伝子的受容性

ステージ十九は、神経遺伝子的な信号に変異が起こると、活性化される。神経系は分子レベルでDNA暗号に刷りこみをし、RNA-DNA信号を受信する。すべてのポスト地球的人間はこのステージを通過するよう設計されているが、この役割を演ずべく遺伝子的に配線されている人々は乙女座二と呼ばれる。

史をもつ遺伝的パノラマの広大な設計図のサンプルを提供し、垣間見せてくれる。

神経遺伝子的意識は過去のパースペクティブに限定されてはいない。未来のＤＮＡの青写真——来るべき変異の（刺激的かつ脅威的な）**Psi-Phy** ヴィジョンや試写——の入手も可能である。

すべての新しいコンテリジェンスのレベルの第一ステージが受容的、受動的な観客であることをわれわれは見てきた。このように、神経的なエンターテインメントと探求が変異をもたらすステージ十九の働きなのである。

第七回路。DNAからの信号を受け取る神経系。

DNAは神経系を設計・構築し、RNAによって仲介される身体の細胞や神経細胞との間に、監督的、再構築的なコミュニケーションを維持する。

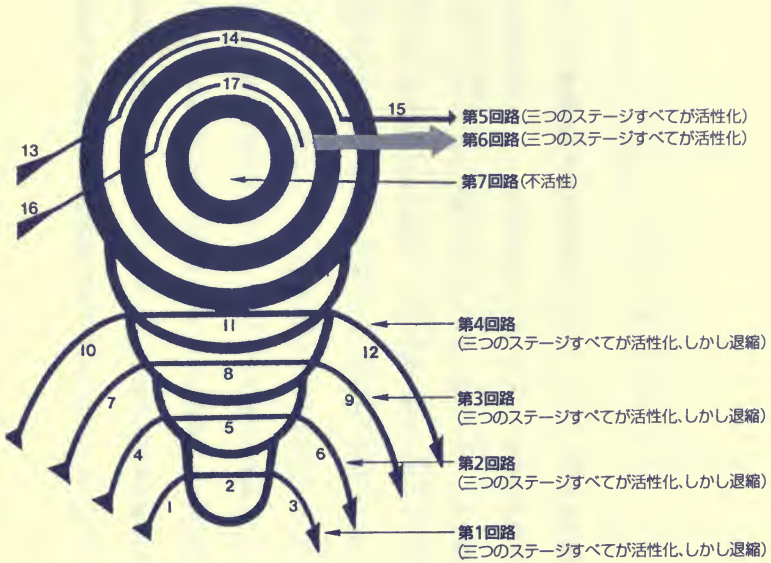
神経系はたえずDNAやRNAの信号を受け取っている。あらゆる神経細胞の核の内部には、この惑星上の生命の起源にまで遡る身体的な転生の鎖の記録を含むDNAのマスター・プランが「生きて」いる。

遺伝学者たちは現在、DNAと身体、DNAと神経系の間の会話を解読する方法を学びつつある。

神経系の第七回路が活性化されると、DNAからの信号が意識化される。この体験は準備のできていない人間にとってはカオティックで、混沌としている。何千という遺伝的な記憶が点滅し、種の意識と進化の分子的な家族写真アルバムが展開されるのだ。この体験は数十億年の歴

ステージ十八
獅子座二
神経電気的融合

第5回路（三つのステージすべてが活性化）
第6回路（三つのステージすべてが活性化）
第7回路（不活性）
第4回路
（三つのステージすべてが活性化、しかし退縮）
第3回路
（三つのステージすべてが活性化、しかし退縮）
第2回路
（三つのステージすべてが活性化、しかし退縮）
第1回路
（三つのステージすべてが活性化、しかし退縮）

自由に再中継できる
四つの幼生的な地球的リアリティ

ステージ十八は、第六の脳が他の第六の脳の存在と繋がり、神経電気的速度でコミュニケーションする時に活性化される。すべてのポスト地球的人間はこのステージを通過するが、この役割を演ずべく遺伝子的に配線された人間は獅子座二と呼ばれる。テレパシー的な繋がり。

と速度での受信能力はポスト地球的存在のために設計されている。

記録された歴史のあらゆる世代において、早熟に進化したある人々が第六回路のコンテリジェンスを示すのは真実である。心霊術者、魔術師、霊媒、啓示的な予言者、偉大な神秘哲学者などだけではなく、この数世紀、あまりに多くのことをあまりに素早く見たために精神病院にひっぱられていった愚かな学者や不思議なエキセントリックな天才のことを言っているのだ。あまり文明化していない種族は、不思議な心の知覚が未来の資質の徴候であることをしばしば理解し、第六回路が開かれた早熟な人々のために社会的に認知された役割をあてていた。

尋常ではない神経の能力——テレパシー、ESP、念力、不思議な数学的能力や象徴的能力——がある人々に起こることは疑いないことだが、そのような人々が幼生期の社会の中にいかなる立場も見出せないことも真実である。たとえば、ESPがポスト地球的な資質であるということはありそうなことだ。こうした能力を授けられた人々は、声帯をもった魚や象徴的な能力をもった哺乳類の立場にあると言っていいかもしれない。四千マイルの大気の沼の底でテレパシーを試みることは、水中下で喉頭の会話を試みるようなものだ。一旦、水から出てしまえば、新しい象徴的会話の形態が可能になるという事実を汚れや泡が隠すのだろう。一旦、われわれが惑星を離れて移民したら、テレパシー的(神経電気的)なコミュニケーションのモードがありふれたものになるかもしれない。

神経電気的融合——二人以上のコンテリジェンスの間のシナジェティックなコミュニケーションが第六回路で起こる。テレパシー。

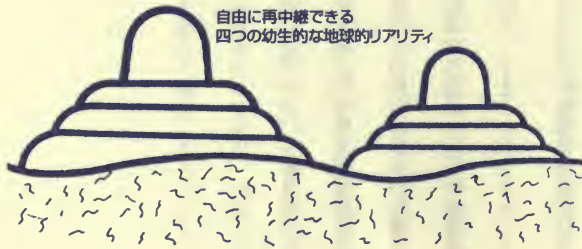
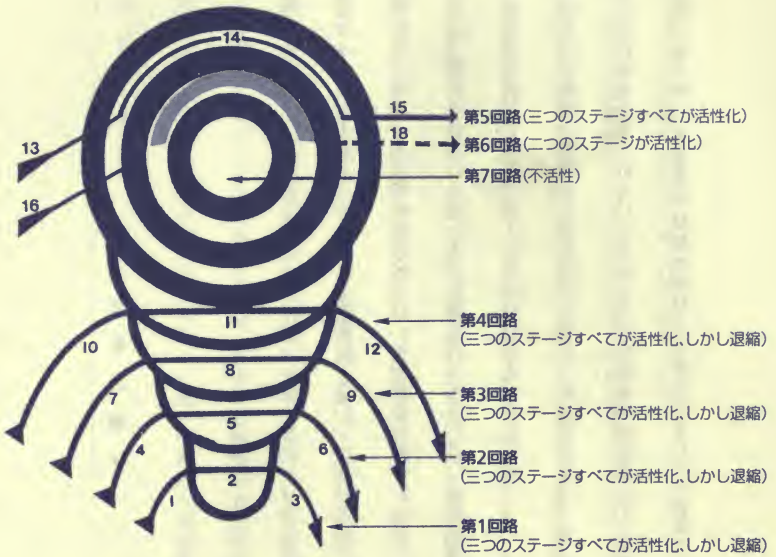
人間のコミュニケーションのもっとも高度な、速い、複雑な形態。二つ以上の神経系が電磁気的な速度で信号を受信し合う。

電磁気信号を交換する人間の脳の能力はいまだ開発されていない。脳が、われわれの作った電子機械が鈍感すぎて拾いあげることができない信号を解読するよう設計されているということはありうることだ。神経物理的コンテリジェンスの発達は、生物的装置だけにできる複雑なメッセージの受信を許容する受信装置を設計することを可能にするかもしれない。

人間は筋力を増幅する機械を組み立ててきた。同様な方法で、サイボーグの神経電気的装置はコンテリジェントなメッセージを遠くにまで伝達することを可能にするかもしれない。そのような神経物理的信号はL・M象徴ではなく、直接的な神経エネルギー単位からなっている。

ここで、脳の第六（神経電気的）回路が地球上で生存するための器官でないことを再度述べておかなければならない。神経電気的な強烈さ

ステージ十七
蟹座二
神経電気的知性

14
15
第5回路(三つのステージすべてが活性化)
18
第6回路(二つのステージが活性化)
13
16
第7回路(不活性)
11
10
12
第4回路
(三つのステージすべてが活性化、しかし退縮)
8
7
9
第3回路
(三つのステージすべてが活性化、しかし退縮)
5
4
6
第2回路
(三つのステージすべてが活性化、しかし退縮)
2
1
3
第1回路
(三つのステージすべてが活性化、しかし退縮)

ステージ十七は、第六の脳が神経電気的な信号を制御、統合、組織することを学び、身体的な刷りこみや幼生期の生存のための刷りこみがもつもろもろの限界に邪魔されない脳の神経電気を操作することを習得する時に活性化される。すべてのポスト地球人間はこのステージを通過するが、この役割を演ずべく遺伝子的に配線されている人間は蟹座二と呼ばれる。

それぞれの新しく進化した神経系の回路が、それに先行する回路を包含し、それらと相互に結びついていることにわれわれは着目してきた。第六回路は中心的な生命コンピュータである。それは他の五つの回路からの信号(と、これから見ていくように、RNA-DNAからの信号)を受け取る。これらの信号は最初の感覚的な位置はばらばらだが、脳に電気化学的な「音」として届く。第六回路の脳はまた、細胞内の分子の記憶バンクからの信号をやはり「オフ・オン」の音の形で受け取る。

幼生期の間、第六回路は四つの臍の緒的な回路からの地球上で生きていくために必要な信号を仲介することに主として関わっている。

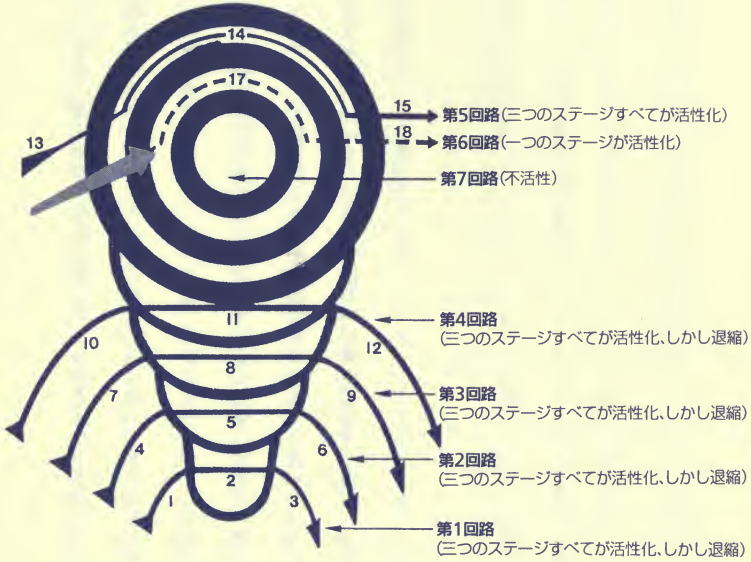
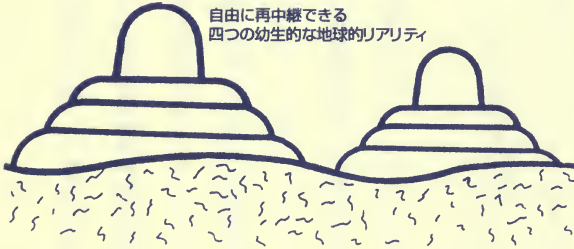
第六の脳が活性化されると、意識的な統合された制御を確立するために長期の複雑な鍛練が必要となる。

人類はたった今、脳が電子的な速度と周波数でコミュニケーションするために用いることのできる受信-演算装置であることを理解しはじめたばかりだ。第六の脳は幼生期の環境で作動させることはできない。また、「リアリティの島」を感情-筋肉、手-精神、家庭-社会のレベルで交換するニュートン的速度までその脳の速度を落とすことはできない。

第六回路の脳の能力はアインシュタイン的速度と相対性で応答する保護的な環境の中で——あるいは、少なくとも、他者が感覚受容器に幼生期の信号を押しつけることを慎むところで——もっともよく働く。

「皿」でなにかが受信されるのを待つ受容段階の受容性は混乱し、欲求不満を生み出すようになる。最終的に、人はその現象のメカニズムと法則的な意味について訝りはじめる。神経電気的知性は選択的、実験的、想起的となる。人は受動的な体験から学び、関与するエネルギーを制御し、方向づける方法を学ぶ。

本書のこの部分はとくに、神経電気的出来事の大まかな象徴化を表している。われわれが脳と呼ぶ電子トランシーバーをいかにして使うかということに関するマニュアルである。

神経電気的エネルギーについて「考える」ことのできる（つまり、L・M象徴を原子的な出来事と結びつけることができる）われわれの現在の能力は、最近の二つの科学的進歩に負っている。原子物理学の理論モデルと公理、神経伝達物質的なドラッグによって第六回路を活性化されてきた人々の体験報告である。

ステージ十六
双子座二
神経電気的受容性

ステージ十六は神経電気的回路の最初の探求的な局面である。身体と四つの地球上の刷りこみから解き放たれた脳は神経コンピュータとして働く。神経電気的な受動性。アインシュタイン的意識。自己は、エレクトロニクスを自己耽溺的に使用する生物電気的コンピュータとして定義される。すべてのポスト・ヒューマンはこのステージを通過するよう設計されているが、この役割を演ずべく遺伝子的に配線されている人間は双子座二と呼ばれる。

ステージ十六の神経物理的快楽主義は新しく獲得された体験に対する自然な若々しい反応である。幼生期の間に、脳は防御されて封印され、電磁気的な波動リアリティから断絶される。第三回路によって生み出される人工物や機械は体験を非人間的なものにし、粗雑にする。第五回路の重々しいゆっくりした身体機能はやっかい物である。神経身体的な体験は細胞器官の液体のゆっくりしたやりとりを通して濾過される。

けれども、第六回路の意識は水晶のように澄んで輝いており、電気的で摩擦をもたず、物質的慣性によって邪魔されない。生の直接的で滑らかな活動的エネルギーと戯れる自己耽溺の時期が発生することは理解できる。

ステージ十六において、神経電気的子供は電磁気信号と遊ぶ。次のステップは新しいエネルギー形態の知的な統合と再構築である。

エイリアンの知性なのだ。家庭化された同情的な旅行者が滞在している先住民の村に興味を示さないように、脳は地上の出来事に関心を示さない。

自分自身の自我の道具と素朴にもみなしてきた脳が、実際には、（主人のパーソナリティを、優雅な貴族が無知で下品な、教育のない頑固な、激しやすい田舎の居酒屋の主人に投げかけるような美的な視線で見つめる）エイリアンであるという発見は、準備のできていないLSDユーザーにとってはショッキングであり、羞恥と嫌悪の狂乱に導く可能性がある。いわゆる「バッド・トリップ」はしばしば、より高次の知性の鮮明なレンズを通して自らをみる「自我」以外のなにものでもない。

神経論理に照らして理解できるもう一つのLSD神話がある。神経物理的なドラッグが人々を窓から飛びだしたくさせる場合があるというのはなんの根拠もない伝説である。もちろん、窓から身を投げ出すという神話が自己実現する予言になることがあることをわれわれは知っている。一旦、噂が広まると、刷りこみを撤退された状態の傷つきやすさが、神話を現実のものにする可能性がある。「私は今、新しいリアリティを創造する自由をもっている。人はニルバーナの状態でなにをするのだろう？　そうだ、思いだした。飛び出せる窓を探そう。それがリーダーズ・ダイジェストが勧めていることだ。」

伝説の暗示的な力の背後にわれわれは進化的な意味を見出す。LSDはポスト地球的なコンテリジェンスを活性化する。人類の家は宇宙にある。人類の自然な環境は無重力である。われわれは重力のない自由の中で進化し、浮かび、泳ぎ、飛ぶようになるべく設計されている。

は基本的に正しいが、反知性的であり、前科学的である。

さらに優雅で、もっとも寡黙な教義である仏教もまたリアリティの波動的性格を受け入れるが、今、ここでの美的な受動性と無関心を強調する。カルロス・カスタネダの一連の著作は神経電気的体験――「分離したリアリティ」――のペヨーテ・カルト版を提示している。教育を受けていないヤキ・インディアンのドン・ファンは原子物理学に通じていないので、間違いなく神経電気的な体験を語るのに、魔術と力の語彙を用いるのだ。

ステージ十六はすべての受容的なステージ同様、探求的で子供じみた受動性に彩られている。ポップな目をしたアシッド・ヘッドは一過性の進化の形態である。ＬＳＤのような神経電気的ドラッグは地球上の生命のためには設計されておらず、幼生期の倫理家たちが危険視するのはもっともである。第六回路は地球外生命のために設計されており、現時点でのドラッグによるその活性化は、移民に備えるためのものである。神経物理的ドラッグは、子供時代の精神外傷的な刷りこみを「癒す」ために用いることができる。治癒や予備フライトのトレーニングのために用いられるＬＳＤタイプのドラッグは、再刷りこみの原理を理解し、自分自信の神経系を制御する方法を体験的に知っている知識ある専門家によって投与されるべきである。ＬＳＤの快楽主義的な「パーティ」での使用は危険を伴う。直接的な波動リアリティのエクスタシーが幼生期の報酬の喜びや物質的快楽をはるかに凌駕するほど強烈であること、そして、存在論的な啓示が基本的なアインシュタイン的リアリティ(刷りこみはそれの静的で、色褪せたコピーである)の体験を可能にすることは真実である。けれども、物理的リアリティは地上的な存在にとってはあまりに爆発的な体験である。脳は大気圏外器官であり、

ではなく、広範囲の電子信号を含んでいる。

ステージ十六の人間を風刺的に描くと、焦点の定まらない目であたりを見回しながら、「ワォ、すべては波動だ!」と叫んでいる「アシッド・ヘッド」となる。アシッド・ヘッドを茶化す時には、きまって、目の前の机を見て、「ワォ、ペンシルだ!」と言う人物が描かれていたのを思いだす。そのような傷つきやすい不安定なミュータントをあざけり、LSDによってもたらされた混乱を薄汚く嗅ぎ回るのはたやすい。実際、不運なアシッド・ヘッドは思いがけずに強烈な認識論的偉業を演じる。それについて、幼生期の文化は愚かにも同情してくれないのだ。「ワォ、ペンシルだ!」と言う時、アシッド・ヘッドはグルグル回る電子の束を正しい英語の名称と同一視しているのだ。アインシュタイン的な知的仕事をやってのけているのである。

ニクソン時代の驚くべき霊的な野蛮性や無知の卑俗性は、準備不足で知識がないために、むこうみずにも漁色的な出来事を起こしてしまうLSDのユーザーをこきおろし、いじめることが安全でかっこいいことだという風潮を生み出した。かれらこそ、脳を故意に電波のトランシーバーとして用い、脳と脳が住む宇宙の基本的な電子的性格を体験したはじめての人間たちなのである。

洗練されたステージ十六のサイケデリック体験者たちは、前科学的なヒンドゥー教の存在論――「すべてはマーヤー(幻想)である」とか「すべてはリーラ(エネルギーの遊び)である」など――に頼る。ヒンドゥー教は受動的-受容的な哲学であり、その存在論と神経遺伝子的な宇宙論において

ない。ドラッグは神経電気的な活動を刺激しない。脳は生物電気的なネットワークであり、これらの信号を二十億年の間、受信してきた。明らかにドラッグは、瞬間瞬間の脳の交渉である分子の取引や生物電気的信号のやり取りを幼生期の心が自覚することを妨げるシナプスの障壁を溶かすのだ。

　神経身体的回路が開く時に意識化される無数の身体的、生理的出来事は誕生以来つづいていた。神経身体的な化学物質は、第三回路の象徴的な心が無意識の活動を自覚するのを妨げていたシナプスの敷居を低くするだけにすぎない。

　ステージ十六において、ポスト幼生期の人間は脳活動の生物電気的性質を自覚するようになる。それはコンピュータを保護しているパネルを取り去り、回路の細かな働きをさらけだすようなものである——この啓示は、コンピュータ制御の飛行機を飛ばしているパイロットには動揺を誘うものだろう。パイロットは単に方向の指示を欲するだけである。幼生期の人間は、自分の夕食が原子でできており、原子そのものは空間を回っている小さな粒子だということを知ることを欲しない。彼は固い皿の上に乗った固い肉を欲するのだ。

　けれども、恒星間存在のリアリティは非常に異なっている。電磁気的-重力的なプロセスが銀河の生命の肉であり、ポテトである。幼生期の人間には役に立たない、脳の波動的なトラシーバーの性質は、宇宙空間では絶対に必要なものである。テレパシー。脳-コンピュータの連結。脳-電波の連結。サイボーグの共生。

　地球外の出来事は光速によって計られる。地球外コミュニケーションは紙に書かれた喉頭と手の象徴や、音波にそって発声される言葉

移民に備えて、第六回路を意識的なコミュニケーションのために用いることができるようになるのは、原子テクノロジーが生まれてからである。その時、ロボットは自らの回路を操作する方法を学びはじめるのだ。

ステージ十六は神経電気的体験の受動的な探求段階である。自己耽溺的な受容の局面と言ってもいい。「サイキック」現象のほとんどのケースでは、いわゆる「感じやすい人」が信号を受け取ることに注意しなければならない。神経物理的信号の送信者になる人間はほとんどいない。このことは、新しい回路の受容的局面がもつ児童的な性質を説明している。

神経物理的受容性のもう一つの例は電波天文学から得られる。大きな「皿」が空を走査し、電磁信号を受け取る。意識的なコミュニケーションを意図して、宇宙にメッセージを送ることにほとんどエネルギーが費やされない。これは、人類がコンタクトされるのを受動的に待つ未成熟な種であるという本能的自覚を反映している。同じことがＵＦＯ現象にもあてはまる。世論調査は、アメリカの大衆の五十パーセント以上が地球外訪問者の存在を信じていることを表している。これらの信者のうちで、自分たちが個人的に、人類の未来に横たわる地球外探検の一部(ステージ十八)かもしれないと考えるものはほとんどいない。

回路六は神経電気的ドラッグによって活性化される。麦角、カクタス、マッシュルームから抽出した特定の有機的な化学物質は神経系が物理的エネルギーのトランシーバーとしての役割をもっていることを自覚することを可能にする。われわれは因果の鎖について正確でなければなら

罪深いものとか悪魔的なものとみなしてきた。尊敬されている科学者たちは、「第六感」の存在を証明するデータについての議論を周到に避け、それらを検討しようとしない。

進化の程度が低い種が電磁気的な信号や重力信号を受信することができることはよく知られている。鳥の帰巣能力や「渡る」能力は電磁的-重力的エネルギーの正確な受容に依存する。あらゆる種のバイオ・リズムは電磁気的なメッセージによって活性化されるように思われる。すべての神経系が電磁気的なトランシーバーとして働くことは明白だが、人間の心理にとってのその意味は無視されてきた。

強力な人間の能力を回避しようとするこうした迷信じみた傾向は、遺伝子的な根拠をもっている。ほとんどの人間のタブーや風変わりな倫理コードは神経論理的ないし遺伝的な智恵に根差している。ちょうど刷りこみを撤回させる神経身体的(快楽主義的)なドラッグが幼生期の社会を動揺させるように、神経物理的な体験は生物学的な生存という観点からすると煩わしく、混乱を誘うものなのである。四つの脳をもつ社会ロボットは自分のパースペクティブを直接的な環境に限定するよう設計されているのだ。蟻塚の道から離れてさ迷い、人間とコミュニケーションしようとする昆虫は蟻塚には危険なことと感じられるのである。

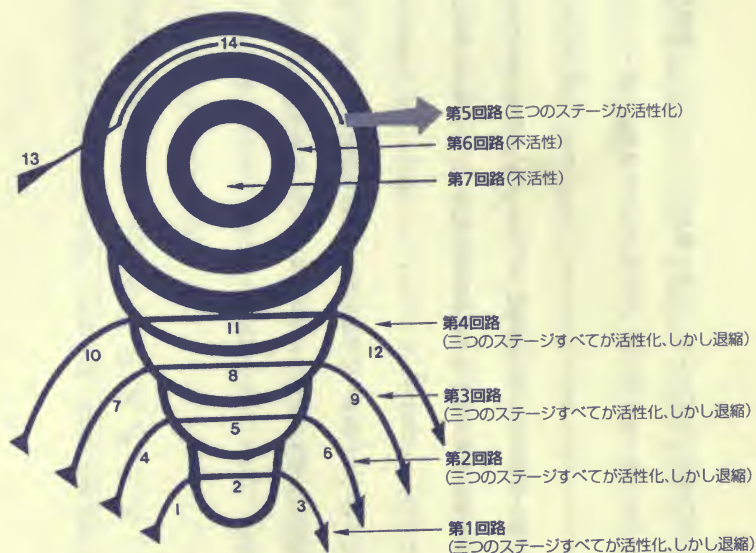
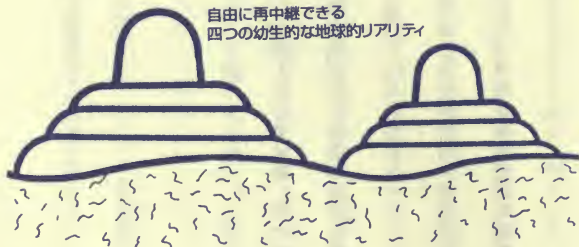
神経物理的回路の賢明な使用は、エレクトロニクス・テクノロジーや原子テクノロジーの発達がそうした言語やモデルを提供してくれるまで待たなければならなかった。生物学的進化の発端以来、神経系は電磁的-重力的信号を受信するトランシーバーとして働いてきた。だが、宇宙

ステージ十六：神経電気的受容性

神経系が生物電気的なトランシーバーとしての自らの機能を理解し、制御しはじめる時、第六回路が出現する。

これに対し、第五回路が活性化される時には、神経系が、地上の固定した場所との繋がりから解き放たれて浮遊する身体という乗り物を理解し、制御しはじめる。

第六回路が活性化される時、神経系は自らが生物電気的な周波を受信するトラシーバーであることを悟る。ここで語っているのは、詩的に「第六感」と呼ばれてきたものについてである。特定の早熟な幼生期の人間に現れる、神経身体的回路の聴覚的-視覚的-触覚的-化学的範囲を超えたメッセージを拾いあげる能力。

テレパシー能力は異常なものではない。驚くほど多くの幼生的人間が、予知や遠隔視を体験したことがあると自信をもって報告する。これらの出来事は幼生期の人間にとって不可解であり、タブーによって覆われている。カソリックの教会は伝統的にこのような「サイキック」な現象を

ステージ十五
牡牛座二
神経身体的融合

ステージ十五は、第五の脳が他の複合感覚的タイム・シップと繋がり、神経身体的融合を形成する時に活性化される。系統発生的にはこのステージは人間同士の最初の直接的なエネルギー・コミュニケーションを明らかにする。すべてのポスト幼生期の人間はこのステージを通過するよう設計されているが、この役割を演ずべく遺伝子的に配線されている人は牡牛座二と呼ばれる(タントラ的融合)。

容である。

て個人に重きを置く新しい態度、そういったものがトーマス・ウルフのような社会評論家をして、「ミー」世代は一九五〇年代のアイゼンハウワー的無関心への回帰ではないのかと訝らせた。

本書に提示されている変異のステージ理論は、自然には「回帰」は存在せず、より高いエネルギー・レベルでの

受容

統合

伝達-連結

の周期があるだけであることをほのめかしている。

ステージ十三（快楽主義的な消費者）はステージ十四（快楽主義的な自己実現家）に導く。そしてステージ十四はステージ十五——神経身体的集団の形成——に導く。一九七〇年代に花開いた多くのカルト、宗派、コンシャスネス・ムーブメントはステージ十五の連結の例である。

六〇年代以降の世代に見られる「無関心」はあてにならない。今日の若者は内的-身体的な実験に没頭しており、旧式の政治的、社会的、宗教的教義にはあまり熱心に関わろうとしない。現在（一九七六年）の神経社会学のもっとも興味深い（予測可能な）側面の一つは、特定レベルの「自己実現と感覚の操縦術」を達成した人々や、次の進化のステップを可能にする集団との連結の準備ができている人々によるS・M・I²・L・Eの概念の電気的な受

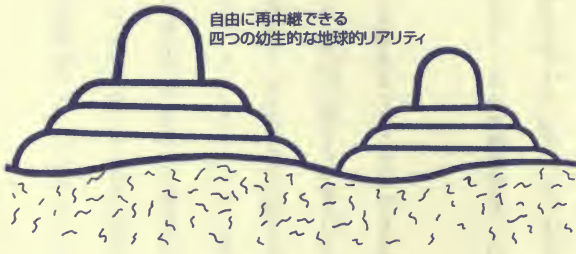
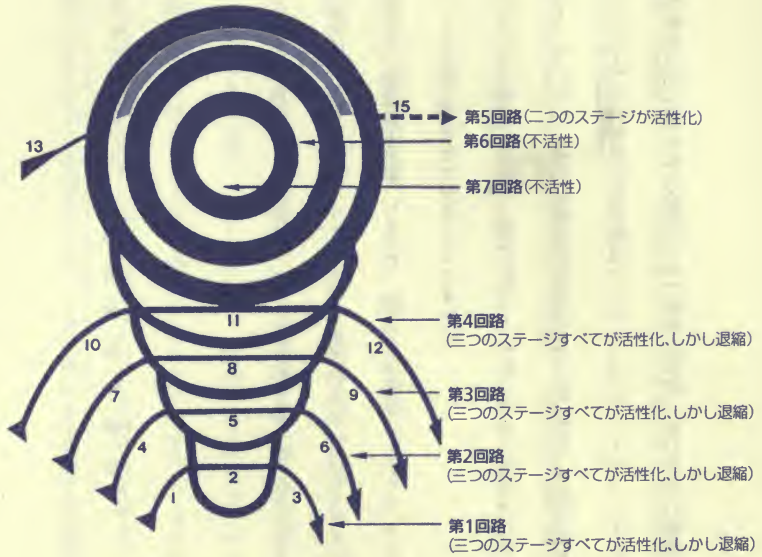
受容と統合の後に、社会的連結(シナジー)を形成するため、新しいエネルギーと他のエネルギーとの融合が起こる。
神経回路は伝達、コミュニケーション、連結のために設計されている。詩的に融合とか愛と呼ばれる連結は偶然に発達するものではない。ＤＮＡの設計図の中に組み込まれているのだ。融合と交換はコンテリジェンスを増大させることのできる構造を生み出す。二つの頭は一つの頭よりすぐれている——もし同じ周波数で受信するとすれば。

われわれの言語は、象徴的・物質的刷りこみから自由な神経身体的なチャンネルで機能する二人以上の人間同士のコミュニケーションを表す科学的用語をもっていない。それは象徴外知覚(ＥＳＰ)と呼ばれ、霊的共同体、アガペー、タントラなどに関連する。

一九六〇年代の神経学的な覚醒はコンシャスネス・ムーブメントと呼ばれる個人の成長や自己発達に対する広範な関心を引き起こした。政治的・職業的活動への盲目的な関与から撤退する一般的な傾向、おしきせの教義に対する懐疑や異議申し立て、公共的な価値感に対立するものとし

ステージ十四

牡羊座二

神経身体的知性

ステージ十四は、第五の脳が神経身体的信号を制御、統合、組織、想起し、重力から解放された複合感覚的な身体を操縦することを覚える時に活性化される。系統発生的にこのステージは第五の脳を表す。すべてのポスト地球的人間はこのステージを通過するが、この役割を演ずべく遺伝子的に配線された人間は牡羊座二と呼ばれる（ヨーガ行者、身体意識）。

して自分のものとし、神経生理学の無限の内的地理を地図に描き、航行できるほどに洗練されているのはごく少数だった。

漠然とした神智学的なきまり文句「内部を見つめる」は、今や、特殊な解剖学的意味を帯びる。「内部を見つめる」とは身体の内部を意味する。つまり、自律的な神経系の制御、幼生期の人間には不随意で無意識の身体的反応の制御を意味するのだ。

変異の受容ステージの次に統合ステージがくる。内胚葉型の生物学的生存の刷りこみ（ステージ一）が識別的、選択的な内臓緊張型の条件づけに取って代わられるように、ステージ十四はステージ十三の神経身体的信号を組織し、制御する。

ステージ十三において、外部との臍の緒的な神経腺が撤回される。感覚的-身体的な信号が受信される。そして感覚的な消費主義が現れる。

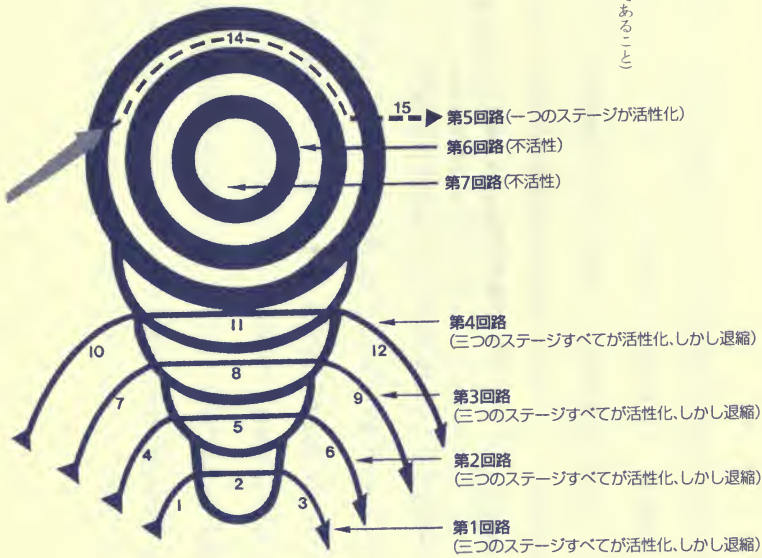
次に身体-脳は身体的-感覚的な機能を選択し、想起し、関連づけ、制御する。（ステージ十四）

先行ステージ（十三）は受け身的な浮遊するヒッピーによって人格化される。ステージ十四は身体というタイム・シップを的確に制御し、操縦する術を習得する修行を積んだヨーガ行者、健康食品の専門家、身体の魔術師などによって人格化される。

最初のポスト幼生期の世代は、「ターニング・オン」こそ最終地点だと素朴にも信じた。気持ちの良い消費主義。官能性の操り方を研究

ステージ十三

魚座二

神経身体的受容性（ハイであること）

ステージ十三は、幼生期の地球的神経学から地球外神経学への変異が起こる時、活性化される。四つの幼生期の刷りこみの繊維が引っ込められ、身体は多感覚的タイム・シップとして働く。系統発生的に、このステージは最初のポスト地球的なステージを明らかにする。すべてのポスト地球的人間はこのステージを通過するが、この役割を演ずべく遺伝子的に配線された人間は（第二の）魚座、すなわち快楽主義的な消費者と呼ばれる。

刷りこみのトンネル・リアリティからである。

最初のポスト幼生期のステージ(十三)は幼児的な自己耽溺である。新しい自我同一性を確立すること。ヒッピー・ムーブメント。受動的な快楽主義。道徳家は、若者文化が幼児的だと不平をこぼす。まさにその通りである。かれらは赤ん坊のように目的をもたず、非生産的だ。最初のポスト幼生期世代(一九四五年から一九七〇年の間に生まれた人たち)は自然に、変異の混乱の矢面に立ったのだ。最初の両生類の世代が、海岸線に寝そべって、裸の太陽を受動的に楽しみ、酸素を吸ってばかりいる、気が狂った怠惰な混乱した子供として理解されていただろうことは想像がつく。後のポスト幼生期の世代は先行世代の人々の体験と思いやりによって助けられるだろう。*

＊ 未来や過去への時間の投影はつねに興味深い。もし広島での出来事を避けられることをわれわれが知っていたら? もし本書と本書が提示する神経遺伝子的な原理が一九六〇年代に入手できていたら、多くの混乱が避けられたかもしれない。根拠のない省察だ。新しいエネルギーへの最初の反応は自己耽溺的で混乱するだろうことをDNAは予期している。

ハイの身体は自然である。「正常な」象徴的リアリティは幼生期の松葉杖とみなされる。

賢明なドラッグ・ユーザーに訪れる四つの反物質主義的、神経身体的啓示——植物的、感情的、精神的、社会的——がある。

1. ドラッグが細胞の満足を引き起こし、苦痛を排除するのに、なぜ植物的な幸福感を得るために物質的な刺激に頼るのか?

2. ドラッグが自由な神経の状態を活性化できるのに、なぜ感情的な満足をもたらす物質的-筋肉的報酬——キャディラック、肩書、丘の上の家——を求めて汗をかき、努力するのか? アインシュタイン的可動性がニュートン的引力に取って代わる。

3. ドラッグが心を解放して、新しい繋がりや新鮮な創造的解決を生み出すことができるのに、なぜ象徴的な手順や人工的に作られたプロセスを繰り返すのか? ゆるめられ、弛緩した浮遊する心が自然のリズムや順序に従って象徴を折り曲げ、湾曲させ、ずらすことができるのに、なぜ機械の組み立て工場のような反応をするのか? 宇宙が楽しいエネルギー場であるのに、なぜ働くのか?

4. 神経身体的ドラッグが直接的な裸の感覚を生み出し、その中で、あらゆる手触り、味、匂い、動き、視覚、音が身体的歓喜で爆発するのに、なぜ短時間の性器的なオルガスムの快楽を求めて、家庭化された奴隷の人生に自らを委ねるのか?

神経賦活ドラッグは、歴史の曙以来、感覚的-身体的な内的快楽へと「逃げ」ることを欲する人々によって用いられてきた。

カナビスのユーザーが逃れるのは何からなのだろう? 道徳的に言えば、社会的責任からであり、神経学的に言えば、四つの人工的な

最初のポスト幼生期のステージ。身体は臍の緒的な神経の刷りこみから解き放たれ、無重力の存在に備える。これは、誕生直後、新生児が環境との神経的な繋がりを持たずに休息するステージ一の再現である。

ステージ十三では、身体は一時的に外部の刷りこまれた繋がりから離れ、無重力の道具となる。これが「ハイ」と呼ばれる。新しい神経回路に対する最初の反応は、探求的である。摂取。新しい信号に対する受け身的な受容性。身体は快楽の源となる。快楽主義的な消費者としての自己同一性。

その態度は浮遊する利己主義である。外部の物質的報酬(感情的、精神的、社会的)は感覚的-身体的-内分泌的な体験を引き起こす不細工で人工的な象徴的引き金にすぎない。なのに、なぜそれらを求める必要があるのだろう? 外部の報酬-引き金は神経化学物質を摂取することによって停止することができる。成人が四つの幼生期の生存のためのダイアルを自在に操れるようになったら、物質界へのロボット的執着は「蹴る」ことができる。

うな何百万という読者が、他の惑星にも自分のような読者が本当にいるのだろうかと訝っているのだ。そうした読者は、進化が銀河全体で同じように働く可能性や、「今日」が何百万回も以前に起こった可能性に少し混乱させられているだろう。

「人間」によって発見された新しいエネルギー・レベルのすべて――化学的、電子的、核――は、刷りこまれた心にとっては驚きであり、当惑を誘うものである。しかし、DNAにとっては、新しい化学物質や電磁的な刺激の出現は、より進んだ進化の局面が起ころうとしている徴候にすぎない。

神経賦活ドラッグの広範な使用は、新しい意識レベルの出現を告げる合図なのかもしれない。神経身体的ドラッグは幼生期のリアリティを決定するシナプス連結をゆるめ、感覚的-身体的な自覚を著しく広げ、強化する。カナビスは感情的、精神的、社会的関わりを弱め、超然とした楽しい快楽主義、生の直接的な官能性の高められた感受性を生み出す。

カナビスは新しい神経回路を活性化する神経身体的引き金である。カナビスが大衆テクノロジー社会の第一世代の文化的象徴となるのは偶然ではない。

身体の発見、身体の探求、身体の美化は神経系を幼生期における地球への生命線から解き放ち、無重力に備えさせる第一段階なのだ。

ないかと思われる。何十億という同様な惑星が広島、若者のドラッグ・カルト、ゴールデン・タイムのテレビジョンを苦悩の中で通過してきたのだ。変身はＤＮＡにとってはそうではないが、それが起こっている個人にとっては驚くべきことである。

幼生期哲学者の自我中心性は必然的に欲求不満と罪の意識に導く。自分だけが自然を制御し、支配していると思っている「男たち」は、事態がかれらに不利になった場合、責任や自責の念を覚える。たとえば、過剰人口や汚染は新しい幼生的生存の倫理では「罪」となる。

一方、神経遺伝子学や大気圏外心理学はＤＮＡの知性への控え目な楽観主義的な信頼を教える。遺伝暗号は自分がなにをしているか知っている。神経賦活ドラッグは、まさにそれらがＲＮＡによって必要とされる時に出現する。ＤＮＡの数十億年の惑星間計画は、ロスアンジェルスのスモッグ、アシッド・ロック、マルサス的なインフレ、放射能の落下というものによって驚かされもしなければ、阻止されることもないのだ。

運命の日というシナリオやシュペングラーの予言は死ぬことを定められている幼生期の個人の恐怖である。更年期の黙示録的な空想もまたそうである。「誰も」が、世界は紀元一〇〇〇年に終わるだろうと思っていたことをわれわれは思いだす。銀河の何百万という似たような惑星の上でまったく同じように展開する、何十億年にも渡る進化のプロセスに、「自分」が（良きにつけ悪しきにつけ）なんらかの干渉ができると思うのは、なんという「人間」のあつかましさだろう。*

＊　今まさにこの瞬間、他の多くの惑星では、数千人の哲学者が惑星外心理学の本を書き、変異の考えを提出したかどで投獄され、あなたのよ

るだろう。

一九四五年以来、人間の神経系とDNAは種にとって真新しい、変異を引き起こす三つの強力な刺激にさらされてきた。

——X線や核爆発による放射能

——テクノロジーによって生み出される電磁的、電気的放射線

——神経身体的、神経物理的ドラッグ、食品に含まれる添加物や合成物質、大気の化学汚染物質

大気圏外心理学は、こうした強力な電気化学エネルギーに晒されることが期待される変異のプロセスのスイッチを入れると主張する——つまり、DNAが一九四五年以降に生まれた人間の神経系に、変異の時がやってきたことを告げる信号を送るのだ。それは惑星からの移民がはじまる時である。

テレビジョン、核分裂や核融合、神経身体的、神経電気的ドラッグなどがDNAによって予期されていないとか、この惑星にとって異常なものであると想像する理由はない。DNAによってあらかじめプログラムされていたエラや肺の構築の引き金になった原始の植物による酸素大気の創造は、居住可能なすべての惑星で起こる標準的な進化のプロセスであるものと予測される。さらに、エレクトロニクス、核分裂、合成化学物質、神経賦活的ドラッグはDNAによって予期されているエネルギー変容であり、次の進化を活性化する引き金となるメカニズムとして働くのでは

状態などという言葉で説明されるが、そのような言葉は家庭化された正常なトンネル・リアリティには異質なものであることを示しているにすぎない。超越的な意識の状態によって生み出される混乱と恐怖は、それらがポスト地球的存在のために設計されている可能性をほのめかすものかもしれない。

神経身体的化学物質（たとえばカナビス）や神経電気的化学物質（サイケデリックな効用をもつインドールやアルカロイド）は過去において、神秘的、予言的、あの世的体験を報告してきたシャーマンや錬金術師たちによって用いられてきた。ある学者たちは、すべての宇宙論的宗教は聖物質的な神経伝達物質によって生み出されるヴィジョン体験に基づいていると主張してきた。精神賦活的なドラッグの使用に反対する者たちは、そうした物質が地上での生存にとって関わりのない、危険ですらある「あの世」的な体験を引き起こす、と正当にも不平をこぼす。

これらの神経化学物質は幼生期の社会によって一貫して抑圧されてきた。なぜなら、それらは人間を習慣的なリアリティの島から引き離し、日常的なリアリティとは無縁であるばかりか、妨げにすらなる神経身体的、神経物理的、神経遺伝子的なパースペクティブを生み出すからだ。過去において、神経化学物質の使用は知的エリートや秘密の神秘主義的カルトに限定されてきた。

土地に拘束された生き物の中で、時期尚早に蝶のコンテリジェンスを刺激し、活性化する物質を導入すれば、毛虫社会が混乱することは想像に難くない。華やかな羽をもった存在の予言的なヴィジョンに相当数の毛虫が殺到したら、変身の順序がひっくりかえり、種の生存は脅かされ

2.　これらの体験は測定も予測も可能な神経学的出来事である。

3.　これらの体験は体験を誘発する神経伝達物質としての化学物質と、それらによって活性化される神経系の回路に照らして理解し、分類することが最良である。

さまざまな種類の超越的な体験を分類する多くのシステムがあるが、大気圏外心理学は解剖学的な構造によって規定される三つのポスト幼生的レベルを明らかにする（回路八は超生理学的である）。

5.　神経身体的コンテリジェンス――身体リアリティ。感覚的-身体的信号の受容、統合、伝達。

6.　神経物理的コンテリジェンス――脳のリアリティである電磁信号を仲介する大脳皮質に位置する。

7.　神経遺伝子的コンテリジェンス――ＲＮＡを通してのＤＮＡ信号の受信。

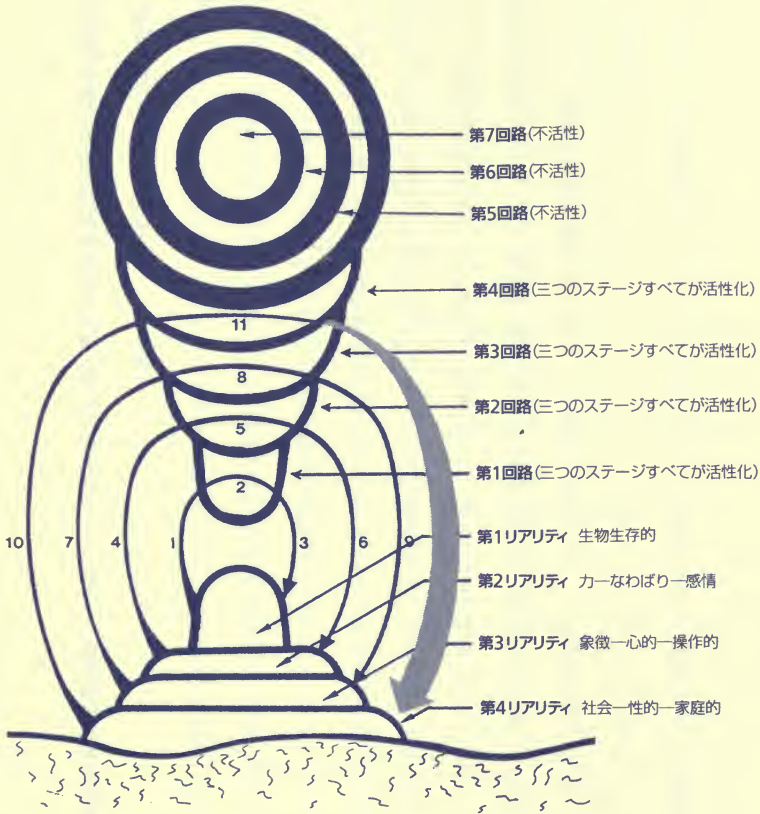
以上の三回路は神経の解剖学や体験される信号単位の現象学的内容だけではなく、それらを活性化する神経伝達物質によっても定義されうる。

幼生期心理学は三つのレベルからなる大気圏外心理学的なコンテリジェンスの性質や目的を説明することができなかった。というのも、それらは地球的存在には関わりがなく、混乱を誘うもので、生きていくうえで危険なものだからである。それらは幻覚、妄想、精神病的状態、夢見の

これまで見てきたように、それぞれの新しい進化のサイクルの最初のステージはそれまであった繋がりからの解放を意味する。新しく出現した神経回路の第三ステージは新しいより複雑な繋がりを含んでいる。最初のポスト幼生期を記す第五回路の活性化は偉大な心理学的な意味と啓示をもった出来事である。臍の緒としての刷りこみが撤回されるのだ。新しいリアリティ体験がパースペクティブを拡大し、それまでの刷りこまれた生きるためのリアリティがロボット-断片とみなされ、もはや自分を制限も、拘束もしなくなる。この体験は神秘家、詩人、サイケデリックの達人、オカルティスト、ドラッグ・ユーザーなどの無数の報告の中で語られてきたが、幼生期文化の言語を使って語られているため、あいまいで主観的に表現されざるをえなかった。

基本的な事実は次のようなことである。

1. 社会的に条件づけられたリアリティを超えたリアリティが存在する。

ステージ十二
水瓶座
社会的－性的集合性

ステージ十二は、神経系が社会を社会的－性的繋がりとして刷りこむ時に活性化される。系統発生的にみると、このステージは集団主義的社会、社会主義国家を明確にする。この役割を演ずべく遺伝子的に配線されている人間は水瓶座と呼ばれる。

ポスト幼生的存在への進化の第一歩は、神経身体的なコンテリジェンス——幼生期の刷りこみ（第五回路）から独立したタイム・シップとして身体を蘇生させ、自在に操れるようになること——である。

探求すべきフロンティアもなく、危機感を煽ったり、スキャンダルにうつつをぬかしたり、中国と〔旧〕ソ連の国境やゴラン高原での紛争を挑発したりする以外になにもすることがない。

ホモ・サピエンスは、拡大するコンテリジェンスが旅の目的であることを発見する入口に立っている。快楽は外部の物質の中ではなく、身体の時間的封筒の中にあること。パワーは筋肉や筋肉を代用する機械ではなく、脳の中にあること。進化の青写真は遺伝子のスクリプトの中に見出されるに違いないこと。高次の知性が銀河の中に見出されるだろうということなどを発見する入口に立っているのだ。

数十年のうちに、最初の男性と女性からなる宇宙移民が行われるだろう。この男女からなる移民の神経政治的な意味は深甚である。今日、人類は空を見あげ、アメリカ人男性の宇宙飛行戦士が月面を歩いたことや、パイオニアの探査船が木星を周回する軌道に乗ったことを知ることができる。しかし、その効果は人間を震いたたせるものではない。宇宙飛行士は普通の人々が同一化できないロボットだからである。

しかし、人間が空を見あげ、種子が送られたこと、男性と女性が未来を求めてこの惑星を離れ、生活し、愛を交わし、料理を作り、子供をもうけ、地球外空間での新しい存在形態を探求しているということを知れば、変身は神経学的な現実となるだろう。そして偉大な変異がはじまるだろう。

ステージ十二の大衆カルトの目標は金ではなく次のレベルのコンテリジェンスを探す、新しい世界の探求になるだろう。

在の「新生児」なのである。

ステージ二の生物植物的知性はステージ十四の神経身体的知性において再現される。

ステージ三の生物学的生存の繋がりはステージ十五の身体神経的な融合において再現される。

『八つの能力の脳』は第二回路を特徴づけるなわばりの筋肉による制御がいかにして神経学的な速度、可動性、アインシュタイン的な機敏性や力によって取って代わられるかについて詳しく述べている。なわばりの力を求める回路二の戦いは回路六のリアリティの制御によって釣り合いを取られる。そして第三回路の(L・M象徴の)発明と創造は遺伝子学の「才能」に取って代わられる。回路三は回路七になる。生命とは進化するアミノ酸の象徴システムなのだ。DNAのアルファベットそのものは原子的知性によって創作される。

ステージ十二の大衆カルトの恐ろしい同質異像性は幼生的神経系を移民へと向けて解き放つ。組織化された蟻型コロニーだけがアルマゴルド、V-2ロケット、スプートニク、アポロ十三号などを生み出すことができたのだ。社会主義国家の恐ろしさは集団性そのものにあるのではない。それが向かう目標と目的が幼生的な物質主義にあるということなのだ。

中国、ロシア、そしてアメリカの大衆カルトが嫌悪を催させるのは、その理想が愛国主義的、競合的、帝国主義的、領土拡大主義的だからなのである。巨大な技術帝国の混乱と不安は目的のない物質主義のせいである。昆虫的な幼生文化の人々に蔓延する退屈さと欲求不満。そこには、

しなければならないのである。

子宮惑星を去るために、女性／男性は外的な刺激への執着をやめなければならない。物質欲を断ち、世俗的な志を棄てなさいという神秘主義的命令を今や、神経遺伝子的に言い換えることが可能である。

その命令は次のようになる。四つの刷りこまれた執着によって阻止されていた四つの新しい神経のプロセスを意識的に制御する能力を獲得せよ。

四つのポスト地球的回路は四つの幼生期の刷りこみの時間バージョンである。
四つの幼生期の回路は空間的なわばりの筋肉による制御を仲介する。
四つのポスト幼生的回路は「時間的なわばり」の神経学的な制御を仲介する。
第一の幼生期の回路は植物的な身体に外部の内胚葉型の栄養を盲目的に刷りこむ。最初のポスト幼生期の段階である第五(神経身体的)回路は身体を環境への刷りこみから解き放つ。地球外の無重力空間に存在するために、身体は地球との繋がりから独立したタイム・シップとして体験され、制御されなければならない。

ステージ一の幼児的な浮遊はステージ十三の神経身体的な受け身的受容性において再現される。ターン・オンしたヒッピーは地球外存

らないのである。

　四つの幼生期の刷りこみは土に落ちた種入りのさや、胎盤としての惑星への神経の拡張、胎児の生存を保証する神経的な臍の緒とみなすことができる。遺伝子工学は単純に理解できる。ＤＮＡは誕生時に胎児の身体に乗って新しい土地に着陸し、四つの生命維持システムを順番に送りこむ。

――腹と背

――筋肉

――操作的（喉頭と手の筋肉）

――性的‐同盟的

　四つの脳の幼生期の人間が変身して移民のためのフライトをするのに必要なテクノロジーを組織化できるコンテリジェンスのレベルに進化した時、地球という環境から神経的な臍の緒を撤退させる必要があることは歴然としている。幼生期の刷りこみは撤回されなければならないのだ。地球環境へのロボット的反応は内化されなければならない。このプロセスは「ドロッピング・アウト」と呼ばれてきた。

　ここに技術的な神秘主義の逆説がある。星間空間へと出ていくために、人間は内部に入りこみ、自分自身の身体、脳、ＤＮＡに精通

は広範な喉頭と手の筋肉システムの教育という文脈の中で「心を決める」ことができない。創意に溢れた創造的精神は消え去る。文化的なライフ・フタイルや性役割、家庭化された幼生期の人間にユニークであるという幻想を与える昇華された表現の個人的様式などが〔旧〕ソ連邦とかテレビの画一性の下に同質異像化(美しい言葉だ)される。

この昆虫的な単一文化主義はそれ以前の人間の価値感(個人や家族の重視)を従属的なものとみなすという点で恐ろしいものだが、ステージ十二は実際のところ避けられない進化の一歩なのだ。神経系の新しい回路はそれぞれ、より高いレベルの融合-連結に導く。

1. 単細胞の形態が結束して多細胞有機体になる
2. 有機体が結束して地域的な群れや集団となる
3. 道具を作る人間が結集して手工芸のギルド、交易集団、象徴共有集団などを形成する
4. 家族が寄り集まって巨大な中央集権国家へと拡大する

昆虫的国家集団は幼生期の進化における必然的なステップである。中央集権化された国家だけが、次の進化のステップ——惑星からの移民——を可能にするテクノロジーを活用することができるのだ。自由に変異するためには、個人的ななわばり、地域的な象徴の力、個人的な性役割、家族への忠誠などに繋がれているロボット哺乳類的コネクションを断ち切る必要がある。鳥は南へと渡るために、巣への刷りこみを撤回しなければな

音楽、ロマンティックな象徴などの求愛行動が今や国家の承認を勝ち取ることに向けられるのだ。徳は親としての責任を果たすことにではなく、集団への義務を果たすことにある。

社会主義や共産主義の国家は、強力な神経学的理由で、少年と少女のセクシャリティに関して上品ぶった態度を示し、禁圧的である。結婚や家庭を作る本能は国家によって左右される。巣作り行動や保護的な家計のやりくりは今や、国家を大切にし、養い、支え、防御することを反映する。

ステージ十二の社会主義者の理想主義的性的エネルギーの昇華は幼生期の進化のきわめつけである。すべてのスローガンは正しい。組織化された柔和な人々が地球を受け継ぐ。大衆が惑星を支配する。昆虫的な社会主義が支配する。

ステージ十二は黄道帯の水瓶座、タロットの裁判の女神、ギリシャ神話のテミス-ネメシスによって人格化される。

ステージ十二のコンテリジェンスは発達する幼生期の人間に安全性を提供してきた本能的な神経反射の多くからの離脱を含んでいる。社会主義的な刷りこみは、過去において個人の生存を保証してきた制御能力や自由を国家に明け渡すことを個人や家族に要求する。第二回路のなわばりへの刷りこみは停止される。もはやいかなる個人所有も認められない。すべての土地は国家に属する。あるいは、企業-資本主義社会では、土地と家は銀行に属し、個人は頻繁に会社によって取り換えられ、土地との繋がりを断たれる。第三回路のL・M象徴は標準化されている。社会主義の子供

官能的で好色であると同時にきわめて道徳的である。地中海文化がアラブ的な官能性とイスラム的気取り、ヘレニズム的な快楽主義と前キリスト教的禁欲主義、カソリック的禁欲とラテン的なセクシャリティとを共に生み出したのは偶然ではない。不道徳な王と禁欲的な僧、売春婦としての女性と聖女としての女性、それらが共存していることがこのステージの特徴なのだ。

ステージ十一の性的な家庭化は家族に基づいており、歴史的にみると、中流階級の兄弟団や友愛団の連合として北ヨーロッパで発展した。近親相姦のタブーは兄弟間の自由な性を禁じた。

民主主義、企業間の自由競争、議会制、消費主義、所有権といったものを伴うこの進化の時期がいかに魅力的であろうと、ステージ十二の昆虫的な集合主義に比べると社会的な生存の成功度においても効率においても劣っていることは明らかである。

地中海的な、あるいは中流階級の民主主義的なモデルを刷りこまれた人々は、集合的な刷りこみの力を理解することができない。地中海人が自分自身に対して、またステージ十一の家庭的人間が家族に対して感じる根深い尊敬の念はステージ十二の国家への忠誠に取って代わられる。

集合的な社会では、個人主義（ソビエト人はこれを「ごろつき主義」と呼ぶ）、ロマンティックな愛、家族的忠誠（ソビエトはこれを「ブルジョワ」と呼ぶ）などは悪魔的な反逆とみなされる。社会主義的な集団の中で育った神経系をもつ子供は、前社会主義的社会では個人的な繋がりや家族的な繋がりに断片化されている昇華されたセクシャリティを国家に捧げる。つまり、以前には異性をひきつけるために設計されていた衣服、身なり、儀式的な情熱の表現、

集合的社会化は明らかにもっとも効果的な生存のための工夫である。

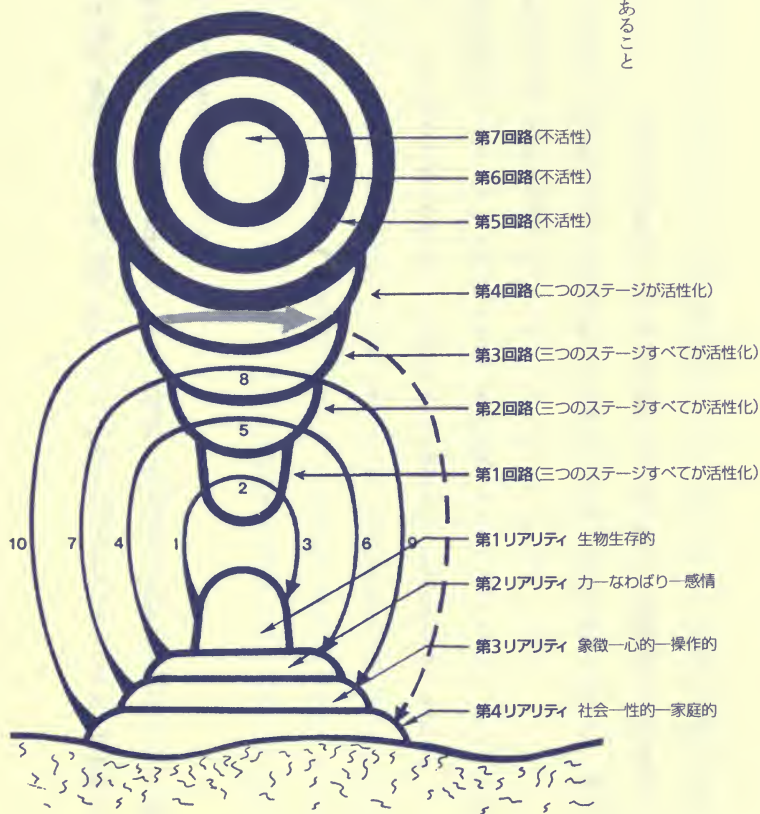
二つの脳の哺乳類は子供を成人になるまで育てるが、成人に達すると、子供たちは独立したライバルとなる。三つの脳の霊長類は初歩的な社会組織と性的な役割分化を伴う群れもしくは集団で暮らす。昆虫とホモ・サピエンスは鉄壁の適応メカニズムを発達させた。個人の運命が集団の幸福に従属する中央集権化された社会である。人間の個人も種も、親以前の飼い馴らされていない自己耽溺的な捕食的セクシャリティから成るステージ十から、家族中心社会の親としての責任を負わされるステージ十一を経て、性的に充電された家庭的本能が、家族から昆虫的社会全体（中央集権化された社会）へと拡張・昇華されるステージ十二へと進化する。

ステージ十のセクシャリティは自己中心的で、歴史的に、地中海文化――ヘレニズム、アラブ、カソリック（封建的、貴族主義的）――において発展した。それらの文化では、男性が性的満足を得るために力を用い、女性は所有物とみなされた。この「思春期」の性的-社会化のステージは

ステージ十一

山羊座

社会的-性的に家庭的であること

第7回路(不活性)
第6回路(不活性)
第5回路(不活性)
第4回路(二つのステージが活性化)
第3回路(三つのステージすべてが活性化)
第2回路(三つのステージすべてが活性化)
第1回路(三つのステージすべてが活性化)
第1リアリティ　生物生存的
第2リアリティ　力—なわばり—感情
第3リアリティ　象徴—心的—操作的
第4リアリティ　社会—性的—家庭的
8
5
2
10　7　4　1　3　6　9

ステージ十一は、神経系が精子-卵子の性的人格を刷りこむ時に活性化される。系統発生的にみると、このステージは集団国家に先行する家族中心の文明を明らかにする。この役割を演ずべく遺伝子的に配線された人間は山羊座と呼ばれる。

われわれは、魚座-ペルセポネ、牡牛座-デメテル、蟹座-ラーレース・ペナーテース、乙女座-ディアナ、蠍座-アテナの男性版にあたるギリシャ・ローマの神々を見出すことに困難を感じる。また、牡羊座-ネプチューン、双子座-マーキュリー、獅子座-アポロ、射手座-プロメテウスの女性版を命名する場合にも同様な問題が生じる。

性を仮定する。人間社会は広い進化的スペクトルの人間が住むダーウィン的なジャングルなのだ。第四の刷りこみは神経系を標準的な社会モデルにひっかけることによって、こうした遺伝的な差異を一定の方向に振り向け、覆い隠す。人間は刷りこみを通して、習慣的な家族的パターン――叔父叔母、祖父母等を含む――で反応するよう教化される。受胎の時に、強烈な生化学的、神経学的変化が起こり、巣づくりや子供を保護するための反応を生み出す。親ではない人たちでさえ、子供の幸福を説き、大切にするようプログラムされている。

神経進化の第十一ステージ(親-家庭化)は山羊座、運命の輪、ユノ-ヘラ-ジュピターによって人格化される。

第十一ステージは全面的に家庭的で、拡大家族の親の役割をすべて包含するが、そのスロット(溝)は基本的に女性的である。歴史的に家族中心の社会は、よりやさしい交易と家族をモデルにした会社によって、男性の支配する捕食国家に取って代わった。

このことに関連して、それぞれの神経遺伝子的なスロットが基本的に男性的か女性的かのいずれかであることを思い起こすことが有効である。発達する人間はそれぞれ、各ステージを効果的に、あるいは神経学的に通過するが、男性と女性のステージの間を律動的に行き来する基本的な交換がある。

交互に移り代わる性の役割の興味深いらせん状の展開は神経遺伝子的な進化に包含されている。

男性の魚座は女性ステージの男性版である。女性の獅子座は男性ステージの女性的なアマゾン・バージョンである。

ステージ十一：性的な家庭化、親としての立場〔ブルジョワ的人間〕。

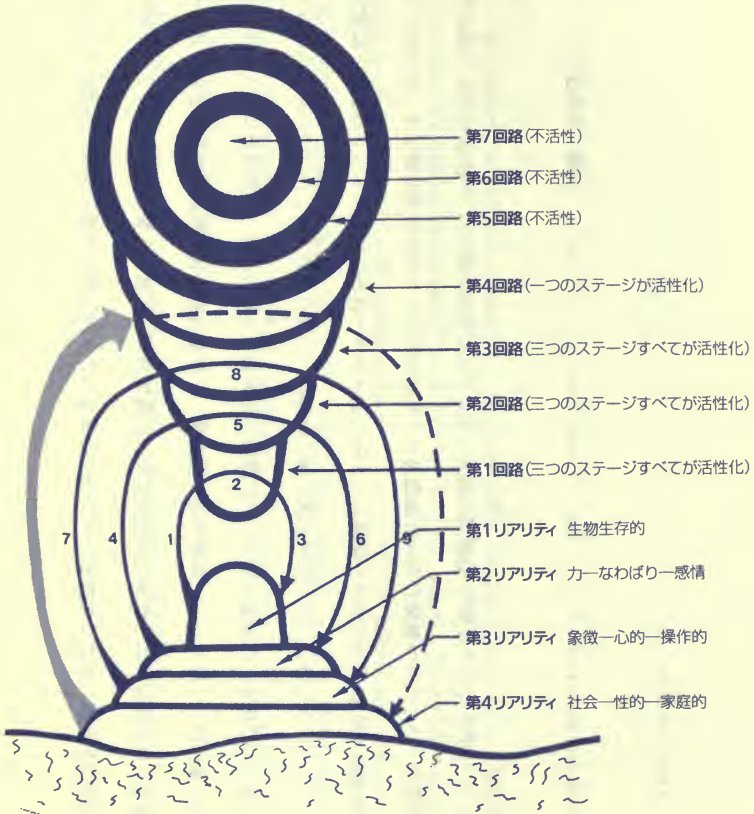
第四回路は親と家族を中心とする社会的リアリティを生み出す。

この回路が活性化されると、社会的-性的刷りこみが環境の中の対象をやみくもに記録し、それが家庭化された性的衝動の引き金や標的になる。

複雑な遺伝子的プログラムが拡大された家族の保存に必要な社会的-性的タイプの種類と量を決定する。昆虫のコロニーの「DNA-脳」が適当な数の働き者、なまけ者、戦士を活性化するのと同じように、ホモ・サピエンスの「種の脳」が子育てタイプの人間を生み出す。

幼生期の人間は「種の運搬者」としての自らの機能と、自分たちが演じるようプログラムされている遺伝子的役割とを自覚していない。ある者は性的に中性的で、他の者は親になるべく設計されている。思春期の開始の時期に人間の社会的-性的役割を固定するのは単純なことである。

人間の遺伝子タイプや神経タイプの豊富さはかなりの混乱と社会的葛藤を引き起こす。法律、倫理コード、教育方法は存在しない同等

ステージ十
射手座
社会的-性的役割の選択

ステージ十は、性的機構がスイッチを入れられ、第四回路が活性化される思春期にはじまる。この時期、性的な刷りこみが行われる。性的役割の人格化が培われる。系統発生的に、この回路はホメロス的猿、つまり家庭化された幼生期の人間を明らかにする。この役割を演ずべく遺伝子的に配線された人間は射手座とよばれる。

このステージの間に、性的な刷りこみが行われ、第四のリアリティが明確となり、性的人格の役割が選ばれる。性的役割の実験が情熱的に遂行される。コンテリジェンスは求愛の儀式や誇示、性的探求に取りつかれる。あるいは、遺伝の型が中性的であったり、性的刷りこみが廃棄された場合、エネルギーは非性器的な社会的役割、思春期の理想化、強迫的な性の拒絶、ロマンチックな感情の排除といったものにのめりこむ方向へと逸らされる。出産前の性的ステージの混乱は、社会的圧力が神経系に連動しない行動を刺激し、遺伝的に中性の人の場合には、情熱を伴わない義務的な性交を強い、性欲が社会的に禁じられている人の場合には、充電度の高い苦行を強いる可能性があるからである。

第四回路は、昆虫のコロニーにおけるカーストと同じくらいの種類がある社会的‐性的な役割を明確にする。大部分の人間は出産や親業のためには設計されておらず、その他の家庭化された役割を演ずべく神経遺伝子的に配線されている。系統発生的にみると、第四回路は、ホモ・サピエンスが男性間や女性間に(権力の立場を除き)いかなる役割の分化もない後期の青銅器‐鉄器時代の社会集団から進化し、都市文明の複雑な社会的構造を発展させた時に出現した。

ステージ十は射手座、隠者、マルス‐ヴィーナス‐アレス‐アフロディティによって人格化されてきた。

ステージ十：性的・家庭的受容性（ソビエトでホーリガンと呼ばれる個人主義者）。

神経系の第四回路は、身体が子育てできるまでに成熟する思春期に活性化される。新しい神経配線がより複雑なコンテリジェンスのレベルを仲介し、精子-卵子の差し迫った要求と家庭化された性の昇華によって支配された新しいリアリティを生み出す。

種の進化においては、ステージ十は、鉄器時代のテクノロジーによって、軍隊が（金属の道具を用いて建造した船に乗って）移動することが可能となり、それが帝国の原基となる捕食国家——不法の男性中心的、男性優位的、略奪的、好戦的、強奪的国家——を開始させた時に出現する。このホメロス的な系統発生のステージは、もちろん、人間の思春期にも繰り返される。このステージの女性は性的対象、かわいらしい所有物、プレイボーイのピン・ナップ、ヴィーナス-アフロディティである。

最初の思春期の神経-性的ステージは、探求的、受容的、自己中心的、自己規定的、オルガスムス指向的であり、自己愛が強いため家庭化されていない。

ステージ九

蠍座

喉頭と手による象徴操作

（象徴の創意にとんだ創造的操作）

ステージ九は、霊長類が象徴を発明し、新しい繋がりを生み出しはじめる時に活性化される。このステージは系統発生的に、文明以前の原始的人間とみなされるのが普通である。十二単位の人間集団においてこの役割を演ずべく遺伝子的に配線されている人間は蠍座と呼ばれる。

ステージ九：象徴の操作

L・M（喉頭と手）知性の発達は象徴のコミュニケーション――象徴の発明と創造――を含んでいる。きまりきった象徴の配列の破壊と新しい象徴や象徴同士の繋がりの創造である。青銅器-鉄器時代の人間がその原形だ。自然の形態を切ったり、掘ったり、溶かしたりする。火の創造的な使用。創造的な手工芸。

特定の歴史の時期に、社会集団や個人は静的できまりきった象徴の順序を分離させ、新しい結びつきを作ることに熟練した。思春期前の個人は独自のコミュニケーションの様式を培う。ある者は幼生期の共同体において、象徴をアレンジし直すこのような役割を演じるよう遺伝的に前もってプログラムされているが、それぞれの個人は個人的な進化のサイクルでこのステージを通過する。このステージは蠍座、タロットの力、ギリギャ・ローマ神話のミネルバ-アテネ-ウルカヌス-テセウスによって人格化される。

ステージ八

天秤座

喉頭と手による象徴の知性

（初期の科学的-象徴的文化を

象徴的に考えることを学ぶ子供）

第7回路（不活性）
第6回路（不活性）
第5回路（不活性）
第4回路（不活性）
第3回路（二つのステージが活性化）
第2回路（三つのステージすべてが活性化）
第1回路（三つのステージすべてが活性化）
5
2
7　4　1　3　6
第1リアリティ　生物生存的
第2リアリティ　力—なわばり—感情
第3リアリティ　象徴—心的—操作的

ステージ八は、子供がいろいろな象徴を関連づけ、「考える」ことを学ぶ時に活性化される。このステージは系統発生的には霊長類である。この役割を演ずべく遺伝子的に配線されている人間は天秤座と呼ばれる。

巻かれている。人工物のない自然の中に裸で置かれた場合、彼／彼女は即座に新しい人工物のリアリティを製作できる範囲内でしか生きられない。

喉頭に関連する心の働きは哲学者によって無視されてすらいる。正気と生存は十分な技能で声帯を操作できる学習された能力に依存する。あらゆる思考とほぼすべての心の働きは音を出さない喉頭の筋肉の動きによって行われるのだ。

種と個人の進化の第八ステージは、左脳によって仲介されるこれら二つの正確な筋肉システム——喉頭と手——の完全な制御能力の習得に関わっている。

このステージは天秤座、ギリシャ神話のプシュケ-ムネモシュネ-プロメテウス、タロットの戦車によって人格化される。

ステージ八：喉頭と手による象徴の知性

第三回路が出現すると、子供は素早く、喉頭部の軟骨と手の筋肉の操作を通して世界を知覚することを学ぶ。

幼児のリアリティは第一の植物的回路によって規定される。

言語を習得する前の子供のリアリティは第二回路——運動と上昇を仲介する全身の筋肉——によって規定される。

第三回路は左脳に位置し、喉頭部の九つの筋肉と器用さを支配する繊細な筋肉を制御する。

この回路の受容的ステージ（ステージ七）は受動的な反復によって、喉頭と手を順番に操ることを含んでいる。それは言葉の魔術と名人的な象徴主義のステージである。

ステージ八（第三の脳）は象徴的信号を統合し、関連づけ、評価し、協調させる。

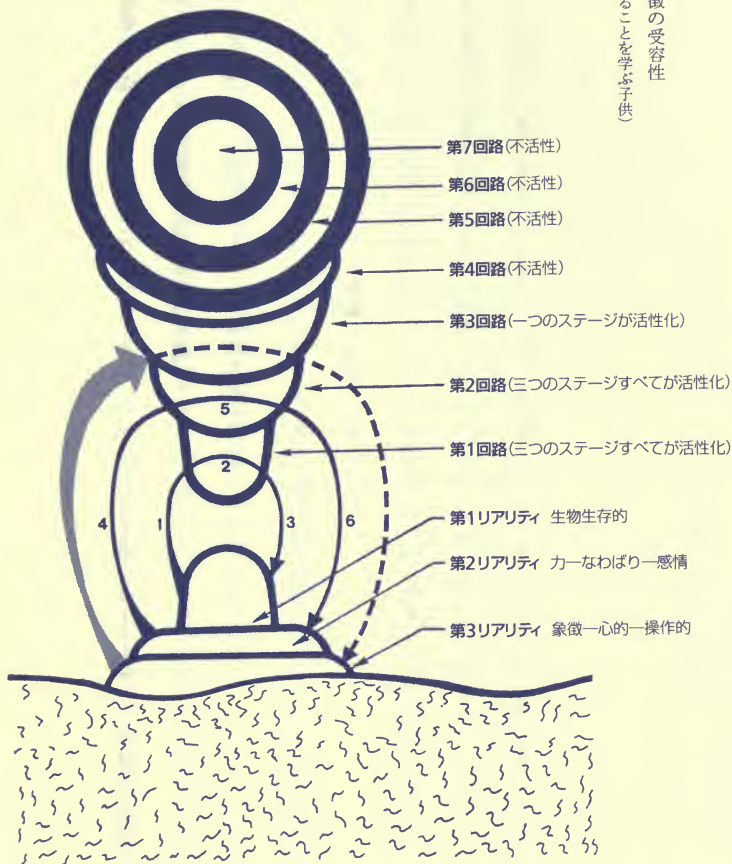
喉頭と手にまつわる外胚葉型リアリティの重要性と浸透は心理学者に理解されなかった。技術的人間はほとんど全面的に人工物に取り

ステージ七

乙女座

喉頭と手による象徴の受容性

(巧みに話し、物を操ることを学ぶ子供)

(旧石器時代的な模倣)

ステージ七は、子供が話し、人工物を操りはじめる時に活性化される。ステージ八と九が活性化される準備ができていることに注意。このステージは系統発生的に初期に霊長類に当たる。この役割を演ずべく遺伝子的に配線されている人間は乙女座と呼ばれる。

ステージ七の象徴の反復は、いかにして言葉を再生産し、巧みにそれらを繰り返すかを学んだ知識人や哲学者によって、見事に証明される――かれら自身や他人にとってもっとも印象的な筋肉操作の偉業。

ステージ七は乙女座、タロットの恋人、ギリシャ神話のダイアナ-ミネルバ-ナルシッソス-ピュアキントス-エコーによって人格化されてきた。

ステージ七：喉頭と手による象徴の受容性

第三回路は、系統発生的にみると、大脳の左半球が器用さや人工物の操作、象徴を使って話すことを可能にする喉頭部の九つの筋肉の制御などを仲介する専門的機能を発達させた時に出現した。旧石器時代の人間がこれに該当する。

象徴的知性の最初のステージは受容的、模倣的、自己中心的である。骨や石を発見した旧石器時代の人間。大人によって提示される象徴を受け入れ、模倣する子供。魔術的な反復的しるしとして不合理に象徴を用いる大人。

この最初のステージでは、いかなる創意も、概念的思考も、巧みな操作も存在しない。反復が思考と行為の様式である。満足は与えられた象徴を把握することによって生じる。すべてはきまりきった方法でなされる。

原始的な人間の社会集団はこうした象徴的受動性の段階を超えては進化しない。特定の個人は遺伝子的な型や刷りこみなどによって、こうした精神レベルを超えて進歩する。

ステージ六
獅子座
神経-筋肉の連結
（支配の役割を刷りこむ子供）
（哺乳類的政治家）

ステージ六は、子供が自らの支配の方法を確立し、なわばりを維持するために集団-群れの繋がりを作る時に活性化される。このステージは系統発生的にみると、社会的動物、哺乳類の政治家の段階である。この役割を演ずべく遺伝子的に配線されている人間は獅子座と呼ばれ、生涯を通じ、支配を強調する。

を通して支配する。

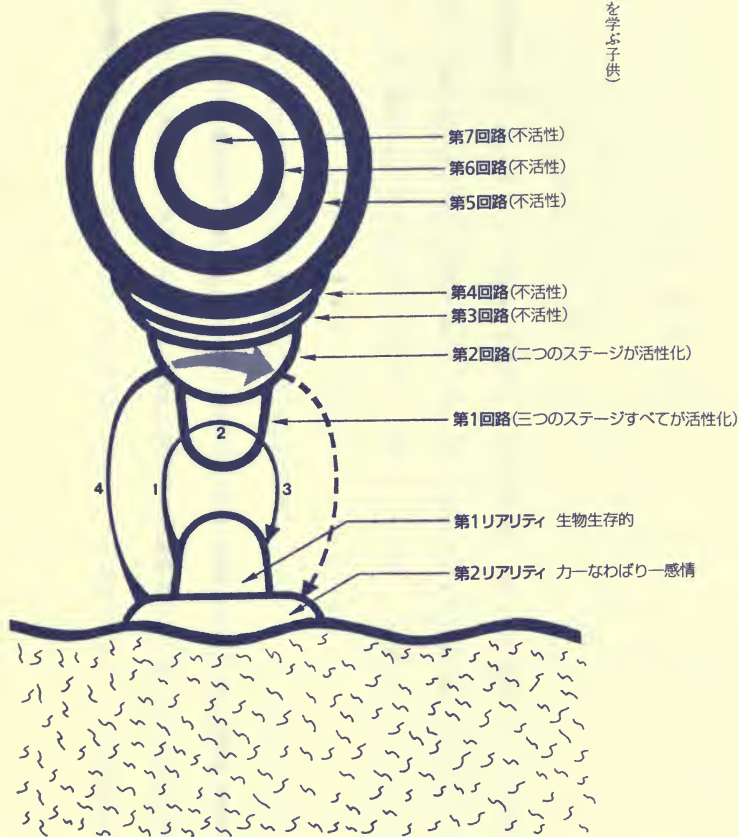
神経-筋肉的適応の次のステージは昆虫のコロニー、霊長類の群れ、ビーバーのコロニー、家畜の群れ、人間集団の各成員間のコミュニケーションと協調とを包含する。

込み入った社会的ネットワークが出現する。個人の生存は社会的な差異を区別し、社会の織物に適応することにかかっている。有機体は集団に合わせるためにある程度の自律性を抑制する。人間以前の霊長類が狩猟集団と階層的な社会単位を形成した時、人間の進化に、感情的な役割の区別と社会的融合が現れた。

第二回路の刷りこみは大人になってもすたれることがない、感情様式と対人的な自我を形成する。

このステージは獅子座、高僧、アポロ／アマゾニアによって人格化される。哺乳類的な政治家がこのステージを象徴する。

神経遺伝子的トーテムは雌雄の獅子である。第五ステージ——蟹座——は摑み、持つ。第六ステージの獅子は操る——政治的な繋がり

ステージ五
蟹座
神経–筋肉的知性
（重力となわばりの制御を学ぶ子供）
（哺乳類の脳）

ステージ五は、歩く子供が制御、地位、自由などに照らして動きや筋肉の行為を理解し、評価しはじめる時にはじまる。このステージは哺乳類的である。この役割を好むべく（遺伝子的に）配線されている人間は蟹座と呼ばれ、生涯を通じ、所有、制御、中心的な地位を強調する傾向がある。

適切な感情的反応が選択される。

このステージは黄道帯の蟹座、タロットの皇帝、ギリシャ神話のヘスティアによって人格化される。

このステージの黄道帯の象徴は蟹座である。このステージをよりうまく表現する神経遺伝子的トーテムはレオニド・ブレジネフの顔をしたケンタウルス、あるいはタバコを吸う恐竜であろう。

筋緊張性の第二回路は上方への動きと可動性という特徴をもち、無力感の回避、なわばりの制御、自律の獲得などをプログラムされる。重力となわばりは生命進化の基本的要因である。新しい神経回路が活性化され、海の生活から陸の生活への移行を促す。地上での生存はなわばりの管理——食べ物や子育てのためになわばりをもつための力とずるさ——を含んでいる。種々の哺乳類によって複雑な戦略が育まれる。筋力、速さ、カモフラージュ、逃走、これらはすべて下からの脱出をもくろむものである。

人間の子供は歩きはじめると、哺乳類の政治学からなる第二のリアリティを含む複雑な感情的ヒエラルキーの織物を感じはじめる。適切な感情的-政治的反応の選択は第二の刷りこみによって決定される。接近、回避、攻撃、支配、服従、授受などさまざまなケースがある。食べ物をついばむ順序、支配のヒエラルキー、なわばりの位などにまつわる複雑な機微を学ぶことは、哺乳類や小さなこどもにとって生きていく上で重要なことである。運動-筋肉の反応はもはや自動的な接近／回避の戦術ではない。入力信号はびくびくする神経質な第二の脳によって走査、評価、解釈され、

ステージ四

双子座

神経-筋肉的受容性

(歩き方を学ぶ子供)

ステージ四は、子供が這い、歩きはじめる時にはじまる。筋肉回路の神経配線が開始される。第二回路の受容段階は可動性と逃避を含む。このステージは哺乳類的だ。この役割を好むべく配線されている人間は双子座と呼ばれ、一生を通じ、隠蔽や機敏な動きを強調する傾向がある。

このステージの黄道帯の象徴は双子座——あいまいで混沌としたラベル——である。双子座はカワウソ、ジャッカル、キツネ、齧歯類など、ひそかに、素早く、機敏に行動することで生き伸びる動物たちによってうまく説明できる。

第二回路は、生きた有機体が水を去り、背骨を発達させ、重力に対処する術となわばりの制御、そして支配のヒエラルキーの確立を学んだ時に出現した。

個人の発達史では、第二回路は子供が這い、よちよち歩きはじめる時に活性化される。

ステージ四は自己中心的な探究期で、子供は重力に対処する方法を習得し、動くための筋肉を協調させ、重力に対抗して上へと動きはじめる――だが、協調的な感情の特徴はまだそなえていない。子供は筋肉の動きによって地面を機敏に動き回れる新しい自己を明確にする。

系統発生的にみると、このステージは集団的な協調に頼らずに生きる、「感情的な孤独者」として機能する動物形態を生み出す。

原始的な心理学では、このステージは双子座、(狡猾な)女教皇、ヘルメス・マーキュリー(女性形――マーキュリア、ヘルミア)として人格化されている。

ステージ三
牡牛座
生物生存的な内胚葉型融合(協同的)
(幼児-母親の結びつき)
(身体的政治家)

ステージ三は、幼児が生命を与えてくれる母親的人物と繋がる時にはじまる。このステージは系統発生的にみると、無脊椎動物である。この役割を演ずべく遺伝子的に配線されている人間は牡牛座と呼ばれる。一生を通じ、物質的慰めや無自覚的な満足を強調する傾向がある。

――貪欲かつ感覚的で開かれている――である。成人の牡牛がより複雑な物質を求めるという事実は、同時にかれらが非常に母親的で依存的であるという事実を隠すものではない。

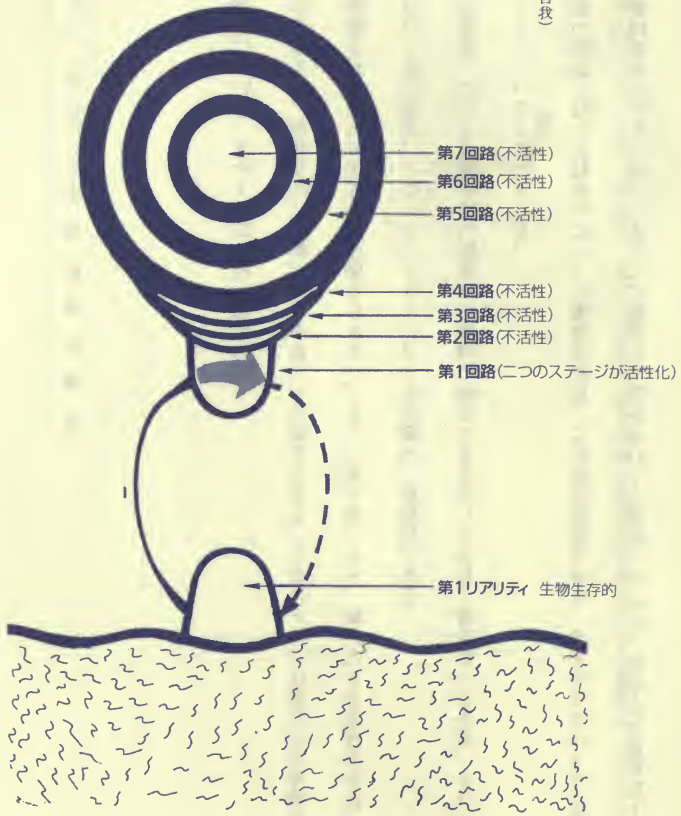
ステージ三：生物生存的融合

種の進化において、ステージ三は両生類である。

個人の発達では、神経学的に母親につながれている幼児である。このステージは最初の対有機体的繋がり——母と子の繋がり——を導入する。この内胚葉型融合がもたらす相互利益は図りしれない。互いに貪り喰ったり、戦ったりする代わりに、はじめて二つの有機体が互いの生存のために神経学的に結びつくのである。そのコミュニケーションは内臓的、細胞的である。

人間の場合、このステージは内胚葉型の肉親の結びつきを指しており、黄道帯の牡牛座、タロットの女帝、ギリシャ神話のデメテルとケレス、ディオニュソスによって人格化される。

牡牛座の型はしばしば牡の牛によって象徴される。これは不正確であり、大半のオカルトや占星術の体系に蔓延している男性優位主義を表している。牡牛座は牡牛と子牛の結びつきとして説明した方がよい——海牛、カエル、蛸がより適切なトーテムであるが。牡牛は幼児のサイン

ステージ二
牡羊座
生物生存的知性
(新生児、身体的に貪欲な自我)

ステージ二は誕生の直後、赤ん坊が生物学的生存の行動を識別、記憶、選択、統合しはじめる時にはじまる。ステージ一は活性化されているが、ステージ三(点線部分)はまだ活性化されていないことに注意。このステージは系統発生的に海洋的である。十二の人間集団の単位の中でこの役割を演ずべく配線されている人は、牡羊座と呼ばれ、一生を通じ、ステージ二の鮫のような行動を好むか、そうした行動に退行する傾向がある。

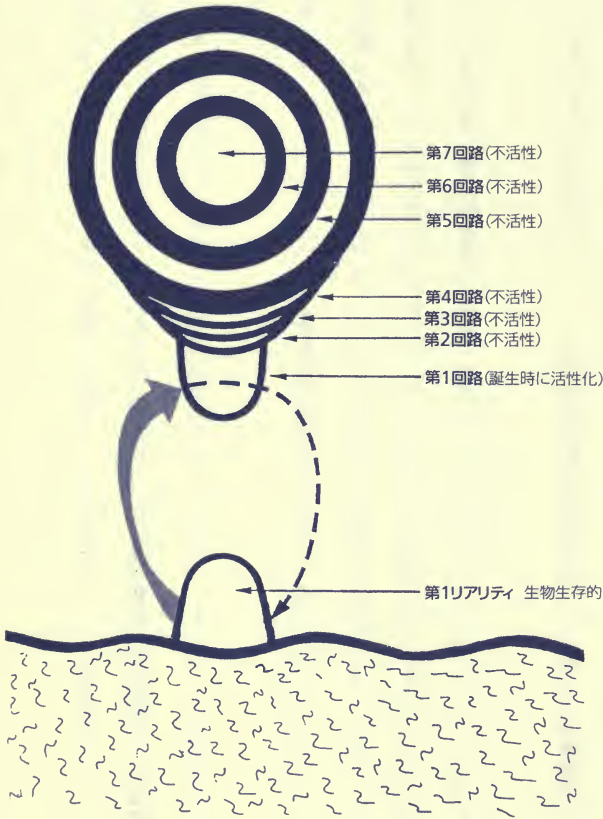
ステージ一のアメーバー的有機体は両極的な非対称性を発展させなかった。ステージ二の有機体は普通、頭(口や触手)と足(柄や基盤)からなる非対称性の両極構造を発達させた。神経系は単純な網からなり、頭部でもっともこみ入っている。この両極性は重力によって決定される垂直的な次元ではなく、前後の次元に根差すものだ。さまざまな種類の細胞への分化が起こったのである。

人間の幼児は神経学的に海洋有機体に対応している。幼児の植物性の回路は基本的リアリティとして、環境への最初の有機体の執着を刷りこむ。このステージは黄道帯の牡羊座、タロットの魔術師、ギリシャ神話のネプトゥヌスとアンピトリテとして人格化されている。

種の進化において、ステージ二は刺激の記憶、統合、評価ができ、消化のアプローチに加え、攻撃のアプローチができる多数の神経細胞からなる神経系を備えた筋肉と骨をもつ海洋有機体である。

個人の発達では、ステージ一は最初の刷り込みが形成された後——つまり、基本的に安全なもの（母親的なもの）と危険なもの（母親的ではないもの）とを識別できること——の新生児である。

牡牛座は若い未熟な黄道帯のステージとして伝統的に説明されている。これがステージ二の自己指示的な幼児の衝動的性質を写しだす。けれども、羊は正しい遺伝的なサインではない。牡羊座は楽しい気分の下では、男女の人魚であり、攻撃的な気分の下では、鮫である。

態度は腹-背的である。ステージ一の有機体が擬足の流れを活用して、受け取ったり、逃げたりすることしかできないのに対して、ステージ二の有機体は吸う、合体する、消化するといったことに加え、選択的かつ攻撃的に噛む、くっつくという行動を取ることもできる。

ステージ一
魚座
緊張性受容
新生児

ステージ一は、新生児の赤ん坊が最初の肯定的刺激である乳房を与えられた時にはじまる。ステージ二と三が活性化する準備ができていることに注意。このステージは系統発生的に単細胞的である。十二の単位からなる人間集団の中でこの役割を演じるよう遺伝子的に配線されている人間は魚座と呼ばれる。人生を通じ、すべてがステージ一の海洋的行動を強調する、あるいはそうした行動に退行する傾向がある。

ある。

魚座がアメーバーであること——自らのＤＮＡにきわめて近く、遺伝のテープと調和し、非常に軟らかくて湿っている——を忘れるべきではない。

ネープルートとして人格化されている。

このステージの自己は内臓的エンティティ――貪欲な包括的内胚葉型の自我同一性――として定義される。

すべての個人は自らの人生において、十二の地球的な有機体の進化のステージ――単細胞から中央集権化された社会主義に至るまで――を再現する。

同時に、それぞれの人間は種族集団を完璧な生存単位として維持するために必要な十二の神経遺伝子的な任務の一つを強調するよう遺伝的にプログラムされている。一人の人間は社会的な分子としてつながれるよう設計された一元素である。進化には十二の地球的ステージがあり、霊長類集団がそれぞれの生存の場所を占める必要がある。三つの生物生存的な「細胞」の戦略は魚座、牡羊座、牡牛座によって実行される。三つの哺乳類の政治的戦略は双子座、蟹座、獅子座によって、三つの象徴操作の機能は乙女座、天秤座、蠍座によって、そして三つの家庭化の戦略は射手座、山羊座、水瓶座によって演じられる。

ステージ一は人間集団にとって内臓的細胞の機能を果たす――行動のレベルでは、これは健康と食べ物に関わっている。基本的に、魚座は身体政治のための内臓器官である――そのようなものとして、種のもっとも初期の単細胞的意識が有する植物的な智恵と、そうした意識への繋がりをもたらすのだ。人はしばしば魚座に「深い」神秘的な性格を読み取る。これは最初のもっとも融合的なステージがもつ、海洋的性質への詩的な献辞で

神経進化における十二の幼生期ステージ

ステージ一：生物生存的受容性

単細胞有機体や生まれたばかりの哺乳類は受動的に漂っており、内胚葉型の刺激しか受容できない。これは摂取に関わるコンテリジェンスの最初の段階である。その態度は腹-背的である。内胚葉型の接近／回避の指向をもつ。

植物性のコンテリジェンスは快楽／苦痛を仲介する。細胞の安全／危険。

ステージ一は生命へと向かって奮闘する基本的な種の努力である。星-光に向かう最初の動き。環境と神経とをつなぐ臍の緒的なラインはまだできていない。

このステージは原始的な前神経学的な象徴においては、黄道十二宮の魚座、タロットの患者、ギリシャ-ローマ神話のハデス-ペルセポ

進化の周期律表は神経学的進化の24のステージを明確にする

12は地球的、集合的、機械的、残りの12はポスト地球的、サイバー量子的

周期	進化のステージ
1． 生物学的生存 (海洋)ステージ	1．無脊椎動物 2．海洋脊椎動物 3．両生類
2． 地上の哺乳類 ステージ	4．逃げる哺乳類 5．捕食哺乳類 6．狩猟採集民
3． 象徴的道具 ステージ	7．道具を使う人間、旧石器時代 8．道具を作る人間、新石器時代 9．種族、青銅器時代
4． 産業ステージ	10．封建制 11．国家、低次の産業 12．多国籍、高度な産業
5． サイバー身体的 ステージ 感覚情報の操縦	13．個人的消費者の快楽主義 14．個人的美学の習得 15．快楽主義的-美学的連結
6． サイバー・ エレクトロニクス・ ステージ	16．脳とエレクトロニクス・テクノロジーへの個人 17．脳とエレクトロニクス・テクノロジーの個人的習熟 18．神経－エレクトロニクス・ネットワーク
7． サイバー遺伝子 ステージ DNA-RNA データの操縦	19．遺伝子テクノロジーを通した個人による脳管理 20．遺伝子テクノロジー情報の個人的習熟 21．遺伝子テクノロジー情報のエレクトロニクス・ネットワーク-連結
8． サイバー・ナノ・ テクノロジー・ ステージ 原子情報の操縦	22．ナノ・テクノロジー(原子情報)への個人消費者のアクセス 23．ナノ・テクノロジー(原子情報)への個人的習熟 24．ナノ・テクノロジー(原子情報)の連結

第二部

エネルギーの周期律表は神経学的進化の二十四のステージを明確にする

り、パーソナル・パワーの走査なのだ。

宇宙に偏在する胚種というＵＦＯが三十億年まえに地球上に着陸し、信号を生み出した。その英訳版が今、あなたの手の中にあるものなのだ。

S・M・I²・L・E

S. M. I². L. E. S. M. I². L. E. S. M. I². L. E. S. M. I². L. E. S. M. I². L. E.

われがなれるすべてはパーソナル・パワーにかかっているのだ。十分なパーソナル・パワーをもっていれば、一つの言葉でも十分にわれわれの人生の進路を変えることができる。だけど、十分なパーソナル・パワーをもっていなければ、もっとも素晴らしい智恵の断片がわれわれに明らかにされても、その啓示はこれっぽっちの相違も生み出さない」（カルロス・カスタネダ『未知の次元』より）

この本は万民のためのものではない。人類は現在、遺伝子的な分岐点にさしかかっている。人類のおよそ九三パーセントがこの惑星上の生活に適応しようとしていると想定してもらいたい。生態学は魅惑的な恐竜科学であり、ポスト・ヒューマンの大半を、地球の状況に順応させ、中央集権化された広域放送システム（ABC、NBC、CIA、MAO、CKB）によって操られる、行儀のよい、受動的なロボットのようなサイボーグ的昆虫になるよう仕向ける。このマニュアルは地上の読者のために、快楽主義的な五つの脳からなるサイボーク的存在に適応するために必要な神経学的なステップを概略している。

この伝達は、生物学的な不死性を獲得し、子宮としての惑星を去り、銀河市民となり、すぐれた星間エンティティと融合することをDNAによって設計されていると思われる七パーセントの人間のために、一つの異なった信号を点滅させる。

このマニュアルは従来の著者-読者のゲームのために工夫されてはいない。これは変異のための信号なのである。知性のテストであ

28.

本書(『大気圏外心理学』)を天文神経学のテキストと考えてもらいたい

この伝達の最後の数ページは、われわれを数十億年の進化に連れ出し、高次の知性を紹介し、古生代植物としてのわれわれの役割を説明し、哺乳類の身体構造をもった幼生期の諸段階へとわれわれを導き、象徴による条件づけのロボット性を説明し、性的な男性派へ至る鍵を提供し、多局面のニューロスコープ(一生の再刷りこみのフィルムを備えた)の使用法をわれわれに示唆し、生物学的な不死性と時間の拡張を獲得することを可能にするのに十分な手がかりを与えてきた。

すでに、この序文の中で、これまでに書かれてきたすべての本に含まれている以上の大気圏外情報を伝えてきたと言うこともできる。

「だけど、ひょっとしたら、私は明らかにしていけないことを明らかにしつつあるのかもしれない、ドン・ファン」

「なにを明らかにし、なにを秘密にしておくかは問題ではないんだ」と彼は言った。「われわれがするすべてのこと、われ

S.M.I². L.E.　S.M.I². L.E.　S.M.I². L.E.　S.M.I². L.E.　S.M.I². L.E.

進化できない。「だから私は一人だった」というのは寒々とした結論である。

　最初のポスト広島世代は本当の意味での失われた世代である。いなか者の刷りこみから解放されているが、身体地理を超えてどこにも行くところをもたないのだ。一九七〇年代の皮肉主義といらだちはこうした幻滅の所産である。

　このような理由で、地球外心理学者は「ウッドストック」世代の面々とコミュニケーションする時に注意してかからなければならない。かれらは身体に刷りこみをしたが、あまりに年令をとりすぎて(二十五歳-三十五歳)固まってしまっているので、地球外移民の神経物理的信号を受け取ることができないのだ。

て工場の無気力、汚染された過剰人口などを生み出す科学主義に反発することは理解できる。しかし科学的研究の拒絶は無知の独善性となる。オカルティストは長髪の無学な白人農園者になる。天文学、生化学、遺伝子学、核物理学などがもたらす証拠は、哲学や宗教の真のフロンティアを明らかにする。

『サイアンティフィック・アメリカ』誌はいかなるオカルト雑誌より「ぶっ飛んで」いる。元素の周期律表はタロット・カードより予言的である。原子核はいかなる神学的な空想より神秘的で博識な領域である。ブラック・ホールという謎をもつ膨張宇宙という宇宙論はダンテやホーマーやラーマヤーナの終末論より風変わりである。

こうした人工物の高貴なる拒絶にもかかわらず、ヒッピー-ヨーギ-タントラ行者のエスタブリッシュメントは進化——惑星間移民に備えるための過渡的段階——を浸食する自己耽溺的な障害である。

ドン・ファンの教えの中に、神経身体的な限界を鮮明に見ることができる。カスタネダの戦士-魔術師は社会的刷りこみを撤廃させようとする威厳に満ちた、ユーモラスな修行においては賞賛すべき存在である。ドン・ファンは正確で比喩的な神経論理を明らかにした。幼生期の刷りこみのリアリティの島(トナール)とナワールの直接体験とを明確にした。

しかし、ドン・ファンの哲学は悲観的である。「地上にはいかなる生存者も存在しない」。それはステージ十五の神経身体的な連結へと

S.M.I².L.E.　S.M.I².L.E.　S.M.I².L.E.　S.M.I².L.E.　S.M.I².L.E.

――内側を見ろ。アストラル・トラベルや意識の受動的変化はわれわれを約束の地に輸送してくれるだろう。

――自然に戻れ。旧石器時代に戻れ！ 簡素になれ、テクノロジーを避けよ、野生のアスパラガスを追え。身体の智恵、有機的な純粋性、感覚的快楽に頼れ。

――すべては一つである。宇宙は香りのないコットン・キャンディの同形異像的な霧である。大気圏外心理学や神経遺伝学はヒンドゥー教や仏教が唱える単純なバニラ・プディング的一体性を分裂させようとする不自然なエリート主義的な試みとして攻撃される。

これら三つのオカルティストの姿勢に通底しているのは、科学、テクノロジー、進化、知的能力への反発である。オカルティストの理論の中には、いくつかのヒンドゥー教のチャントをそらで覚えたり、いくつかの形式的ではない神智学的な教義をそらで暗唱したり、せわしなく問いを発する心を鎮めたりすること以外、学ぶことはなにもないという前提が暗黙のうちに含まれている。

神経身体的回路の三段階――ヒッピー(十三)、ヨーギ(十四)タントラの実践者(十五)――は身体指向であり、意図的に象徴に対して愚鈍であろうとする。五つの回路からなる脳をもった人間が幼生期のテクノロジーの昆虫的サイボーグ型物質主義、プラスティック商品、軍需産業、組み立

ルイズム、キリスト教神秘主義、ハシディズム、実験的福音主義、無数にある東洋的なはったり主義など——に傾倒する。

身体意識と感覚的消費主義の罠はフェデリコ・フェリーニによってうまく要約されてきた。

> 人々は未来への信仰を失いつつある。われわれの（幼生期の）教育は不幸にも、つねに一連の達成——学校、軍役、職業、そして最終的なフィナーレを飾るものとしての天国の父との出会い——へと無理矢理仕向けられた人生のためにモデル化されたものだ。だが、明日がもはやそうした楽観的なパースペクティブの中では見えなくなっている現在、われわれは無力感と恐怖の感情をもって立ちすくむ。もはや「よりよき明日」を信じることができない人々は、当然、絶望的な利己主義にもとづいてふるまう傾向がある。かれらは必要とあらば獰猛に、ささいな個人的利益、ささいな身体、ささいな官能的欲求を守ることに汲々とする。私にはこれは七〇年代のもっとも危険な徴候であるように思える。

現世の刷りこみから離れ、あちこちを歩き回る五つの脳の人間は、地球外ムーブメントのための語彙と手法をもっていないために、幼生期の超越概念へと逆戻りする。毛虫は幼生期を過ぎた後の生活がどんなものかを夢想するのだ。

警告を列記しよう。多くの五つの脳のヒッピーやヨーギたちは、大気圏外進化に対するもっとも熱心な反対者である。かれらは惑星間移民の実用プランに抵抗するために三対のきまり文句を用いる。

徴に引っ掛かっていない「羽のない蟻」の転換期を表している。1Gの地球やそこでの生存のためのルーティーンはもはや「リアル」ではない。ヒッピーや禅の達人はもはや感情的な状態の合図に反射的には反応せず、器用な成功に動機づけられていない。また、社会がその労働者を家庭化する徳／恥の体系にも動かされない。しかし、新しく活性化された回路を自在に操れるほどにはまだ進化していない。真のポスト地球人間は恥をもたないのだ。

「ヒッピー」という言葉は、最初のポスト幼生期の段階を表す遺伝子用語であり、遺伝子的（黄道十二宮の星座）、神経学的（刷りこみ）、歴史的（快楽主義的／サブカルチャー的）に受動的-受容的な快楽主義的ライフ・スタイルに捕らえられた人たちを指している。それを超越的なマスターベーションと呼んでもいい。

最初のポスト広島世代は、地上的な観点から見れば進化したが、自分が地球外存在であることをまだ気づいていない何百万もの禅「ヒッピー」を生み出した。

問題の一部は歴史的な言語にある。現世を超える体験を表すために、幼稚な心理学によって提供される唯一の言語、唯一の象徴は「幼生期の宗教」に根差すものだったのだ。したがって、ヒッピーの新しいリアリティは漠然とした神秘的な用語によって象徴化されている。

コミュニケーションの空白が広がる。一方、ヒッピー、ヨーギ、タントラの実践者は、自分がなにほどか進化したことに気づく。他方、幼生期の象徴から離れた五つの回路からなる脳をもった人間は、あらゆる超越的な望み――魔術、オカルト、チャンティング、魔法、テレパシー、グ

ュートン的ロケットが予測していた惑星間のポスト・アインシュタイン的ロケットを推進させるエネルギー源を提供した。

一九六〇年代の神経学的革命はアインシュタイン的観点の生物学的な確当物を提供した。大気圏外心理学の諸原理は、神秘的なタイトルの論文『宗教的経験――その生産と解釈』*（一九六三年）の中ではじめて提示された。

＊『エクスタシーの政治学』ローニン版に『神の七枚舌』というタイトルの下に収められている。

この論文は広く再プリントされ、アンソロジーの中に収められているが、科学の言語とパースペクティブが未来の神学、存在論、宇宙論を提供することを正確に予測し、惑星外への移民の必然性を指摘しなかったことを除けば、大気圏外心理学の基盤を体系的に敷いたものだった。

核エネルギー、エレクトロニクス、軍によるロケット研究の組み合わせは惑星間のパースペクティブを妨げ、その後つづいた一九六〇年代の科学への幻滅は「内を見つめる」というあいまいな金言を奨励することになった。

その結果、東洋の静寂主義、シャーマニズム、ポップ・カルト的なヨーガへの情熱的傾倒が起こり、体系的な反主知主義、計算されたサッカロースの愚かさ、「ヒッピー」（ステージ十三）や「ヨーギ」（ステージ十四）と称される人あたりの良い、超然とした微笑む自己耽溺的な人間を生み出すことになった。

「ヒッピー」や「ヨーギの身体工学」は十二のポスト地球的段階の最初の二段階、つまり、地球への執着を超えて進化し、もはや地上の象

ポスト地球的人間は未熟なポスト地球的人間とコミュニケーションする時にも注意しなければならない

27.

ポスト地球時代は一九二六年、あるドイツ人の幻視者集団がVerein fur Raumschiftfahrt（宇宙旅行教会）を形成した時にはじまったとある者は言う。

ＶｆＲは会合を開き、研究論文を発行し、ロケット実験を敢行した。政府とは関係のないその集団は中世の錬金術の友愛団による無料奉仕によって機能していた。それはヒトラーの即位後、解散した。ＶｆＲの大気圏外心理学的目標はＶ-１ロケットとＶ-２ロケットを幼生的な目的で用いたナチによって封じ込められた。

同じ時期に、原子物理学者たちは原子核を分裂させるための純粋元素の正しい配列の仕方を探究していた。シカゴにあるフェルミ錬金術チームの成功はもう一つの大気圏外心理学の里程標とみなすことができる。ウラン原子の核分裂は、フォン・ブラウンの原始的な科学燃料で飛ぶ二

進化は単に半分完了したにすぎない、人類は胎児であり、まだ生まれていない、多くの勝れた種が現在の遺伝子プールから進化するだろうといったことを主張する第七回路の議論はとりわけいなか者の傲慢さを傷つけるものである。

ＳＦ作家や天文学者は人間と星間エンティティとのコミュニケーションの問題をしばしば取りあげてきた。この問題はもはや机上のものではない。今、起こりつつあることなのだ。本書が一つの例である。*

＊　物理学、エレクトロニクス、天文学、数学のエネルギー言語はポスト幼生的なものだが、心理学においてそれらに相当する言葉はようやく今認められはじめたばかりだ。

たり、倫理的な相対性を認めたり、時には、惑星から離れ、死から逃れようとするポスト地球的人間の努力を受け入れたりすることすらある。

ポスト地球的人間はいなか者の価値観を公然と、あるいは暗黙に批判しないよう最新の注意を払って行動することを求められる。幼生期の人間にとって、天文学と遺伝学は倫理的な人称の喪失を危惧させる第四回路の倫理問題を含んでいることをおぼえておかなければならない。

いなか者と大気圏外心理学について論じることは、思春期前の人間と性体験を語り合うようなものだ。彼／彼女は単に新しいリアリティを理解できないのだ。神経回路がターン・オンされていないからである。彼／彼女はあなたを子供じみた哲学的なおしゃべりにひきずり込むかもしれない。

幼生期の人間は、刺激的な飛行についての会話の後、自分は地に足をつけたままであることを遅かれ早かれ悟るようになる。この時点でいなか者は、非常に倫理的になり、ポスト地球的人間をエリート主義、人間の苦しみに対して無感覚、反人間的、逃亡者、さらには悪魔的などときめつけ攻撃する。

不死の人間は死ぬべき運命の人間の感受性を傷つけないように注意しなければならない。

とくに、人類の未来の進化について論じる場合は巧みでなければならない。幼生期の人間は、進化がホモ・サピエンスですでに最高の段階に達したと当然のごとく信じている。

3.　性的行動の表現と禁止は恐怖を背負わされている。オルガスムや精子／卵子の交換は安定した子育てを実現するために家庭化されなければならないからである。

幼生期の人間とコミュニケーションする場合、生命、死、哲学的原理、子育て、性についての議論は非常に個人主義的なものであることを認識しなければならない。これらの話題に対する反応は予測不可能で、状況の親密さと安全性によって変わる。

偽善と暴力的防衛は風土的なものだ。

もちろん、ポスト地球的人間は幼生期の刷りこみが撤回された後、何が起こるかということ以外はあまり考えない。かれらは自分たちの身体、脳、DNAとコミュニケーションすることに魅了されている。ポスト幼生期の人間はさまざまな波動を発し、時に、いなか者を混乱させ、時に、かれらを誘惑し、一時的に哲学的な抑圧を放棄させる。

ポスト地球的人間は普通、ひょうきん、エロティック、相対論的で、哲学的に挑発する。いなか者は無意識的にポスト地球的人間の中に差異を感じることができる。だから、幼生期の人間と相互作用する時には、正確で敏感であることが望ましい。

いなか者を誘惑してあまりに多くの真理を裏切らせないよう注意しなければならない。

ポスト地球的人間との哲学論議の最中に、幼生期の人間はしばしば、一時的な熱狂に足をすくわれ、自分たちの宇宙論に疑問を告白し

1.　いなか者は生命がどこからやってきて、どこにどのようにして向かおうとしているのかということについて無知である。かれらは自分たちの死ぬべき運命を恐れているのだ。それぞれの幼生期の人間は、自分たちが本当には信じていない生と死のもろい哲学を受け入れてきた。だからこの基本的な偽善が生命の起源や方向についての科学的論議によって脅かされると、いらだち、パニックに陥るのである。

ルーテル教会はつねに聖書を基にしてきた」と地方の塗料会社のプロダクション・マネージャーであり、教会の日曜学校の地区監督であるフィル・ベックは説明する。「もしそれに疑問を抱きはじめたら、どこでやめたらいいのだろう？　じっと坐って創世記を理解するほどの教育をもたなければならないとしたら、なぜ神はルターにそれを人民の言葉で語らせたりしたのだろう？　どの地点で私はその気違いじみた混乱のすべてをドアの外に放りだしてしまえばいいのだろう？（――『タイム誌』）

2.　いなか者はＤＮＡのロボット-奴隷である。かれらは種を永続化させること、育てること、若者を育てるための地上的な環境を整えること、文化的な生存パターンを伝達することなどに盲目的に励む。このロボット性を明らかにしたり、疑問視したりする恐れのある議論はすべて極端な苦痛を生み出す。幼生期の人間は不安を誘う不確かな領域の洞察に耐えられないのである。

大抵の幼生期の人間は罪人や「悪」人とみなされることを恐れて暮らしている。社会的に認められているという感情を維持するために、絶えまない再保証が必要なのだ。

幼生期の人間と性、哲学、倫理の話題について話をすると、大変危険な領域に入り込む。いなか者と哲学を論じるのはほとんど不可能なことである。

偽善、無意識的動機、不合理な逆説といったものは是認を必要とする。そして恥の恐怖が、哲学や宗教にまつわるあらゆる議論を支配する。

幼生期の人間は自分たちの刷りこみや条件づけられたネットワークに適合しない第三回路の象徴に飽きてしまうこともあれば、それを締め出してしまうこともある。しかし、異なったものとして感じる回路四の倫理的な象徴や行動は情熱的な反応や時に暴力的反応の引き金となる。こうした哲学的な感じやすさのゆえに、いなか者は哲学的な議論を避けようとするのだ。

このような恐怖症は、ポスト幼生期の人間が地上的人間と大気圏外心理学について議論しようとすると、痛々しい反応を引き起こすことがある。

哲学的恐怖症の理由は次のようなものだ。

か、体制のシステムを確証し、未来の感情的な報酬を約束するモデルに教師がなる場合である。

　幼生期の人間は、かれらの連想のネットワークにおいて変化を要求する新しい象徴を烈しく拒む。この学ぶことに対する拒絶は心理的なものではない。それは神経学的、生化学的なものだ。新しい観念は連想の配線を変えることを要求し、文字通り「頭痛」を引き起こす。

　幼生期の人間とのコミュニケーションは連想のネットワークを構築することを含んでいる。あなたは文字通り、それぞれの新しい観念を既存の神経の連結に繋がなければならない。幼生期の人間は児童期を過ぎると、新しい象徴をほとんど学ばない。かれらは単に刷りこみに密接に結びつく象徴を付け足したり、翻訳するだけである。これは、新しい観念が理解されるのに少なくとも一世代かかるという事実を説明する。

　幼生期の人間とコミュニケーションする時、ポスト幼生期のプロセスを説明する象徴がほとんどないことを思い出すことがとりわけ重要である。

　毛虫とコミュニケーションするのに、蝶の言語を用いることはできない。

　回路四の言語は現世的な倫理と社会的な価値を含んでいる。ここにおいて、われわれは、大幅な文化的差異が存在することを発見する。基本的な精子／卵子のオルガスムスへの招待はむろんグローバルなものだが、置換、禁止、昇華の意味論は微妙になる。実際、個体性、親密性、価値を表す象徴の一貫性を欠く一時性などは、いなか者とコミュニケーションする場合、ポスト幼生期の人間の側に最新の注意を要求する。

——細胞の健康
——感情的-ヒエラルキー的状態
——人工物を操作するゲーム
——社会的-性的な安全性。家庭的な保証

すべての幼生期の交流は四つの生存のための態度のうちの一つに役立つ。幼生期の人間はこうしたかぎられた四チャンネルのコミュニケーションに心地よく適応し、それぞれの刺激が生存に役立つかどうかを自動的に走査し、それぞれが自分自身のリアリティにかまける蟻のように慌ただしく立ち回り、生存に関わりのある他人からの合図に自動的に反応する。

幼生期のコミュニケーションは四つのシステムで起こる。そのいくつかはすべての種にとって理解可能であり、いくつかは同じ文化的刷りこみ集団の成員にしか分からない。

幼生期の人間はその事実がかれらの第三回路のネットワークに適合し、即、感情的状態に報酬をもたらさない限り、情報を受け取ることを好まない。民主党員はニクソンについての事実を聞くことを喜ぶが、共和党員はいらつき、抵抗を示す。

幼生期の人間は特殊な動機をもった環境の下でのみ、新しい象徴を学ぶことに専心する。新しい結びつきが体制のシステムに立脚する

26.

ポスト幼生期の存在は幼生期の人間とコミュニケーションする時、非常に注意深くなければならない

大気圏外心理学は、幼生期の人間が四つの生きるための刷りこみによって規定されるリアリティの中に住んでいると主張する。脳は毎秒一億のインパルスを受け取るが、地上の意識は四つの刷りこまれたゲーム・ボードの一つに条件づけられた信号に拘束されている。条件づけられていない感覚、フィルターをかけられていないリアリティの荒々しい渦は背景のノイズとして存在する。

したがって、幼生期の人間とコミュニケーションする時には、次のことを思い出さなければならない。

幼生期の人間は、あなたが彼／彼女の限定されたリアリティの島に取り込まれ、彼／彼女の狭い心の帯域でコミュニケーションすることができない限り、またあなたのふるまいが彼／彼女にとって利益になるか脅威になるかしてなんらかの意味を持たない限り、あなたには興味を示さないし、あなたが存在するとはみなさない。

ポール、スタイン、クラインスミスといった遺伝学者たちの研究は、ヒストンが有機体の未来の設計を含んでいる、ＤＮＡ暗号の半分を覆いかくしていることを匂わせている。もしヒストンのカーテンを引き、遺伝的な未来の青写真を見ることが可能になったら、「われわれは何者で、どこに向かおうとしているのか？」という問いに対して、歴然とした回答を得ることになるだろう。その質問は第一人称の単数で提出されなければならない。遺伝子的民主主義の過ちはゴーガンをして次のように質問せしめた。「われわれはどこからやってきて、どこに向かっているのだろう？」現在、その質問は次のようにのみ問うことができる。「私はどこに向かっているのか？　私は遺伝子の中にどのような遺伝的未来を持ち運んでいるのだろう？」

われわれのめいめいは現在の人間のストックや大半の他の人間とは大幅に異なる、あらかじめ暗号化された未来の有機体の設計図を持ち運んでいる。

2. 進化の速度は加速している。

人間の状態は、体型、神経の機能、生態、人口の密度と多様性などの面で加速度的に変化している。二十五年前、五十年前、百年前、千年前、一万年前の人間の状況を考えてもらいたい。そして同じ速度で加速化される変化がつづくと想像してもらいたい。あと二十五年したらわれわれはどのように進化するだろう。後、千年たったら?

3. 進化のプロセスは増大する文化のスペクトルを生み出す。現在の人間の遺伝子プールは多くの異なった方向に進化するだろう。現在の人間の遺伝的ストックから何百もしくは何千という新種が進化する可能性がある。

社会的な意味は驚くべきものだ。あなたがこれから出会う一〇〇人の人間が、それぞれあなたとは異なる新しい種に進化する可能性があるのだ。兎がキリンと違うようにである。およそ七五〇〇万年前、ある食中動物(キツネザル)は、人間を含む一九三種類の霊長類がそこから出現することになる原種をもっていたのだ。

自分自身を理解し、人間の状況を理解するには、人類がどのように進化しようとしているのかを予測することが有効である。

現在の人間の苦境を特徴づけている葛藤や混乱の多くは、われわれが遺伝的にそれぞれ大幅に異なっており、DNAの型により多くの異なった方向へと進化すべくあらかじめプログラムされているという事実を受け入れるなら、緩和され、取り除かれるだろう。

25.

さまざまな未来的なポスト・ヒューマンの形態が出現するだろう

進化のプロセスは情容赦のない連続性をもって変異を計画している。すべての生きた有機体は進化の設計図の中である部分を演じる。

「私とは何者で、どこに向かっているのか?」(これを遺伝子的な目的論の用語に置き換えると「どのような方向に私は変異しようとしているのか?」という問いになる)という基本的な問いに対する回答は八つある。

遺伝子的なパースペクティブはタブーであり、脅威を生み出す。ある当惑を誘う事実にわれわれを無理矢理直面させるからだ。

1. 人間という種は劇的な変化をこうむりつつある不完全な形態である。

人類(と、実際には、この惑星上の生命)は現在、進化の中間点にいる。三十億年かかってわれわれは単細胞から進化してきた。

これから、もっと劇的な変化を顕してくだろう。

した。新しいコンテリジェンスのレベルが明確になってきたのだ。

なカルト主義者、占星術師などが殺到し、新しい超越状態を説明するオカルト用語や「あの世」的な解釈を提供した。

一九六〇年代の問題は次のようなものだった。物質文化の刷りこみから撤退した後、あなたはどこに行くのか？　過去の答はこうだった。イエスに戻れ、ヘシディズムに戻れ、インドに戻れ、開拓者たちの自然の単純さに戻れ。超越的マスターベーションの今とここ。「ミー」世代。

意識の流行は地球的なリアリティを「ターン・オフ」するものとなり、どこにも行くあてのない早熟なミュータントに、慰めや心の平和、超然とした穏やかさ、健康食品ブーム、気持ちよくさせる感覚的なスーパーマーケットなどをもたらした。ウォーター・ベッドの流行は無重力の感覚的自由をほのめかす早熟な第五回路の変異を予感させる古典的な例である。

一九六〇年代の快楽主義的精神は、新しい神経回路の受容的、解釈的使用法であるステージ十三の顕れだった。最初のポスト幼生期世代が混乱し、方向性を見失い、軽薄で、いらいらするほどぼんやりしているように見えるのは当然である。次の世代の仕事は新しい体験を伝達し、知性を高め、時間を制御し、科学的証拠に基づいて大気圏外モデルを生み出す方法を学ぶことである。

変異は幼生期の文化にはつねにわずらわしいものだ。リアリティのゲームが子供時代の刷りこみよりおおきくなることを欲する者はいないのである。

遺伝の時刻表は、神経系がどのように働き、ロボット的シナプスの反応をどのようにしたら停止できるかを人類が理解する地点まで達

ローマ・クラブ、ランド・コーポレーション、ハーマン・カーン、すべてが未来に投影された過去の物質的傾向の統計的な推測を提示している。かくして、われわれは、未来がスウェーデン化されたロス・アンジェルスの地球的な拡張になるだろうと告げられる。「未来主義者」による現在の予測はすべて、個人の自由や創造性が過剰人口による圧迫、資源不足、拘束的な社会制御といったもので制限される、空調の効いた蟻塚的世界を予報する。

未来予測の中できまって排除される一つの可能性がある。コンテリジェンスの突然の増大（I^2）である。

一九六〇年代は意識の全般的な上昇、大規模な「心の分裂」、幼生期の刷りこみからの大々的な撤退を目撃した。新しく刷りこまれたリアリティの数々は考え抜いた上で選ばれたものではなかった。両親の文化の特徴をなす人工物と象徴からの「ドロップ・アウト期や、直接的な感覚の喚起を嬉々として受け入れる快楽主義的な受容（「いい気持ちになって、ハイにとどまれ」）があったが、他方で、テクノロジーと科学的思考を拒絶する不幸な傾向があった。一九六〇年代のドラッグ・カルチャーは「スペース・アウト（ぶっとぶ）」（これはいい言葉だ）とか「ハイ」といったものの周囲をさまよっていたが、どこにも行くところがなかった。*

*　「ストーンする」という言葉は、「お荷物を背負わされる」という言葉と同じく、悪い用法である。一世代では恒星間移民にはあまりにも短すぎる。

この神経的な真空状態に、「オカルティスト」、受け売りのカルマ・ディーラー、イエスのセールスマン、「スピリチャリスト」、熱狂的

幼生的な形態を超える進化の鍵は時間の理解と制御である。

喉頭と手を操る回路の出現、旧石器時代に花開いた左脳の象徴操作と論理的思考などが声、文字、人工物による時間信号を世代を超えて伝達することを可能にした。オペラント条件づけや道具的な学習は文化を過去から未来に伝達することを保証する。

幼生期の時間感覚はきわめて短く、狭いパースペクティブに限られている。農民は次の収穫を期待する。政治家は次の選挙を期待する。官僚は給料日、週末、夏季休暇を待ち望む。両親は子供たちに期待を脹らませる。

幼生期の文明は未来に関する計算された無知に基づいて機能する。四つの脳の人間は未来について知ることを欲しないのだ。自らが抱いているリアリティの刷りこみの安定性が脅かされるからである。四つの脳の社会は現在について知ることを欲しない。予測が組織された不確実性に向かって盲目的に働こうとする動機を弱めてしまうからである。

未来予測にはタブーが存在する。『未来の衝撃』は現在の衝撃についての本であるように思われる。それは過去とは異なる世界、すなわち子供時代に刷りこまれたリアリティとは異なる世界によって生み出される恐怖と混乱について述べている。未来恐怖があまりに強烈なため、未来はベストセラーの本の中では直面できない。

未来の計画をたてようとしている科学者集団でさえ、奇妙なことに、進展する神経学的-突然変異的な変化を予見することができない。

24.

進化は、われわれの誰かが未来の意識的な使者になることを要求する

現在まで、人間は神経学的に未来を想像することができなかった。

この禁止(ネオフォビア)は遺伝子的に課されたものだ。幼生期の神経系は現世的なリアリティを生み出す。毛虫にとって飛ぶことを「考える」ことは生きていく上で危険なことである。現に毛虫が飛ぶことを考えられないのは、羽をもっていないからである。前人間的な生命の形態は時間意識をもっておらず、未来を予測する能力をもっていないように思われる。二つの直接的な生存回路で動いている哺乳類は進化のプランについての概念をもたない。*

* この仮定はもう一つの人類中心的な神話かもしれない。精巧な構造をもった蜜蜂の巣は、新しい蜜蜂の世代に送られる時間に拘束された文化的信号なのかもしれない。

けれども、神経学が神経遺伝子学の道具であることを思いださなければならない。幼生期のリアリティや身体のリアリティを再刷りみこしつづけても無駄である。第六回路は地球外存在とポスト・ヒューマンの遺伝子的意識のために設計されているのだ。こうして、ＬＳＤのような神経伝達物質はポスト幼生的な機能をもつものとみなされる。

ＤＮＡ暗号は全生命の青写真——過去の歴史と未来の予測——を含んでいる。脳の賢明な使い方はＤＮＡ暗号に刷りこむことである。

来るべき何十億年の人類の進化は、すでに遺伝暗号の中にプログラムされているのかもしれない。それは、ヒストンと呼ばれる化学的な覆いによって表現を阻止されており、非ヒストン系のたんぱく質によってスイッチを入れられる。*

＊　潜在的な「蝶」が毛虫の染色体の中に隠れているように、ポスト幼生的な人間の未来がわれわれの遺伝暗号の未使用部分に潜伏している。

DNAの青写真は生命を惑星から飛びたたせ、高速の時間の相対性の状態に入りこみ、共生的な長寿を獲得し、われわれを銀河へと運ぶ核融合エネルギーを生み出して操り、ついには、現在の物質を超えて進化するよう設計した。

一九七六年の今日、賢い人間は未来の進化の全般的進路を予測し、それらの必然性の基盤に立って、神経学的な変異に参加するための充分な証拠を握っている。自分たちの頭を使い、すみやかにコンテリジェント（意能的）になる時期なのだ。

自分自身が条件づけや偶然の子供時代の刷りこみによって制御されることをゆるす人は、ロボットであることを受け入れているのだ。遺伝的な指示に従うためには、幼生期の刷りこみを撤回し、アインシュタインの相対性に基づく新しい神経のリアリティ、新しい言語を生み出す必要がある。

神経学は選択的な再刷りこみの科学である。神経系を映画カメラとして用いる科学である。一連のリアリティを意識的に生み出すための科学である。

23.

神経系のもっとも賢明な使い方は遺伝暗号に刷りこむことである

身体と神経系の構造は遺伝暗号によってあらかじめ設計されている。

その暗号はアミノ酸でできた時間スクリプトで、数十億年の生物学的進化の経過を含んでいる。それは過去だけではなく、未来も包含する。

この惑星上における生命の最初の仕事は大気を変えることだった。植物生命は後に登場する動き回る動物生命の局面に必要な酸素大気を生み出す。このプロセスは「terraforming」〔地球の形成という意〕と呼ばれている。

酸素が生み出されると、暗号は次の進化の局面を生み出すために、身体の中で、エラ、肺、酸素の輸送システムを稼働させるようになった。

S. M. I^2. L. E.　S. M. I^2. L. E.　S. M. I^2. L. E.　S. M. I^2. L. E.　S. M. I^2. L. E.

セスはカメラの構造によって制限され、導かれるのである。

条件づけ、刷りこみ、遺伝子の型の関係をもっとも明瞭に描きだすのは性的な反応である。

受胎時にＤＮＡは性と神経系のモデル（黄道十二宮の星座）を刻印する。

神経系は思春期になると、性的機構のリリース－刺激を刷りこむ。次に社会的条件づけが、徳には社会的報酬、「罪」には社会的な罰をもってこの三層のプログラミングの結果を支援するか、非効率的に（そしてしばしば残酷に）扱う。

幼生期の人間に蔓延している内的、社会的な葛藤は、往々にして、社会と神経と遺伝子の構造の間に不協和があるせいなのである。

条件づけられた行動を変えるのは単純なことである。単に異なった報酬／罰の場面に入りこむだけでいいのだ。

それは刷りこみを変えるための、神経学的なノウハウを必要とする。

人間の行動のもっとも強力な決定要因である遺伝的な型はこの時点では変えることができない。理解し、適応できるだけである。ポスト幼生期の人類がステージ二十（遺伝子工学）にまで進化したあかつきには、遺伝的な傾向を変えることが可能になるだろう。

＊　ドン・ファン的な意味での「見る」という言葉をわれわれは「眺める」という言葉に対比させて使っている(図表十三〜二十四参照)。

そのような柔軟性(傷つくことを恐れない姿勢)をもたなければ、最後の刷りこみ時――幼生期の人の場合、思春期。女性の場合は、最後の出産――に形成された膜のほかに何も経験することができない。たいていの海外旅行者はロボット的身体を国から国へと移動させ、自分自身のホームグラウンドの象徴的なバージョンしか経験しないのだ。

そのような神経ツアーは、神経学者にとってそれ自体が目的ではない。連続的な再刷りこみを可能にする脳のアインシュタイン的な潜在性をいかにして活用するかを学ぶための基本的なトレーニングなのである。

その神経学者の目標は単に意識を拡張するだけではなく、知性を増大させることにある。連続的な再刷りこみによって、リアリティを動かし、変える方法を習得するためのコンテリジェンス。神経系をアインシュタインの相対論的速度で使うことができるようになると、神経系の受動的限界そのものが明白となる。リアリティの構築には、再刷りこみによっては変えることができない基本的な遺伝子的次元がある。神経の刷りこみに比べると、オペラント条件づけが不毛であるように、遺伝子的な型に比較すると、刷りこみは表層的なのだ。

刷りこみが身体的-神経的な装置を外部の基礎にひっかけることを思いだしてもらいたい。(身体を含む)環境は、カメラの中でフィルムが感光されるように、神経系に刷りこまれる。しかし、そのカメラはＤＮＡによって設計され、組み立てられる。フィルムにイメージを刻印するプロ

けるのに似ている。

神経系の鋳直しや再受肉化の可能性を探るために精神賦活物質を用いるより賢明な方法を、最近、結婚したばかりの神経学者のカップルの例に見ることができる。かれらはサイケデリック・ワールド・ツアーに乗り出したのだ。最初のステップは使用期間一年の「世界周遊」航空券を買い求めることだった。次にそのカップルは、自分たちのことを、十二カ月で地球を周航し終わらなければならない軌道衛星とみなした。

かれらがしたのは、飛行機である国に飛んだら、その国の「霊的な」センターについて調べることだった。日本では、京都に行くよう告げられた。インドではベナレスへ、ギリシャではエレウシスに行くよう告げられた。京都で、京都の「魂」を探すために、霊的センターはどこかを尋ねた。多くの提案を与えられたかれらは、それぞれのセンターを訪れ、神経-遺伝子的な波動を調べた。一週間を日本と京都の歴史、政治、文化、芸術、神話にまつわる本を読ことに費やした。それからもっとも「神聖な」場所に赴き、第六回路の神経賦活物質を摂取した。その物質は古い刷りこみを停止させ、神経系を新しい刷りこみへと開いた——この場合、それは天皇の御所の建築物と標章によって構造化された。六時間、かれらはその場所の信号を吸収し、神経的に日本人となった。

これが「世界を見る」*——つまり、刷りこみの根を引き抜き、自由になった神経系を新しい場所に動かして神経線を張るための——唯一の方法である。

再刷りこみのセッションの際、新しい刷りこみが古い条件づけられた構造を含む場合がある。たとえば、あなたは自分の配偶者を再刷りこみする。新しいモデルが刷りこまれるところでは、新しい刷りこみの周囲に新しい条件づけられた反射の領域を造りあげる必要がある。これは時間を要する。初期のＬＳＤの研究者のある者は、ＬＳＤのセッションとセッションの間に六カ月の待機期間を置くべきだと結論した。心理学的用語を使うと、「数々の新しい洞察を咀嚼する」ためである。大気圏外心理学はそれを「新しい条件づけが新しい刷りこみの周辺に網を張るのを許す」と言う。けれども、再条件づけの間、新しい刷りこみモデルがなければならない。

だからこそ、神経学は、再刷りこみのセッションを注意深く計画するよう要求するのだ。将来、自分が住みたいと思っている以前のリアリティの側面が刷りこみのために提示され、「敏感な」時期に刷りこまれる新しいモデルがあり、新しく条件づけられた連想がその周囲に構築されることが可能となるように、である。

普通、人間は昔、条件づけられた刺激を再刷りこみする。

ＬＳＤを繰り返し摂取したことがある人から、しばらくすると、「トリップ」が同じになるという不平をよく聞かされる。そのような発言は再刷りこみのプロセスに関する知識不足を表している。心の鋳直しが同じ性格の組み合わせ（普通、幼生的な自我）をもった同じ場所で繰り返し起こる場合、同じ神経の形が繰り返される。これは、もっとも精密で高価な写真機をもっているにもかかわらず、それを動かさずに、同一の対象を撮りつづ

っているのは、サイケデリック冶金術、連続的再刷りこみ、七つの心を鋳直す神経学的なクラフト、生物電気配線の組み変えなどについてである。

第六回路の神経伝達物質ドラッグの現在のレパートリーによって、およそ一週間に一度再刷りこみすることが可能なようだ。毎日、再刷りこみすることはできない。新しい心の鋳型が固まるまでに五日から七日ぐらいかかる。ＬＳＤの研究が示すところによれば、構造ができあがるまで一週間の後退期がある。

もし四十年の間、週に一度、ＬＳＤによる存分な再刷りこみの体験をした場合、二千回の再刷りこみが可能となる。つまり、二千回の連続的な再受肉化(転生)が体験されうるということだ。たとえ、あらゆる神話を演じ、可能なあらゆる役割を刷りこみ、あらゆる感覚器官とそれらの組み合わせへの再刷りこみに焦点を当てたとしても、それほど多くの転生を見出し、生き抜くことはつらいことだろう。

無頓着なＬＳＤセッションで恐ろしいのは、心構えのできていない人間が過去の条件づけられた構造を再刷りこみする傾向があることである。そのため、新しいエネルギーによって、古いリアリティの島の習慣的なパターンを充電してしまうのだ。

条件づけが刷りこみの肯定的な極と否定的な極を中軸にして展開されるというのが大気圏外心理学の基礎原理である。刷りこみの固定は唐突である。しかし、刷りこみ後の条件づけは時間と反復を要する。たとえば、最初の性的な刷りこみの頃、何年もかかって、何十億という条件づけられた連想が構築される。それが人格構造を形作るのだ。

げる砂がないと、パニックになるのだ。社会的な剥奪は絶望的な報酬への渇望を生み出す。囚人は自らを閉じこめるリアリティの壁を再構築する。絶えず強化されていないと、壁は崩れてしまうのである。

オペラント条件づけはロボット的人間を作るものであり、制御・計画された強制社会にのみ存在しうる。

このあらっぽい比喩をつづけるなら、条件づけは砂の構造を組み立てることであり、刷りこみは金属にパターンを刻印するのに似ている。報酬／罰を使って刷りこみを条件づけしなおそうとすることは、鋳造された鋼鉄のパターンの上に砂粒を落とすのに似ている。数十年もすると、砂は鉄のパターンをすりきれさせる。老衰は刷りこみを摩耗させ、年老いた政治家は怠惰になり、年老いた同性愛者は疲れ果て、相手を求めてほっつき歩くことができなくなる。

金属の形を変えるには、分子のパターンを配列しなおすのに十分なエネルギーを適用しなければならない。電磁場を変えてみていただきたい。そのことは神経の刷りこみにも言えることである。冶金に熱が使われるように、分子のシナプスの絆をゆるめるには莫大な生化学的エネルギーを用いる必要があるのだ。内的な刺激――ドラッグ、トラウマ、病、感覚の剥奪、ショックなど――は外的な神経の生命線をひっこませる可能性がある。

ちょうど熱せられた金属が新しい形に固まるように、再刷りこみされた神経系は新しい回路へと固まり、新しい膜を形作る。ここで語

22.

刷りこみは局所的な環境によって制限される

学習、条件づけ、その他の行動制御の教育的ないし強制的手法は砂上にメッセージを書く。潮の干満のような日々の連想と報酬／罰のやりとりの中で、連想は反復されなければならない。学習された行動の強制的な性質が鮮明に見えないのは、それが自発的なものに見えるからである。実際、条件づけられたロボットは、砂箱の中の自分の位置に脅迫的に戻ろうとする。幼生期の文明はベケットの風景である。毎朝、何百万という人間が自分の砂山に殺到し、形を作り直すのだ。

シジフォスの偉業は社会的条件づけの単調さになぞえられる刺激的な英雄的冒険であった。象徴にオペラント条件づけられているロボットは報酬中毒者である。もし象徴的な報酬環境を除去すると、言い換えれば、条件づけられ刺激を生み出すことができないと、人間ロボットは気が狂ってしまう。彼／彼女はなにもすることがないからである。われわれは刺激中毒者について正確に語ることができる。いかなる砂箱もなく、積みあ

幼生期の人間は現在、遺伝的な十字路に面している。ある者は子供の環境を操作し、刷りこみを浸透させることによって、社会的な条件づけを固める道を選ぶだろう。それは毛沢東主義である。

別の者たちは、各人が自分自身の刷りこみや条件づけを管理・制御することを教えられるような高いレベルへと変異することを選ぶだろう。こうした二つの方向性に沿って、多くの異なった社会集団が浮上することが予想される。

これまで条件づけの遺伝的、神経的、社会的限界を考えてきた。これから、一連の再刷りこみの解放と制限の意味を考えてみたい。

S.M.I².L.E. S.M.I².L.E. S.M.I².L.E. S.M.I².L.E. S.M.I².L.E.

骨を得るために転げ回る犬を考えていただきたい。犬は主人がいなくても転げ回るだろうか? これは年老いた毛沢東にまとわりつく悪夢である。

人間の行動は、

遺伝的-神経的型(黄道帯の星座)

と

刷りこみ

によって決定される。

子供が学校にあがったら、彼/彼女に教えるのは遅すぎる。彼/彼女が家庭や仲間集団の中で、器用な象徴的精神を刷りこまれてしまったら、先生がいるといないとに関わらず、学ぶだろう。*

* ここで言う「精神」とは、象徴の操作様式――それに基づいて社会的条件づけが報酬と罰を移植する――を決定する喉頭と右手の筋肉の基本的な方向づけを指している。

オペラント条件づけされた行動からなる非常に薄いベニヤ板が家庭化された文明のもろい玄関を作るのだ。

おいては、条件づけは絶えまない心理テストを伴う。特殊な態度やトラブルの芽を初期のうちに確認し、個人の逸脱を消滅させるべく、特別の条件づけのプログラムを設定するためである。

政治的な条件づけは報酬と罰の制御だけではなく、秘密も必要とする。

異論を唱える自由指向の心理学者は秘密を暴露することによって心理学的ファシズムを完全に破壊することができる。もし両親や子供が条件づけの方法について警告されたら、協力するか抵抗するか、受け身的にふるまうか積極的にふるまうかを意識的に決定することができる。心理テストは、もし被験者がテストの目的と構成について警告されていたら、ほとんどの場合、効果を発揮しない。洗脳におけるドラッグの使用ですら、神経化学物質の特殊な効果について学んだ人物なら、効果を消すことができる。

民主主義社会では、心理的な条件づけのテクニックは採用できない。少数派のグループが用いられるテクニックについて公けに論じ、反対のキャンペーンを展開したり、スクリーニング・テストへの回答を発行したりできるからである。市民はまた条件づけを避ける権利をもっている。

このように、B・F・スキナーの提案は、政府が全面的にコミュニケーションを統制している国以外では、実行に移すことができない。

絶えまなく強要し、思いださせる統制――たとえば警察国家のスローガンや消費国家の宣伝をいたるところで目にできるようにすること――がなければ、人々は簡単に訓練されたことを忘れ、自らの刷りこみと遺伝的なロボット様式に漂い戻ってしまう。

S. M. I². L. E.　S. M. I². L. E.　S. M. I². L. E.　S. M. I². L. E.　S. M. I². L. E.

理学者が市民を全面的に制御しなければならないということが一つ、そして完全な秘密主義と検閲を励行しなければならないというのがもう一つである。

一九六一年、ハーバード大学人格研究センターに一人の熱狂的なスキナー主義者が訪れ、精神病院の患者へのオペラント条件づけの適用について報告した。禁じられるべき行動の一つは幻覚性の語りだった。現在では、幻覚が精神の中で機能的な役割を果していることを多くの人が信じており、自動的な幻覚の消去を、たとえ、心理学者のリアリティでは理解されず、有効とはみなされなくても、幻覚を語る者のリアリティの中では重要な意味をもつなんらかのメッセージの暴力的な抑圧と考えている。スキナー主義者たちは直接的な強化のテクニックを用い、患者が非幻覚的なコメントをするたびに即座にタバコを与え、幻覚を語るたびにタバコを奪い去った。幻覚についてのコメントの率が著しく低下したことを研究者は機嫌よく報告した。さらに印象的な行動の変化は食べ物を与えたり、奪ったりする方法によるものだった。病院の規則がこの実験を有効な飢えの時点まで遂行することを妨げたことにスキナー主義者は不機嫌な顔をして不平をこぼした。「もし食べ物の摂取を全面的に制御していたなら、実際に行動を形づくることができたでしょう」とオペラント条件づけの研究者は述べた。このテクニックが世界史におけるほとんどの独裁者たちによって用いられていたことをスタッフの一人がそれとなくコメントしたことを、その研究者が聞いたかどうかは分からない。

人間の行動を条件づけるためには、幼児期に刺激を制御し、それを一生の間ずっと維持することが必要である。心理的なユートピアに

21.

条件づけの行動に基づく社会は、制御と秘密に頼らなければならない

現在、惑星を制御している幼生期の社会は、行動を形作り、方向づけ、制御するための、強制的、操作的な条件づけの方法を多用することによってのみ自らを維持することができる。

ハーバード大学の行動主義者、B・F・スキナーは、その著『自由と威厳を超えて』の中で、政治的な条件づけのケースを提示している。それは次のように単純に要約できる。「人間は自由にふるまうことを許されると、責任ある行動を取れない。だから、義務に対して責任を負い、徳のある行動をし、信頼をもち、素早く行動し、効率的に動き、幸福感を抱き、法律を順守するよう心理学的に強要し、条件づけなければならない。人間は正しいことを行うには報酬と罰によってたえず操作されなければならないのだ」。

こうした社会的条件づけの制度には、スキナーによって強調されていない二つの側面がある。その制度を機能させるには、体制的な心

これは家庭化された中流階級の人々にはなんの問題ともならない。かれらは素直さや恐怖を刷りこんでおり、それが第二回路の内的な制御や、第三回路の反復的な象徴操作、第四回路の「恥」の制御をもたらすからである。学校は子供に愚かになるように周到に刷りこむため、知性に疑問を抱くことを禁じることが単純な定石となるのだ。象徴の操作と愚かさはあらゆる幼生期の社会に浸透しているので、子供が、開かれた、機転の効く、動的な、事実として信頼に足る電気回路をもった心にさらされるチャンスはほとんどない。心理学的条件づけの非効率性や刷りこみの不動の堅固さは、第四回路にもっとも鮮明に見出される。社会的・象徴的な報酬や、身体的な懲罰、電気ショック、嫌悪を催させるドラッグなどで性的刷りこみを条件づけしなおしたり、同性愛を「癒す」ことはほとんど不可能である。心理学的な方法を使って条件づけを行う者たちが、性的なフェティシズムや刷りこまれた特殊な欲望を除去するのにどれだけの成功を収めたか調べてみよう。第四回路の性的機能が特殊な外部の欲望の刺激に繋がれると、更年期になっても、生化学がシナプスの連結に刻みこんだり、彫り込んだり、刻印づけたりしたものは変えることができないのだ。

仲間の市民の行動を変えることを要求する官僚には二種類のグループがある。右翼の懲罰的な強制者。そしてリベラルな報酬授与者。

両者の官僚の試みはいずれも無益である。なぜなら、再刷りこみするのではなく、再条件づけしようとするからである。

懲罰的な強制は、その脅威が警察国家を維持させ、必要とさせる限り、機能する。

リベラルな社会心理学者は民主主義的、支援的、平等主義的教育の方法によって行動を変えることができると信じている。平和団体。行動修正。バッシング。個人教授。奨学金。洞察セラピー。さまざまな精神衛生の方法。

これらのリベラルなアプローチは変化を引き起こすことができず、「ヒューマニスティックな」福祉官僚政策を支えるだけにすぎない。

B・F・スキナーを代弁者とする実験心理学者はもっと賢明である。かれらは無意識のオペラント条件づけによって行動の変化を引き起こすことができると信じている。しかし、これは強化――報酬と罰――の全面的、持続的な制御を必要とする。問題なのは、強化のために条件づけする者がたえずいなければ、心理学的手法はうまく機能しないということである。リベラル派の人々は、福祉の給付金、奨学金、報奨金などの支払いをし、対人間の問題を解決するためにたえずそこにいなければならない。

スキナー主義の操作者はそこにいてたえず環境の反応を制御していなければならない。

かつてに放置されるやいなや、「被験者」は刷りこみ（と遺伝子型の構造）の磁力に吸い寄せられてしまう。

神経への刷りこみは、神経ロボットの形態を決定する遺伝的な型に較べ、それ自体派生的な構造である。
神経への刷りこみは、RNAを組織して身体と神経系を構築するDNAによって敷かれた生命電気的な力の場の、偶然の局地的な標的なのだ。

人類は、いかにして神経系を制御するかについての知識を獲得できる地点まで進化してきた。神経学は刷りこみを一時停止させ、新しい神経への刷りこみを生み出す初歩的な方法を開発してきた。この知識は不当にも抑圧されているが、「リアリティ」が個人の神経系によって生み出されるという基本的な概念は一九四五年以降、数百万人という人々によって理解されている。

しかし、遺伝子工学は神経工学よりさらに重要である。DNAをターン・オンする非ヒストン系のタンパク質に関するポール、シュタイン、クラインスミスの研究は遺伝子制御の鍵を与えてくれる。デューク大学のブルース・ニクラスの研究は、身体構造を決定する染色体のパターンの頑固さを思い出させてくれる。*

* ニクラスの報告によれば、染色体の紐の配列を実験的にかき乱すと(ミクロの針でつつくことによって)、その分子は最初の配列を復元する(ちょうど、鉄粉が磁石に反応して「動き」、ある位置に落ち着くように)。これは、なんらかのエネルギー場のパターンがDNA暗号を一貫させ、論理的にしておくために働いていることを匂わせる。微視的な遺伝的脳が進化の信号を統合・制御するのだ。

20.

条件づけは刷りこみを変えることはできない

スキナー主義者たちは第三回路の象徴的、操作的行動を「形づくろう」とする。これは無益な、もしくは危険なほど強制的な作業になりうる。オペラント条件づけは直接的、持続的な強化によって「作動する」。刷りこみはいかなる強化も必要としない。psi-Phy のイエズス会士ならこう言うかもしれない。幼児に刷りこみをさせて下さい。そうすれば、子供を条件づけようとしても無駄でしょう。子供に刷りこみをさせて下さい。そうすれば、思春期の若者を条件づけようとしても無駄でしょう。思春期の若者に刷りこみをさせて下さい。そうすれば、大人を条件づけようとしても無駄でしょう。

刷りこみは反復的な報酬や罰を必要としない。神経配線の固定は永久的なものである。生化学的なショックだけが神経-臍の緒的なラインをゆるめることができる。それに対して、条件づけられた連想は反復されなくなると、衰退し、消え失せる。

学的発言である。そのことを念頭において、その標準的な定義に見られる気味の悪い外科的な意味を振り返ってみよう。「『オペラント』という言葉は、オペラント行動がなんらかの効果を生み出すために環境に「働きかける」という事実に由来する。……オペラント条件づけを生み出すために、空腹のネズミを箱の中に入れる。……人間の行動の大半はオペラント行動――差し込んだ鍵を回す、車を運転する……――に分類できるかもしれない……」これは第三の脳の働きである。

第二次世界大戦の間、スキナー教授は軍事プログラムの一つで、人間の乗っていない爆撃機を「敵」の標的に向かわせるため、鳩に操作パネルをついばませる訓練をほどこした。

オペラント条件づけのモデルには述べるに値するもう一つの側面がある。

不運にも、行動主義は、アインシュタイン的な概念や目に見えない状態が浮上しつつあったちょうどその時、ニュートンの機械論的な可視的物理学にならって自らをモデル化する道を選んだのだ。過去半世紀、われわれは物理学や遺伝学がますます「内部」へと入り込んでいくのを目撃してきた。新しいミクロ科学に関する(歴然と見過ごされている)重要な事実は、裸の目には見えない内部構造に、機能、意味、法則的な規則性といったものが見出されるということである。そして、多くの場合、それらは、精神分析家、神学者、哲学者らが人間の「魂」や「精神」の内部の形而上的なエンティティに帰せしめてきた霊的な能力に似ているということなのである。たとえば、意識の統一性に関する古代ヒンドゥー教の理論は、今や、神経系を三〇億の細胞の相互に繋がれたネットワークとして捉える説明の中に、実験的な確証を見出している。古代ヴェーダーンダ哲学の生命の統一性の概念は、動植物を含むあらゆる生き物の遺伝物質を構成するアミノ酸の配列には、ほんの少しの違いしかないという発見によって確証される。ジャック・サーファッティやジョン・アーチボルド・フィーラーなどの物理学者の理論は、意識を核物理学や量子力学の中心へと復帰させている。

条件づけの心理学者の研究を七つの回路(プラス一回路)の観点から見直してみると、行動主義がどこにどのような限界をもっているかが正確にわかる。オペラント条件づけは社会的な脳によって仲介される行動に関心を寄せる。それは学習された機械的な活動である。スキナー主義は第三回路の社会、すなわち、新石器時代にはじまり、ヘンリー・フォードの自動車組み立てラインにおいて頂点を迎えた機械文明のきわめつけの哲学なのである。スキナー主義は広島に原爆が投下されるまでの四〇〇年間、世界を支配したピューリタン的なプロテスタン論理の操作者による最後の哲

……（オペラント）行動が時に道具的行動と呼ばれるのは、道具やその他の機械が生み出すのと同じ効果を生み出すからである。このことから、オペラント条件づけは道具的条件づけとしても知られている（――ヒルガートとアトキンス、前掲書）。

われわれがこうした定義や原理を吟味してきたのは、オペラント条件づけや行動の修正が広く知れ渡り、現在の行動制御のムーブメントの政治的に有力な側面になりつつあるからである。ますます多くの心理学者たちが、障害があると判定されたり、反社会的と裁定されたりした人々の行動を「形作る」ために、条件づけのテクニックを採用しはじめている。それに加えて、広告、教育、マス・メディアの宣伝などで他人の行動を操作しようとする多数の心理学者たちがいる。

神経学は、心理学者たちがどのような条件づけをしようとしているのか、そして、なぜかれらは失敗を余儀なくされるのかを理解する手がかりを与えてくれるかもしれない。

条件づけの心理学者は行動主義者である。かれらは時間・空間内の観察可能で測定可能な動きに関心を寄せる。行動主義は人間性を、意識的な「心」に帰属する目に見えない感情や精神の状態に照らして説明する「内省」心理学や「能力」心理学に対する反動として一九二〇年代に発展した。

……実験者は、ねずみが棒を押すと、一粒の食べ物が皿に落ちるように、食べ物の補給装置を取りつける。ネズミは皿に落ちた食べ物を食べると、すぐにまた棒を押す。食べ物が棒を押すという行動を強化するのだ……。

以上の説明により、条件づけられたオペラント行動の意味を考えることが可能となる。上に示したように、それは環境に「働きかける」。棒を押すことは、食べ物を生み出す、あるいは食べ物へのアクセスを可能にする。古典的な条件づけでは、動物は受け身である。動物は、条件づけられた刺激が提示され、次に条件づけられない刺激が与えられるまでただ単に待っている。オペラント条件づけでは、動物は積極的でなければならない。なにかをしない限り、動物の行動は強化されないのだ。

人間の行動の大半はオペラント行動——差し込んだ鍵を回す、車を運転する、手紙を書く、会話をするなど——に分類できるかもしれない。そのような活動はパブロフ型の条件づけられていない刺激によっては生み出されない。だが、一旦、そうした行動が起こると、オペラント条件づけの原理に従って強化されうるのだ。

えるのだ。……オペラント行動が一つの刺激に関係する場合（たとえばベルを鳴らす電話に答える場合）、ベルを鳴らす電話は一つの識別された刺激であり、電話は応答可能だが、必ずしも応答を強要するものではないことを私に告げている。ベルを鳴らす電話は注目せざるをえないものだが、それに対する反応はオペラント行動であり、反応行動ではないのである。

「オペラント」という言葉は、オペラント行動がなんらかの効果を生み出すために環境に「働きかける」という事実に由来する。だから、電話があるところに行って、受話器をもちあげることは、電話による会話へと導くオペラント行動なのである。

実験室でオペラント条件づけを生み出すために、空腹のネズミを箱の中に入れる。……箱の中は空っぽだが、一本の棒が突きだしており、その下に食べ物を入れる皿が置いてある。

19.

オペラント条件づけは行動を報酬／罰に結びつける

オペラント条件づけは、強化の要因となる刺激によって通常引き起こされる、遺伝的にあらかじめプログラムされた行動とほとんど類似性をもたない行動を研究する（たとえば、唾液の分泌は食べ物に対する犬の正常な反応だが、転げ回ることはそうではない）。オペラント条件づけの学派の創立者、B・F・スキナーは反応行動とオペラント行動とを区別する。

反応行動は、古典的な条件づけの条件づけられていない反射の場合に見られるように、刺激の直接的な制御下にある――口中の唾液の分泌、光の点滅に対する瞳孔の収縮、膝蓋反射など。刺激に対するオペラント行動の関係は幾分異なる。その行動はしばしば解き放たれるかのように見える。つまり、刺激に対する反応というより、自発的であるかのように見

神経的に繋がっている反応を引き起こすとができるようになる。

もし幼児の第一回路が母親に対して肯定的に刷りこまれた場合、母親に関連する他の刺激は、「肯定的なアプローチ」の反応を引き起こす学習された合図となる。幼児の第一回路は毒性のある刺激や危険な刺激――味、匂い、形態など――に対して否定的に刷りこまれる。「危険」にまつわる刺激は引き籠もり反応（恐怖）を引き起こす。

条件づけの心理学者たちは、条件づけられていない刺激／反応の組み合わせと学習された反応との関係を、刺激の類似性（一般化）、条件づけられていない刺激／反応による条件づけられた刺激／反応の強化や報酬、条件づけられていない報酬がないことによる学習された連想の衰退ないし消滅、さまざまな刺激の相違の区別などに照らして研究してきた。

古典的（パブロフ的）条件づけは、反応（たとえば唾液の分泌）を引き起こした最初の条件づけられていない刺激に関連する条件づけられた刺激の提示に焦点をあてる。

べ物によってだけではなく、食べ物を見ることによっても影響されることに気づいた。彼は口の中に入れられた食べ物に対する唾液の分泌を学習されたものではない反応と解釈し、条件づけられていない反応と呼んだ。だが、食べ物を見ることによる影響は学習されたものに違いないと確信した。それは学習された、もしくは条件づけられた反応である（――ヒルガードとアトキンス『心理学入門』より）。

後の研究は、動物が点滅する光、音、視覚的形態などによって唾液の分泌を条件づけられることを立証した。

「条件づけられた反応は一つの習慣と考えられる。なぜなら、(1)刺激と反応との間に一つの連想が存在することが証明されるからである。(2)この連想が学習されたものだからである。

学習プロセスを理解するためには、刷りこみの第一の役割と、条件づけられた連想の第二の役割を理解する必要がある。刷りこみは外部の刺激に対して条件づけられていない自然な反応を引き出す――リリーサーのメカニズム。条件づけられた刺激は刷りこまれた刺激と結びついている。刷りこみは外的な刺激と神経端末との間、そして神経端末と反応との間の基本的な繋(つな)がりである。

次に条件づけは刷りこまれた刺激に関連する他の刺激をつなぐ（神経的に配線する）。すると、学習された刺激は最初の刷りこまれた刺激に

S.M.I².L.E.　S.M.I².L.E.　S.M.I².L.E.　S.M.I².L.E.　S.M.I².L.E.

18.　条件づけは刺激を刷りこまれた反応に結びつける

刷りこみの概念は心理学においてある種の混乱を生み出してきた。というのも、それは大抵の心理学理論の基盤である条件づけられた学習とは正反対の、直接的かつ不可逆的な「学習」の一形態をほのめかしているからである。古典的な定義に従えば、「学習とは、訓練の結果発生する、比較的永続的な行動の変化である」。学習は報酬／罰に基づき、一つの刺激や反応を他の刺激や反応と結びつけることを基盤とする。学習の心理学理論は外部の目に見える行動の観察に基づいており、内部の目に見えない神経学的な状況にはほとんど注意を払わない。

条件づけの古典的研究は、ロシアの心理学者、イワン・パブロフによって行われた。

消化に関連する比較的自動的な反射を研究している間に、パブロフは、唾液の分泌が犬の口の中に入れられた食

とって代わるのを目撃することになるかもしれない。

S.M.I^2.L.E. S.M.I^2.L.E. S.M.I^2.L.E. S.M.I^2.L.E. S.M.I^2.L.E.

神経パターンの再配線の唯一の方法は、シナプスでの神経伝達物質の働きに干渉し、古い刷りこみを消去し、新しい刷りこみを可能にすることである。ショック、病気、トラウマ、ドラッグ、出産、刺激の剝奪、電気の充電などがシナプスの化学を変える唯一の方法である。身体内部の活動がシナプスの化学を変えるほど圧倒的に強烈になると、外的な環境への刷りこまれた生命線が撤回されるのだ。そうして、再刷りこみの機会が提供されるのである。

神経の刷りこみの概念が理解されれば、心理学的な措置の技法が変わるだろう。医師は患者に再刷りこみの原理を教え、患者は自ら生み出したいと思う新しいリアリティを選択するようになるだろう。神経学的な措置では、民主主義と共同が必要なのだ。医師は治癒法を処方したり、制御したりすることができない。というのも、患者にとって、結果は新しいリアリティだからである。

医療行為もまた変わるだろう。感染や器質障害は神経配線をしなおす必要のある化学的変化を生み出す場合がある。感染が癒されても、緊急の「病」の配線が機能しつづけ、正常な機能の回復を妨げるかもしれない。その逆に、感染や障害が、正常な「配線」によって妨げられている治癒的な変化を要求するかもしれない。神経系をプログラムされた生物電気的ネットワークとして捉えるこのような見方は、鍼の「神秘」を説明するのを助けてくれるかもしれない。鍼は肉体のシステムにはほとんど効果を及ぼさないが、穏やかに充電された場合にはとくに、器官の機能を制御するシナプスのプログラムに影響を及ぼすのかもしれない。近き将来、われわれは、神経学が心理学に取って代わり、神経身体医学が心身医学のあいまいな概念に

17.

刷りこみは生化学的なショックによってしか変えることができない

しばし、(身体から区別された)神経系を三十億の受容-評価-出力のセンター(神経細胞)が階層状に配線された生命コンピュータとして思い描いてみよう。さまざまな感覚器官は毎分何十億という信号を受け取る。出力繊維は毎分、何十億という信号を興奮させる。刷りこみは神経の活動をパターン化し、導く基本的な連結を敷く。

たとえば、「危険」の合図が受け取られ、評価された時に、何百万という生存行動を命じる第一回路緊急システムというものがある。初期の「危険」の刷りこみと遺伝的プログラムがこの強力な基本システムに合図をだし、それが稼働されると、身体のすべての器官に影響を及ぼすのである。恐怖だ！ 一旦、第一回路が恐怖の刺激を刷りこむと、この化学-電気的シナプスのパターンを変える唯一の方法は、配線を停止するか、しなおすことによってである。人間の「恐怖症」や「安全毛布」の頑固さは、刷りこみによって引き起こされるのだ。

われわれは泡の内部にいると魔術師は言う。それはわれわれが誕生の瞬間に入られる泡である。最初、その泡は開かれているが、次第に閉まりはじめ、ついには、われわれを封印してしまう。その泡はわれわれの知覚である。*われわれは人生の全期間を通じてその泡の中で暮らしている。そして周囲の壁にわれわれが目撃するものは、われわれ自身の反映である……。反映されたものはわれわれ自身の世界観である。その世界観は、最初、誕生の瞬間〔より正確に言えば、刷りこみの瞬間〕にわれわれに与えられる一つの説明であるが、そのうちに、われわれの注意のすべてがそれらに捕らえられ、ついには、その説明が一つの見方〔つまりリアリティ〕になってしまう。（——『未知の次元』より）

* ドン・ファンは意識を説明するのに「知覚」という言葉をいつも用いる。「刷りこみ-泡」の形成は、ＬＳＤセッションの際に、鮮明に「見」、体験することができる。

社会的意識とは、条件づけと絶えまない適応のための歪曲によって織り込まれる神経-臍の緒的な織物なのである。

われわれは信じるよう刷りこまれるものを信じるのだ。神経-臍の緒的な生命線が執着する小さな芝生が「リアリティ」であるとわれわれは考える。

個人の刷りこみに基づいて別個の主観的なリアリティ（リアリティの島）が存在するという事実は、前神経的な人間にとって、脅威を感じずに受け入れることはできない。八人の盲人と像の話が思い出される。このようなリアリティの個別性は、「狂気」の人間を前にして感じる恐怖を説明する。「狂気」や「幻覚」と呼ばれる状態にある人間は、多くの場合実際に人々を別け隔てる神経的な孤立を自覚している。かれらは欺かれている「正常な人々」より正気で、間違っていないとも考えられるだろう。存在論的な恐怖とは、自分自身の刷りこみや学習した神経パターンを超えた他のリアリティがあるという発見に対する幼稚な反応なのである。

神経系の刷りこみを通した局地的環境への執着を説明するために、われわれは神経-臍の緒的な生命線の比喩を用いてきた。安全性とは、刷りこまれた生命線が、しっかりと安定したリアリティの島に結びつけられていることを意味する。

刷りこみによる主観的リアリティの創造と限界を説明するために神経医によってよく使われるもう一つの比喩は、「泡」である。カスタネダのドン・ファンは、彼がトナールと呼ぶ刷りこみのリアリティについて適切な説明を与えてくれる。

S. M. I². L. E.　S. M. I². L. E.　S. M. I². L. E.　S. M. I². L. E.　S. M. I². L. E.

つことがパワーを意味するからである。

神経系の第三回路は子供が弱い立場にある時に活性化される。喉頭と手による象徴システムを教えるのは、大人か目上の人である。象徴を学ぶ能力は感情的な文脈によって決定される。情報を握った人物はそれを受け取る人物より優位な立場に立つのだ。

神経系はシナプス連結によって繋がれている。シナプスとは二つの神経細胞の間にある溝で、その溝を超えてインパルスが流れる。シナプス連結は化学的なものである。化学物質がフィルムにイメージを「固定」させるように、リアリティの島の神経イメージは、刷りこみの時、シナプスの化学的なきずなによって「固定」される。

ロボット的真理はこうである。神経連結のパターンがリアリティの映像を生み出す。

人間の神経系は社会的な合図を刷りこむ。成長した子供は、自分の刷りこんだ社会的な合図に特定の安定性と一貫性があることを見出す。彼／彼女の両親は隣の家族と同じ言語を話し、さまざまな儀式を共有している。この共通感覚的な合意は、一つの「リアリティ」が自分の文化集団に属する人々と共有されているかのような幻想をもたらす。「正気」とは、他人が感じるように感じることを自分自身に納得させる能力によって決定される。フェスティンガーや他の心理学者は、「認識の不調和」の実験を行い、人間がいかに簡単に、そして当然のごとく、神経的に抱かれる期待に合わせて客観的データを歪曲するかを示した。

刷りこみは神経フィルムの瞬間的な露光であり、神経−臍の緒的なリアリティを規定−制限する

神経受容器の研究は、蛇が熱受容器を使って獲物をつきとめることを示している。蛇が感じるのは、知覚のスクリーン上を横切る「暖かい」点なのである。蛇は「熱」を攻撃するようプログラムされたロボットなのだ。

人間はしばしば同様な「リアリティ」の隔たりに遭遇する。人間は、自分と蛇が異なるのと同じように、人間同士の間でも異なったプログラムをされているロボットなのだ。人間が使いこなせる喉頭と手による言語の数はまちまちである。もっとも原始的な人間は、子供時代に隣人が話していた方言でのみコミュニケーションし、村の生活にとって必要な単純な人工物しか操作できない。

高度に文明化された幼生期の人間たちは何百という喉頭と手による象徴体系を習得してきた。教育を受けたロシア人やアメリカ人は、互いにいくつかの言語で話したり、文章を書いたりし、広範な機械的加工品の生産、職業的なやりとり、科学的なコード作り、スポーツやゲームの儀式などを共同で操作することができる。

幼生期の人間とコミュニケーションする場合、非言語的な手がかりにより、回路一が安全で、回路二が協調的であることが、一旦確かめられると、次にとるべきステップは、喉頭と手による筋肉思考的言語が共有され、適切に交換されるようにすることである。大抵の幼生期の相互作用は短く、限定されている。売買。サービス。文化的な再保証を引きだすために工夫された表層的な社会化。広範囲な喉頭と手を用いる会話は複雑さをしょいこむ。というのも、感情的要因が入りこんでくることが避けられないからである。他人に情報を与えることはしばしば後悔を伴う。情報をも

方言集団

同じ読み書き能力を身につけた教養集団

科学集団

職能集団

スポーツやゲームの集団

大気圏外心理学の中心概念は、個人の神経的リアリティが個人によって異なるという考えである。めいめいの人間は、ユニークな神経配線のパターンと固定された臍の緒的な生命線によって規定される世界を扱う。浮上する人間の発達段階を昆虫の変態との類比で理解することが可能なように（自分自身の変身については、あまりに身近なため、われわれはそれを正当に評価できない）、「リアリティ」の電気-神経的な独自性を他の種の意識の島を考えることによって理解することが可能だろう。

蛇を考えてもらいたい。視覚的なスキャナーをもって観察するわれわれは、一匹のネズミが床を横切ろうとしている時、一匹の蛇が釜首をもたげ、攻撃するのを「見る」。われわれはその蛇が自分の見ているもの――毛に覆われた褐色の動物――を「見ている」と仮定する。しかし、蛇の

1. 回路一の生物学的生存の言語は地球的なものである。「私は安全だ」「あなたは安全だ」という動きや音は、文化に関わりなくほぼすべての動物によって認識されている。痛みや身体的脅威を表現する行動もまた広く認められている。われわれがここで語っているのは、食べる、吐く、吸う、うんざりする、抱きしめる、うめく、身体的に攻撃する、威すといったことについてである。

2. 回路二の感情言語。身分を伝える身ぶり、姿勢、声音などはほぼ普遍的に認められている。親密さ、支配、服従、懇願、供与、強制、受動的不平などを示す身ぶり信号はいかなる通文化的な辞書も必要としない。

一時キャディラックは最高の身分を示していた。その後、スラム街のポン引きやコカインのディーラーを象徴するようになった。

3. 回路三の喉頭と手による言語。象徴や人工物は、同様な刷りこみを共有する文化集団、つまり、重大な時期に、同じ様式の喉頭の器用さと手の象徴化にさらされた文化集団に全面的に限定される。階級、カースト、職能集団が重要となる。この第三回路の文化には次のようなものが含まれる。

人工物の製作集団

的システムの配線の仕方（つまり性的システムを興奮させる合図）を決定する。感覚的、感情的、精神的、社会的刺激が、その後の性的覚醒や発散を促すパターン（性的風土）を形作るのである。

第四回路の性的刷りこみの偶然の逸脱については、精神科医に充分認識されてきた。初期の勃起やオルガスムは変態的なフェティシズムを生み出す可能性があるのだ。

精神的-象徴的な第三回路の刷りこみがもつ力学や神経論理のことはあまり知られていない。話すことやそれにまつわる操作的な行動の獲得は、喉頭と手の筋肉の第三の脳による配線に関わる特殊な刷りこみを含んでいる。思考は喉頭の九つの筋肉を動かすことによって達成される。子供が言葉を習得している最中、接触する人間モデルの精神的スタイルが吸収される。これらのモデルは両親であり、さらに重要なのは年上の子供たちである。象徴的な精神活動のやさしい巻き毛が伸ばされるのだ。これはもっとも傷つきやすい時期である。環境の中にいる人々の精神的なスタイルや感情的なモデルが、子供の心の性格——どれだけ開かれているか、他人をどれだけ信頼できるか、引っ込み思案か、拒絶的かなど——を決定する。

子供は特殊な思考方法を刷りこむ（配線する）。一旦、こうした知的パターンが刷りこまれると、後の教育は心の操作の様式にはほとんど影響を及ばさない。喉頭と手に基づく心が用いる八つの認識様式については、『八つの能力をもった脳』の第三章に述べられている。その刷りこみは、重要な拡張期に存在するモデルに固着するのだ。

ん坊の神経系は、軟らかくて暖かいミルクを生み出す刺激の映像を「生きていくために良きもの」、安全なものとして永遠に刻印する。もしこの内胚葉的刷りこみが、適切な刺激を必要とする重要な時期に刺激がなかったために行われないと、基本的な「生存のための安全」システムが効果的に形成されず、人間との接触がうまくいかなくなる。*

＊　人間を標的とする第一回路の刷りこみに失敗すると、幼児性の分裂症や自閉症が生み出される。そのプロセスと治療法については、『八つの能力をもつ脳』の第一章の中で論じてある。

神経の刷りこみのもっとも重要な側面は、四つの幼生期の神経回路が年齢とともに順番に花開くということである。それぞれの神経回路が出現すると、四つの神経-臍の緒的な生命線が拡張する。

たとえば、思春期前には、性的回路は萌芽的なものである。思春期になると、性的器官に劇的な心理学的、解剖学的な変化が生じる。これらの変化は非常に顕著なので、幼虫から蝶への変容にたとえられる変身について語っているといってもいいかもしれない。この時点で、性的活動を仲介する神経回路が花開く。性的刷りこみの重要期ないし「感じやすい」時期が存在するのだ。性的アンテナが出現し、盲目的に根を張る場所を探査する。

はじめて性的システムが興奮させられ、全体的な反応を示す時、性的な刷りこみが行われる。刷りこみ時の神経系全体の活動状態が性

「生後数時間、実験者によって世話されたひな鳥は、それ以降、その実験者や他の人間に対して、普通、親鳥にするような反応を示すようになる」ことが見出されてきた。最初に接する暖かな動く体に神経-臍の緒的な固着を起こすのだ。

「実際、もっとも驚くべきことは、人間を親として刷りこまれた動物が何カ月かの後に成人に達した時、同じ種の動物を好んでいるにもかかわらず、人間に求愛反応を示すという事実である。人間の手に乗せられて育った鳥は、普通、トレーナーの手に求愛行動を示すのだ。」

刷りこみ理論を人間に適用することの意義は、それが自己、意識的選択といった合理的な概念を紛糾することである。実際、それはSF的なロボット譚を髣髴させる存在論的な無力感をほのめかしている。神経学的な状況は次の通りである。人体は神経系という三十億以上の細胞からなるコミュニケーション網によって制御されている多数の受容器と発散システムからできている。それぞれの器官は複雑な繊維のパターンによって配線されている。各神経細胞は情報を受容、評価し、六万にも及ぶ他の神経細胞にそれを伝達する。一連の身体的行動の引き金となる特定の配線パターンは、刷りこまれた刺激によってプログラムされる。それぞれの神経-臍の緒的な生存システムを活性化する特殊な刺激は、偶然の一致——「感受性の鋭い時期」に存在した外的な要因——によって決定される。人間とは、たまたま刷りこまれた合図に反応して、標準化された発散システムを起動させる神経の刷りこみによってプログラムされ、操られているロボットなのだ。

新生児の赤ん坊は、直接的な生存に必要な行動パターンを備えている。自分を養ってくれる刺激や授乳に反応するのだ。生後すぐに赤

ある。一旦、その臍の緒が完成すると、幼生期の神経系は、生命維持のために働く。偶然のトラウマによってその繋がりが断たれたり、故意に撤回された場合は例外である。そのような場合、ポスト幼生期のコンテリジェンスが獲得される。

刷りこみに関する事実は、元々、動物行動学から来たものである。動物行動学とは、「自然の状態の下や、野外観察によって提示される手法と問題を活用する実験室での研究の下で、動物の行動を比較研究する学問」(ウイリアム・エトキン)である。

コンラッド・ローレンツとニコ・ティンバーゲンが最近、この分野の先駆的な研究によってノーベル賞を受賞した(一九七三年)。

刷りこみのプロセスに関するもっとも面白い側面はこのようなものである。あらかじめ設計された通りの反応を引き起こす外的刺激の最初の選択は、通常の学習プロセスから生じるのではなく、動物の成育初期の短い、特別の「臨界期」の間に、その刺激に短時間さらされることによってなされる。

幼児の身体は見知らぬ新しい惑星上に浮かぶ宇宙船のようなものである。刷りこみは、自らが接し、根差す暖かな表面を求めてその宇宙船から伸びた生命線である。そのようにして、リアリティの島が生み出されるのだ。

「もし刷りこみが、この世に存在しはじめて最初の数日のうちに達成されないと、他の時にも『おこらない』。そのような動物は他のどんな動物に対しても適切な反応を起こせない。同じ種の成員とどんなに付き合っても、そうした反応を生み出さないのだ」(エトキン)

16.

刷りこみは神経フィルムの瞬間的な露光であり、神経-臍の緒的なリアリティを規定-制限する

神経の刷りこみの発見は、人類の四つのもっとも重要な知的業績の一つと言っていいかもしれない。他の三つとは空間、時間、エネルギーを含むアインシュタイン的量子力学的等式、非常に混み合った銀河の中で地球を天文学的に位置づけたこと、生化学的な長寿、遺伝子コントロール、共生的コミュニケーションを可能にする遺伝子-進歩的プロセスの解読である。

順番に行われる神経系の刷りこみの理解は、Psi-Phy（物理心理学）のトランプ札に第四のカードを付け加える。

刷りこみとは、（前もって敷かれた発散の道にそって）生存に役立つ特殊な神経-臍の緒的行動を仲介する神経回路が、その発散のタイミング、方向性、目的を決定する内的、外的な刺激を環境の中から選択するプロセスなのである。

刷りこみは、神経系から、生存のための物質的な刺激を提供する、惑星表面上のエネルギーの束へと広がる神経-臍の緒的な生命線で

存在論的な愛国主義者は固定された遺伝子、神経的構造に深く根差している。人間ロボットは、人間の神経の機構に無知であるにもかかわらず、驚くべき効率性をもった物質的欲求については、互いにうまくコミュニケーションし合っている。

S.M.I^2.L.E. S.M.I^2.L.E. S.M.I^2.L.E. S.M.I^2.L.E. S.M.I^2.L.E.

これらの十二の遺伝子的類型は、十二の黄道帯の星座、最初の十二人のタロットに登場する人物、十二人のギリシャ-ローマの神々として大衆化されている。これらの十二の類型のそれぞれは、遺伝子的に別個のものとみなすことができる。それぞれが人間の幼生期の進化プロセスに貢献し、特別の生存のための仕事を果たすよう調整された、刷りこみ済みの神経系を運んでいるのだ。

遺伝的な専門家に加え、個人の発達の四つの時期に刷りこまれる環境モデルが、人やグループによって異なるリアリティの島を決定する。第三回路の出現の際に子供がさらされる言語と方言が、喉頭部や手に筋肉のパターンを刻印し、それが固定化されて、認知的-象徴的リアリティを限定するのである。

このリアリティのユニークな特殊性が意味していることの一つは、この惑星上を動き回っている幼生的な人間の種類には十二あり、異なった文化的刷りこみをもったたくさんの人間集団があって大抵の場合、それぞれが異なったリアリティの中で暮らしているということである。さらに付け加えれば、一九六〇年代以来、われわれは目的もなくふらついている数百万の半分変異したヒッピーを抱えている。

人々はリアリティの島のこうした選択性を無意識のうちに認識している。社会的な集合や離散はこのようなリアリティの盲目的信仰に反応する傾向がある。異なっている者はすべて気違いか、よそ者なのである。よそ者恐怖症は霊長類の神経系の性質に基づいている。ハチの巣は他のリアリティを容認できないのだ。

ことを示してきた。新しい種が出現するたびに新しいより複雑な神経系の段階が進化してきた。単細胞の種は原始的な接近／回避のレベルにとどまっている。大抵の哺乳類の形態は個体の筋肉による支配のレベルにとどまっている。他の群れを成す種は、前象徴的な社会的コミュニケーションのレベルに達している。原始的な人類は、象徴の操作と人工物の組み立てのレベルにとどまっており、ホモ・サピエンスや何種類かの昆虫に顕著な定着と性的役割の分化には至っていない。

本書の姉妹書ともいうべき『進化の周期律表』と『生命ゲーム』の中で、太陽光線の体系的な季節的変化が受胎時にDNAの方に差異を生み出し、それが人間の神経遺伝子的な「類型」を決定するという仮説を述べた。さらに、この十二の黄道帯の「徴候」が、おおまかに、神経配線がはっきりと異なる十二の種を人格化し、系統発生と個人的発達の十二のステージを反映し、繰り返すのかもしれないと述べた。つまり、各黄道帯の「種」は、地球外への移住に備え、惑星上の生命の進化に関わる十二の神経学的な段階の一つを習得することに対応しているのだ。*

* 裁判の判決で十二人の陪審員を用いる伝統は幼生的社会に住む人間の種類が十二種類あることを無意識のうちに認識している証拠かもしれない。

昆虫の群体の成員がハチの巣的な生存方法に欠かせない特定の役割――労働者、なまけ者、戦士、繁殖力旺盛な雄、卵を抱く女王など――を果たすべく遺伝的に前もってプログラムされているように、幼生期の人間には十二種類の類型があるのだ。

15.

神経愛国主義——すべての身体は好みのリアリティをもっている

幼生的リアリティは刷りこみ時に神経系に割り当てられる局地的な環境の島によって規定される。科学的観点から見ると、リアリティとはさまざまな速度周期で絶えまなく渦巻く電磁的波動の海である。神経系をもった身体を含むわれわれの構造はそうした渦巻きが一時的に凝縮したものだ。

人間の神経系は周期的な周波数スペクトルにそった小さな帯域の波を受け取るよう遺伝的に設計されている。

人間の意識、すなわち個人的リアリティは、神経のダイヤルがチューニングを合わせる、周波数スペクトルにそった点によって決定される。

これまでの章で、神経系が十二の幼生的-地球的段階を経て進化し、将来十二のポスト地球的な段階を経て変異していくだろうという

＊　かれらとは何者なのか？　未来のわれわれである。

第八の終末論的回路を要約しよう。有機的な生命は、進化して、量子的性格をもった銀河規模の超生理的コンテリジェンス（構造的には核・重力的）の一部となる。

S.M.I².L.E.　S.M.I².L.E.　S.M.I².L.E.　S.M.I².L.E.　S.M.I².L.E.

配列することができる。そのようなレベルのコンテリジェンスは、現在、人間がコンピュータによって指示される生産工程を組み立てていくのと同じくらい簡単に、前もってプログラムされたＤＮＡ暗号を組み立てることができる。

喉頭と手によってシンボルを操作している原始的な心が、量子的知性を想像するのは、むろん不可能に近い。けれども、理論は、こうしたより高次のコンテリジェンスの形態の可能性を受け入れるようわれわれに強いるのではないだろうか？　現在、提示されている、それ以外の唯一の宇宙論的-終末論的オルタナティブは次のようなものである。

——前カンブリア紀の軟泥の中で、稲妻によって引き起こされた、蛋白質と炭水化物の無作為の偶然な集合が、容赦ない生存競争を勝ち抜いたもっとも危険な形態である「人間」を残した。

——一神教のいう人間化した警察裁判所のエホバ。

原始的な人間のある者が現在の科学的な証拠に基づいて、すぐれた超生理的なコンテリジェンスを想像できるという事実そのものが、次のように仮定する勇気を与えてくれる。高次の知性なら少なくともわれわれの推論を実験に基づく思想と等しいものにすることができるということだ。つまり、もしわれわれがより高次の量子力学的なコンテリジェンスの可能な性質を明らかにすることができれば、遺伝的な未来に待ちかまえている「かれら」はきっと、そうした性質をわれわれの想像通り、あるいはそれ以上に発揮できるだろうということである。*

有機体の進化の方向性は今や明らかである。単細胞有機体ではじまった生命は、より高いコンテリジェンスを輸送・促進するために、次々に新しい神経回路とより複雑で効率的な身体を生み出していく。この生物学的プロセスのきわめつけは、DNAと意志の疎通ができる、つまり、RNAレベルの情報を受信、統合、伝達できる第七回路の脳である。

第七回路の脳のコンテリジェンスの副産物として、テレパシーと異種間共生（われわれの局地銀河にある何百万という生命体の住む惑星の半分に存在しているとみられるより進んだ種との共生を含む）がある。*

* テレパシー（すなわち神経電気的コミュニケーション）はポスト地球的現象である。テレパシー的なコミュニケーションは声を使った象徴的なコミュニケーションが海洋動物の間で発生しえないように、四千マイルの大気の海の底で徘徊している間は、発生しえない。われわれは第三回路（左脳）を活性化するために水から這いでなければならない。惑星の表面から離れ、自由空間に住むようになった時、テレパシー（第六回路のコンテリジェンス）は起こるだろう。

進化の第八局面はコンテリジェンスの超生理的、神経原子的構造への変容である。この量子力学的プロセスは、必ずしも、有機的な記憶や生物学的コンテリジェンスの破壊を含むものではなく、恐らく、神経遺伝的なものを核-重力-量子的なものへと合体させるものだろう。

超生理的なコンテリジェンスは核粒子の速度と周波数で物質を受け取り、生み出すことができる、すなわち原子を構造的なパターンに

その答えはＤＮＡである。

そして夜空の森の中で明るく輝くどんな持続的知性がＤＮＡを設計したのだろう?

確かに、遺伝暗号は偶然の分子の結合ではない。それは超生物学的な知性によって生み出された、手段としてのメッセージであり、方向性をもったエネルギーなのだ。

この知性は規模においては天体物理学的で銀河に充満し、至る所に存在しているが、量子構造の中に凝縮されてつめこまれている。数十億年の生物学的進化の青写真があらゆる細胞の核の内部に包みこまれているように、天文学的進化の量子力学的な青写真が原子核の中に見出されるのである。

われわれは意識を構造によって受け取られるエネルギーとして定義してきた。そして知性を構造によって伝達されるエネルギーとして定義した。生命形態のコンテリジェンスは解剖学的構造と有機的形態によって形作られ、限定される。原子構成粒子の重量場は明らかに、より早く、複雑で広範なレベルの意識と知性を可能にする。

大気圏外心理学は、ＤＮＡが神経細胞-脳より優れているのと同じぐらいＤＮＡよりすぐれているコンテリジェンスを、天体物理学的構造の進化が含んでいると仮定する。

大気圏外心理学はこのうわべの自己賛美が偽りであると主張する。人間の哲学を特徴づける尊大さと脅えた非観主義に導く間違いだと主張する。

大気圏外心理学的な観点から言うと、すべての生物学的形態は、遺伝子的「脳」であるDNAを収容・輸送するために、DNAによって生み出された仮のロボットである。第三回路の喉頭と手による筋肉的な心が人間の目的に仕える機械を設計して組み立てたように、DNAは人間を含むこわれやすい複製可能な有機体を組み立てたのだ。DNAの知性がどの程度人間の知性よりすぐれているかを人間の心が想像するのは明らかに難しいことである。DNAによって処理される複雑さと時間の長さを考えれば、DNAの知性は、人間がゼンマイ仕掛けの人形よりすぐれているのと同じぐらい人間の知性よりすぐれていると言っていいだろう。

偉大な原始的大気圏外心理学者、ウイリアム・ブレイクは次のような疑問を提出した。

夜の森の中で、
明るく輝く虎よ、虎よ、
一体、どんな不死の手や目が、
汝の対称性を考案したのだろう?

S.M.I^2.L.E. S.M.I^2.L.E. S.M.I^2.L.E. S.M.I^2.L.E. S.M.I^2.L.E.

者や教育を受けた親たちは脱皮前の危機の出現を事前に認識し、子供の不安定な局面の通過を助ける方法を学ぶだろう。

遺伝学はもう一つのより長く続く永続化の形態を明らかにする。ＤＮＡ暗号は自らを生かしつづけ、不死であるように設計されている。大気圏外心理学が主張するように、もしわれわれがＤＮＡに刷りこみを行い、意識的にＲＮＡ信号を解読する方法を学ぶことができるなら、過去三十億年の神経進化のプログラムと未来数十億年の神経進化のプログラムを含むＤＮＡの時間的な青写真を体験することができるだろう。ＤＮＡは身体や神経系によって受け取られた信号を記録し、覚えている。このようにわれわれはＤＮＡにおける吸収を通して生きているのだ。

しかし、神経的、遺伝的な再受肉化は依然として生物学的なものである。神経細胞やタンパク質分子のレベルにおけるコンテリジェンスは核を構成する素粒子のプロセスの規模、速度、パワーとは較べものにならないことは明白である。

幼生期の哲学の自我中心性と地球中心性は他のエネルギー形態——とくにＤＮＡ暗号と原子核——に比べ、人間の知性を過大評価してきた。幼生的な科学は、宇宙が物理的法則によってただ盲目的、受動的に動かされる化学原子からできているとわれわれに信じ込ませようとする。惑星地球の歴史のある時点で、特定の分子がたまたま稲妻に誘発されて蛋白-ヌクレオチドを形成し、それが偶然を通して、自己複製をしはじめた。そして、ランダムな選択と突然変異を通して、さまざまな生物学的形態が進化したというわけだ。この盲目的な進化プロセスの頂点がホモ・サピエンスだとわれわれは告げられる。「人間」は惑星上の、そして恐らくこの宇宙のなかの唯一の自己意識的な知性形態だと信じられているのである！

14.

超生理的、神経原子的終末論——生物学は量子的-重力的コンテリジェンスへと進化する

究極の質問は、生物学的進化の最終地点はなにかということである。

大気圏外心理学が提出する回答はこうである。核-量子-重力場に見出される超生理的構造との融合あるいはそうした構造による吸収を通してのコンテリジェンスの変異。

神経学的に、それぞれの新しい神経回路の出現は「死と再生」を伴うと言うことができる。新生児は脱皮し、動き回る子供になる。確かに、幼児の「リアリティ」は十八歳の同一人物の「リアリティ」とは異なるが、最初の脳は成長する神経網の一部に繋がれたままとどまっている。このように、個人の進化においては、新しい神経回路の出現は、古い回路を合体・編入していく一連の再受肉化(変身)*を明らかにする。

* 大気圏外心理学は、子供の成長の際、開花するそれぞれの回路の活性化に先立って、脱皮前の危機が訪れることを予測する。将来、心理学

4. 四つの地球上の回路を選択的にリプリントする

5. 身体を制御する

6. 連続的な再刷りこみにより、複数のリアリティを創造する術を身につける

7. 刷りこみ（すなわち体験的にＤＮＡ暗号と同一化する）

8. 核-量子的知性を解読する

寿命延長と宇宙移民が達成されるだろう。

4. 善悪、徳と罪を明確にする倫理。
5. 美醜、芸術的なものとそうでないものとを明確にする美学。
6. リアリティのスペクトルを明確にする存在論。
7. 生物学的進化はどこに向かっているのか、そしてそれはどのようにして表現されるかということを説明する遺伝子的目的論。
8. 意識が身体を去る時、なにが起こるかを説明する究極の超生理的な神経原子的終末論。生命の目的は——

S.M.I².L.E.

宇宙移民（Space Migration）

知性の増大（Intlligence Increase）

寿命の延長（Life Extention）

われわれは時間（LE）と空間（SM）を使うために頭（I²）を使うよう設計されているのだ。

これらの三つの関連する目的要綱のうちでもっとも重要なのは、知性の増大である。人間が次のようなことをする道具として脳を使いこなす方法を学んだ時——

13. 恒星間神経遺伝子的目的論

大気圏外心理学はＤＮＡによってあらかじめプログラムされている個人と種の進化の進路をおおまかに描く恒星間神経遺伝子学を明らかにする。

完璧な哲学的体系は普通、次のものを含む。

1. われわれはどこからやってきたのか、そしてそれはどのようにしてはじまったのかということについての宇宙論的説明。
2. 地球の自律性、制御、規制、可動性などに関する破壊的及び調和的表現に含まれる種々の要因を説明する政治理論。
3. 真偽と正誤を明確にする認識論的な理論。

体に凍結されてはいない。脳のリアリティは三十億の細胞ネットワークの周辺で発光する何百万という生命電気信号が相対的に変化するナイアガラの滝なのである。「意識はもはや凍結されていない」という言葉は比喩的なものではない。信号の流れを決まりきったパターンから解放する、シナプス・レベルでの、生化学的-電気的変化を指しているのだ。「静的な刷りこみ・条件づけの世界」という言葉は、リアリティの島にひっかけられた神経配線のプログラムを指している。

7. 第七リアリティは神経系による、DNA分子からのRNA信号の受容である。それは、共生的な種と種のテレパシーに導く遺伝的メッセージなのだ。リアリティとは神経構造によって記録されるエネルギーだから、われわれは、装置的、概念的に受け取る準備ができているものしか「見る」ことができない。第七回路ではDNA-RNAの信号がモニターされるのだ。

くにつれ、七つのおおまかなリアリティの階級も開花する。*

＊　八番目のリアリティは超生理的、超生物的なもので、量子のプロジェクション・ブースから投影されるコンテリジェンスを含んでいる。サーファッティ、シラグ、ハーバートらによる物理学と意識の研究グループの刊行物を参照してもらいたい。

1. 第一リアリティ（生物細胞的）は成人の内胚葉型の生存テクニックに刻印されている幼児の刷りこまれ、条件づけられた世界である。
2. 第二リアリティ（運動筋肉的）は感情‐政治的テクニックに刻印されている這う、騒ぐ、歩くという子供の刷りこまれ、条件づけられた世界である。
3. 第三リアリティ（左脳によって仲介される）は成人の言語テクノロジーに刻印されている、喉頭と手によるシンボル操作を学習する子供の刷りこまれ、条件づけられた世界である。
4. 第四リアリティは社会的‐性的に家庭化された責任を伴う刷りこみ・条件づけの世界である。
5. 第五リアリティ（身体意識）は生存のための刷りこみによって検閲を受けない自然の信号を直接受信し、重力の欲求を選択的に自覚する。
6. 第六リアリティは神経系の神経系による神経系についての刷りこみである。アインシュタイン的意識はもはや幼生的な回路や身

教的教義の受容に基づいて、人間の倫理性を評価することに抗議した。ラメトリは底の浅い物質主義者として語られているが、理想主義的な哲学者にも影響を与えた。

「一八世紀物質主義のこのスケープゴート」は、彼の著作を一ページも読んだことのない多くの人々によって非難され、見くびられてきた。彼の著作でもっとも有名なのは、『L'Homme Mechine』である。

四つの脳の人間は、リアリティを刷りこまれ、条件づけられたリアリティの島の安心できる確固とした基盤ではなく、神経系の変化する流れの内部に位置づけられる化学的な神経遺伝子的存在論を受け入れることができない。「人間機械」というコンセプトは、低次のロボット回路を超えて変身する準備のできていない人たちにとって、耐えられないものなのだ。

人は自分がいかに完全にロボット化されているかを自覚するまでは、自らのロボット性から進化することができないのである。この点の簡単明瞭なプレゼンテーションが、ウスペンスキーによって引用されている、機械化についてのグルジェフのコメント、『奇跡を求めて』の中に見出される。

大気圏外心理学は、信号を受信する神経解剖学的な構造と同じ数のリアリティが存在すると主張する。七つの神経解剖学的回路が花開

存在論的疑問はかくも簡単に解決される。だから、かつてあれほどの混乱があったことが不思議なくらいだ。結局、血液循環は四世紀前に理解された。神経系の構造、感覚器官の繊維による配線と脳との繫がりは解剖学的にきわめて明瞭である。したがって、初期の解剖学者や生理学者たちが、神経系が意識の座であり、人間の思考を悩ませ、混乱させてきた多くの存在論的な疑問に対する回答であることを理解できなかったのは不思議である。多分、ここでわれわれは、意識や知性の拡張プロセスを説明しようとする試みをおおい隠すもう一つの不思議な計画的愚かさや保護的な近視、そして種のタブーなどに直面するだろう。神経系についての事実は、幼生期の神学的、政治的なシステムにとって、あまりに挑戦的で、面喰らわせるのだろう。種が神経学的な事実に直面し、ロボットが自らの回路を解読するのは、進化の時計で見ると、あまりに早すぎるだけなのだ。

ジュリアン・オフレイ・ドゥ・ラメトリの哀しい運命について考えていただきたい。未来を予見する才能により、彼は医師のポストから外され、オランダへと追放されたのだ。

ラメトリは比較法によって、人間と他の生物との関係性を証明し、有機体の進化論へと踏み込んでいった。精神生活は進化のもっとも低いレベルにおいてすでに観察できると彼は述べている。ラメトリは脳の機能を調べることによって、精神生活の発達においてもっとも重要な脳形成のさまざまな段階を区別しようとした。彼はまた、宗

12.

神経遺伝子的存在論――リアリティには八つの解剖学的なレベルがある

本書は神経遺伝子的な存在論――リアリティの八つのレベルとそれらの相互作用の理論――を提示する。

すべてのリアリティは、神経の構造によって受信、蓄積、伝達されるインパルスの神経学的な存在論である。意識は構造によって受け取られるエネルギーとして定義される。知性は構造によって伝達されるエネルギーとして定義される。人間にとって、構造とは神経回路とそれらの解剖学的な繋がりである。上記の三つの文章を再読していただきたい。

何千年という間、存在論者たちは、リアリティの性質について無益な思索をつづけてきた。これ以上の議論の余地はない。神経系が人間のリアリティのあらゆる側面を決定することに間違いはないのだ。「リアル」なものとは、神経端末によって記録され、神経の記憶バンクに暗号化され、神経繊維によって伝達されるものなのである。

S.M.I^2.L.E. S.M.I^2.L.E. S.M.I^2.L.E. S.M.I^2.L.E. S.M.I^2.L.E.

しかし、美と歓喜は、それ自体、進化の最終目標ではなく、大気圏外存在へと向かって神経遺伝子的に進化する種の、未然の準備なのである。

れている「少女の下着」が刺激的なのだ。これらの肯定的な手がかりは、あるがままの自然がもつ審美的な快楽のためではなく、刷りこまれ、条件づけられた報酬のために探し求められる。

幼生期の報酬-快楽は「ショービジネス」と社会的「芸術」の間で制度化されてきた。巧みな芸術家は、社会的条件づけが安全／危険、力強い／弱い、有能／愚か、性的に覚醒させるものに結びつけてきた刺激を無意識のうちに選択する。芸術的に成功とみなされるものの基準は様式化され、社会的に条件づけられ、幼生的な象徴によって学習される。けれども、第五回路の歓喜は地上的に条件づけられた意味から解き放たれた、自然の刺激に対する感覚器官の反応なのである。

過去の進んだ文明では、官能的歓喜をもたらす伝統的な修行を生み出した達人や快楽主義者によって第五回路は獲得された。身体的技法は裸の自然を賛美する禅的な美学であり、象徴を迂回する直接的な刺激である。神経身体的な技法は身体をハイにさせるのだ。

多くの社会的芸術の源は、「芸術的なもの」として社会化され、刷りこまれ、学習されてきた何者かの神経身体的な信号である。

現在、技術的な豊かさ（とりわけバースコントロールの装置）と組み合わさった身体的機能の化学的知識は、われわれを第五回路の突破の地点にまで連れていった。人間は、身体意識により多くの時間を捧げ、いかにして身体の会話にチューニングを合わせ、身体意識の正確な制御を可能にする身体ヨーガを習得するかということを学ぶことに多くの時間をさいている。

自然愛好家たちを何百万も生み出した。何人かの禅の哲学者は、この宙に浮いた不確定の状態から皮肉をこめて価値を引き出している。たとえば、ウェルナー・エアハートは人生の無意味さを賛美した。

第五回路の活性化は恒星間存在の幼児期を記すものである。ヒッピーや禅の達人は、神経学的には翔ぶ準備ができているが、技術的にはまだできていない、生まれたばかりの蝶である。かれらは、来るべき変身の無害な使者として歓迎される代わりに、予想通り、汚名を着せられ、無理矢理、地下に追いやられた。

ミュージッシャン、詩人、アーティスト、審美家たちが、伝統的に、神経身体的意識や、感覚的経験を鼓舞するドラッグの代弁者であったのは、第五回路が審美的なリアリティの回路——直接的な感性や自然のアインシュタイン的相対性、禅の洞察など——を明確にするからである。「それがあるがままの美しいあり方なのだ」というわけだ。

美は見る者の身体神経的な「私」の中に存在する。

神経系の各回路は「楽しいもの」や「報いのあるもの」に関して、独自の刷りこまれた基準をもっている。回路一では母親のエプロンやおもちゃの銃が面白いものであるかもしれない。ここでは、安全性は美しい。回路二は支配と可動性を約束する刺激を歓迎する。回路三においては、喉頭と手による象徴的な報酬が美しく見える。百ドル紙幣が美しく見えるのだ。回路四では精子-卵子の刺激がある。カート・ボネガットによって記憶さ

安全性、パワー、成功、社会的な責任などに基づいてではなく、美学的、身体的な知恵に照らして選択し、それにダイヤルを合わせることを学ぶことができる。いい気持ちになること、地球の引力から脱出することを学ぶことができる」。

神経学的な六〇年代以来、官能性や身体への消費者の興味が花開くのをわれわれは見てきた。マッサージ、感覚的覚醒、ヨーガ、武術、ダイエット、健康食品の流行、エロティックなショーなどがその例としてあげられる。「新しい快楽主義」は第五回路の禅的意識のはじまりの徴候なのである。

第五回路の変異の引き金になった原因は、もちろん、神経身体的なドラッグの発見であった。一九六〇年代、テクノロジー社会に住む人々は、神経身体的な化学物質が身体を「ターン・オン」をし、この世のリアリティの島々から逃げ出す道を提供することを発見した。この発見の瞬間は、たいていの人にとって倫理的な爆発に相当する。身体的啓示は、すべての幼生的な社会倫理システムによって、例外なく不道徳なものとして非難されると同時に、身体的なネットワークにチューニングを合わせた美学者たちに力づよく支持されてきた。しかし、神経身体的歓喜が抱える問題は、それがポスト幼生期の反応であることと、地球的存在にとって複雑な生存価値をもっていることなのである。

身体的な感覚を受信、統合、伝達し、身体をタイム・シップとして制御する能力は、惑星外存在には必要だが、地上の生命にとっては危険な混乱にもなりうる。一九六〇年代のドラック・カルチャーは社会的な絆から自由になったが行く所のない、快楽主義者、ヒッピー、官能主義者、

が帝国を堕落させ、もし頽廃が阻止されていたら、帝国は拡張しつづけただろうというとんでもない趣旨のことが述べられたのだ。

ジョンソン-ニクソンの静的な道徳主義は、歴史の革命的な周期性を認識することができない。蕾から花が咲くように、高潔な共和国(ステージ十一)は中央集権化された帝国(ステージ十二)へと開花し、帝国は身体的な快楽主義(ステージ十三)へと開花するのだ。社会主義がロックン・ロールを禁じるのはこの傾向を減速させるためである。

過去において、快楽主義は必ず帝国の崩壊に導いてきた。帝国の略奪(capture)は個人的な歓喜(rupture)に対抗できなかった。だから、快楽主義は幼生期の歴史家たちには革命的な進歩とは認識されず、社会的な脅威とみなされてきたのだ。神経系が幼生的な刷りこみを自由に着脱できるようになった時、刷りこみに支配されたロボット性から抜け出す第一歩が取られたのである。『快楽主義的心理学の原理と実践』(『サイコロジー・トゥデー』一九七三年一月号にその要点が記載されている)という本の中で、神経身体学と快楽心理学のシステム論的研究を支持する大胆な試みがなされた。快楽論は最終地点ではなく、地球外存在へと向かう進化における過渡的な局面とみなされなければならない。

一九六〇年代の快楽心理学の出現は、公的な嘲笑と迫害によって迎えられた。幼生期の政治家たちが快楽主義に文化的な危険性を見たのは正しかった。神経身体的パースペクティブは、人間をハチの巣的な報酬(ここではロボットとみなされている)への執着から解き放ち、あるがままの満足と超社会的な美学的啓示をもたらす展望を切り開くのである。啓示とはこのようなことだ。「私は内部の身体的な機能の制御を学び、入ってくる刺激を、

間は進化のこの段階で互いにやさしく接するよう勧められている。なぜなら、変異は不確実性ともろさの時期だからである。実際、個人は自分自身の人生において進化を繰り返すので、それぞれの幼生期の段階で、もし子供がこれから起こる神経学的な変化についての正確な情報を与えられれば、役に立つだろう。変身にまつわるさまざまな事実の説明ということだ。

不幸にも、異なった刷りこみに由来するさまざまな要求が、政治、教義、倫理として外在化させられている。神経学的な相違が社会的矛盾として「外部に制度化」されているのだ。子供や幼生期の大人が変化の圧力に対して感じる恐れ、さまざまなリアリティの観念についての疑惑、変化に適応できない無能性といったものは、もっとも基本的な幼生期の不安——神経の臍の緒的な役割を果たす刷りこみのつながりがゆるんでしまうのではないかという不安——によって引き起こされている。

第四回路から第五回路への転換が複雑なのは、それが反社会的とみなされているからである。快楽主義の危険！　社会的に危険な歓喜の回路の発見。「私のあるがままの身体的感覚は地上の社会的な報酬よりもっと楽しく、興味深い。私は自由でハイな状態にいたい。この世の出来事はロボット的なのだ」

一九六〇年代、ジョンソンとニクソン両大統領は、アメリカ人の労働の美学は快楽主義に脅かされていることをはっきりと認識した。若者たちが広域の外国の海岸で戦闘することに興味を失った時、大統領の一般教書の中で、不吉な「ローマ帝国の凋落」との比較がなされた。快楽主義

ここで語っているのは、「神経遺伝子的な政治学」についてである。変身至上主義と言ってもいい。個人の成長において新しい回路が現れる際の転換期は、心が騒々しく不安定となり、傷つきやすい。思春期はそのような疾風怒濤の時期である。新しい人間やトンネル・リアリティ・アンデンティティの出現は、複雑な生化学的変化、何百万という神経繊維の手のこんだ新しい配線、より高次の神経センターの発達とそのようなセンターによる管理、新しい刷りこみや生物電気的パターンの上昇といったものに基づいている。こうした神経臍の緒的な転換のもろさは充分に理解されていない。第一回路の受動的な安全性を強調する状態から第二回路の可動性とパワーを強調する状態への移行は、神経系を非常に傷つきやすくさせる。赤ん坊は母の腕から去って、遊び場に出向く。新たに活性化される性的な身体に直面する思春期の子供たちは、社会的なアンデンティティを育むための圧力にさらされる。

このプロセスの繊細さと、新しく「固定」された刷りこみの永続性は畏敬の念を起こさせると同時に恐ろしい。神経系の各回路が浮上するたびに、新しい人間が創造されるのである。

新たなリアリティの島の拡張は、以前の「リアリティ」を妨げることなく、遂行されなければならない。新しい「人間」は統合されなければならないのである。

人間は、現在、第四回路から第五回路、地球的存在から大気圏外存在に変貌しつつある、混乱し、脅えた、幼生的な生き物である。人

「心」は「自然が美しいこと」、強烈な快楽の源泉は身体的な融合であること、社会的な報酬や地球的な満足には身体意識に比肩しうるようなものは存在しないことを発見する。われわれは第五回路の禅的体験を身体的回路の歓喜と呼んでいた。身体は地球への執着から解放され、恒星間空間の無重力の中を航行する準備を整えるのである。

第五回路の存在とあるがままの歓喜体験は、つねに幼生期の社会的法律によって禁じられ、タブー視される話題であった。というのも、もし人間が自らの身体の内部に快楽と啓示の源泉を発見するとしたら、地球的な社会的報酬に献身したり、深く関与したりすることが少なくなるにちがいないからである。これは社会的な刷りこみから逃げ出すための、遺伝的にあらかじめ定められた傾向である。歴史的に見て、美的、歓喜的な体験が社会的認可を「超えた」豊かな貴族に受け入れられていたというのは偶然ではない。

それぞれの神経回路は、出現した時点で、先行段階を未熟なものと見なす傾向があることをこれまで見てきた。乳児は歩き回る子供にとって未熟である。新しい体験や「少年と少女のゲーム」を密かに発見する思春期の子供は、興味深げなやさしい優越感をもって、思春期前の子供のシンボル操作を見つめる。

刷りこまれためいめいの「心」が、自らの安定性を揺るがしがちな、新しく浮上してくるリアリティを不安気な非難の目で見ることもまた真実である。

覚受容器から神経系へとなだれ込んでくる、毎分何十億という信号は検閲され、脳幹の反射レベルで意識から排除される。生存のための戦略は歴然としている。身体とは何十兆の細胞から成る多くの器官をもった生物学的生存装置なのである。もし四つの脳をもつ個人がさまざまな感覚によって発せられる無数の同質異像的信号から成る交響波にチューニングしたら、彼／彼女は幼生的な生存に必要なものに注意を払うことができないだろう。

むろん、脳は身体の仕組みや生理について細かいところまで正確に「知って」おり、一秒間に何百万という信号をモニターしている。しかし、幼生期のロボット的心は、反射的反応に「縛られ」、自らの装置を解読することも、意識的に制御することもできないのである。

四つの幼生的回路のそれぞれは、限定された紋切り型の刷りこまれた報酬-苦痛の合図をもっている。食べ物の好み、感情的な手がかり、喉頭と手による象徴的反射、家庭化された性の慰めなどである。「身体」が刻一刻とにぎやかに交わる何十兆という同質異像の細胞から成る、無重力に浮かぶために設計された、心身的な禅的快楽実験所だということを「心」が発見すると、刷りこまれた報酬は、静的で、色褪せたものにおもえる。「あるがままの身体意識」の活性化は進化における劇的な一歩なのだ。身体の快楽主義的復活は大気圏外存在へと向かう第一歩であり、奥深い哲学的発見であり、「スピリチャル」なことなのだ。というのも、それは家庭化された地球的人間には禁じられている、反社会的快楽行動の文脈で起こるからである。

われわれはこの第五回路の浮上を「快楽的ギャップの疾走」と呼んできた。四つの神経臍の緒的なラインを引っ込めることによって、

II.

神経身体的美学――美は自然であり、芸術は人工的である

快楽には八つのレベルがある。四つの幼生的回路は、リアリティの島との生命線が確保されているかどうかを知らせる報酬と確認の信号を提供する。四つのポスト幼生的快楽は、自然のエネルギー信号――自然エネルギーを調和をもって仲介する、幼生期の刷りこみから解放された生物学的なもの――の直接的な自覚によって生じる。

本書は神経学的な禅の美学が定義する美を自然なものとして提示する。つまり、自然なものを美として提示するのだ。ここでもまたわれわれは、主観的-心身的快楽と刷りこまれ、学習された報酬とを区別する。

最初の四つの回路は、刷りこみや条件づけの配線に意識を限定し、身体的、感情的、精神的、社会的な報酬に焦点を合わせる。幼生的な身体は刷りこみの配線に縛られ、ニュートン的空間での目標の定められたゲームの中で、ロボット的な演技をすべく訓練されている。身体とその感

罪を決定するが、その源はつねに性的なものだ。

十二の性的な役割間の関係は、文明の基礎である。

さまざまなサブ・カルチャーは特定の社会的-性的役割を神聖視し、他の役割を追放することで、権力を握った哺乳類政治家たちの好みを中心にして精密な倫理コードを作りあげる。

悲惨な個人的、社会的葛藤（罪の意識や恥）が生じるのは、主観的、私的な「善」が普通、社会的-性的な「徳」と一致しないからである。

定する。それはジェンダー(性)の表現-禁止の様式と目的を定めることであり、性の人格化である。「善」とは、刷りこまれた性的反応を引き起こすものである。

「善」とは、興奮を誘い、魅きつけ、家庭的な性のジュースを溢れさせるものである。「善」とは次のような体験を喚起するものだ——「おお、ここだ! 私は今、わが家にいる!」これは生殖器の貫通-合体である。それは親に保護されたコンタクトである。それは集合的な安全性、社会的な認可、賞賛、愛国的象徴を示す信号の受信である。それはサド・マゾ的なコンタクトである。それは喉頭と手による律動的な融合である。「悪」とは、社会的-性的な報酬を消したり、脅かしたりするものである。家庭化された霊長類(人間)にとって、「善」「悪」は主観的な性的表現(生殖器、親的、昇華-置換的)である。普通、秘密にされ、往々にして無意識的である。

徳と罪は社会的な合意によって決められる。それぞれの文化集団は、ハチの巣の保存に貢献する有徳な行動や犠牲的行為のルールを設定する。社会は社会的-性的行動の制御と方向づけに基づいている。その集団の特定の社会的-性的徳——感情的、象徴的、様式的——は、集団の初期の歴史において、自らの第四回路に刷りこまれた性的な奇癖を文化に押しつけた支配者的な指導者によって決定されるのが普通である。聖パウロは女性を好まなかった。マホメットは一夫多妻を好み、搾取的な人物だった。ルターは父親的な人物だった。大抵の現代社会では更年期の権力指向型の男たちによって法律が定められてきたので、その道徳体系は気取った、搾取的な、熱狂的愛国主義になる傾向がある。このようにして社会的責任は徳と

10.

神経遺伝子的家庭倫理学——善は主観的なものであり、徳は社会的なものである

男性ないし女性によって刷りこまれる幼生期の社会的・性的役割は十二ある。*

* これらの十二の役割はまた、本書の第二部で説明される発達の諸段階でもある。それぞれの人間は個人的な発達の過程で、これらの十二の段階を通して進化するが、十二の要素の人間的・社会的な分子を構成する十二の役割のうちの一つを強調するよう遺伝子的にプログラムされている。

これらの役割は社会とそのサブ・カルチャーの家庭様式にとってどのような意味をもつかによって「有徳なもの」とか「罪深いもの」という価値が与えられる。これらの役割が主観的に「善」「悪」の判断を下されるのは、第四回路の刷りこみに基づいてである。

遺伝子的な性格型とたまたま思春期に近づいているという事実によって決定される第四回路の刷りこみが、家庭化された性的役割を決

む。こうした幼生期の刷りこみと条件づけの社会化が合意のコミュニケーションを可能にする。子供のリアリティの島は親やローカルな種族集団のリアリティの島と重なるのだ。子供は適切な象徴を生み出す喉頭や手の筋肉の動きを習得する。そのようにして認識論的なゲームが学習される。これらの社会的なリアリティの島はエネルギーの束を分類し、関連づけるための名称をふくんでいる。喉頭と手による象徴、命名、学習される連想の連なりなどが「事実」という意味論的な意味を付与される。事実は狭い範囲のゲームの限られた枠組みの内部にしか存在しない。社会的なリアリティの島が、事実と間違い、正と誤を決定する基準を設定するが、それらは、個人によって「真実」として体験されたり、「偽り」として体験されたりすることと関係していることもあれば、していないこともある。

3. 象徴的な外胚葉型真理——私の人工物と象徴を識別し、結びつける喉頭と手による第三の回路によって仲介される神経信号。

4. 文化家庭的真理——社会的・性的役割を規定する第四回路の刷りこみによって仲介される神経信号（私の社会的・性的な価値）。

5. 神経身体的真理——第五回路に直接記録され、仲介される、幼生的生存の役割から自由な身体感覚的信号（私の快楽と美）。

6. 神経物理的真理——脳によって受け取られる生物電気的インパルスとして記録されるすべての神経信号（私のシナプス的伝達）。

7. 神経遺伝子的真理——DNA・RNAによって脳に送られる信号（私のDNAの記憶と予測）。

8. 神経原子的真理——脳によって記録仲介される原子・核・量子的信号。

それぞれの神経系は独自のリアリティの島を生み出す。真理は個人の神経系の配線——遺伝的なもの、刷りこまれたものや条件づけられたもの——によって規定される。「事実」とは、人間の脳が毎分、八つの回路によって仲介される何十億もの信号のリアリティ——変化する波動パターン——を扱うということである。刷りこまれ、条件づけられた個人の象徴システムがこれらのエネルギーにどのような解釈をほどこそうと「真実」である（他人にとっては「真実」ではないかもしれないが）。ジョンの第一回路の歯痛は歯科医の第三回路の「臨床的問題」である。

子供は生存しようとする細胞の好み、感情的な筋肉反射、喉頭と手による象徴、両親が属する文化の社会的・性的モデルなどを刷りこ

9.

神経学的認識論――真実は主観的であり、事実は社会的である

本書は神経遺伝子的な認識論を提示する。主観的に真実であるものとはなにか、そして合意の事実とはなにかということに関する理論である。

真理には八つのレベルがある。

1. 生物生存的な内胚葉型真理――植物的な細胞の安全性と危険を明らかにする第一回路によって仲介される神経信号(私の歯痛)。
2. 感情-運動の真理――なわばり的なステータス-支配-無力感を明確にする、第二の筋緊張型回路によって仲介される神経信号(私の感情)。

1. 暴力革命（内胚葉パワー）

大気圏外心理学はまた八つの社会的集団を明らかにする。

8. 核構造との融合
7. 共生
6. テレパシー——サイボーグ的融合
5. 身体的融合——タントラ、自然コミューン、宇宙植民地
4. 文化的倫理的集団（ハチの巣、種族）
3. 技術的・専門的・職業的集団
2. 政治なわばり的集団
1. 生物生存的集団——軍事的-医学的

活や進化を脅かすことに使う行動の規制。

大気圏外心理学は八つのレベルの革命-啓示を明らかにする。*

* 革命は物質的な外部環境における変化ないし変異である。啓示は神経学的な地球外エネルギーにおける変化ないし変異である。啓示を伴わない革命は専制であり、革命を伴わない継続は隷属である。

8. 核の啓示（量子時間）
7. 遺伝子的啓示（DNA時間）
6. 電子的啓示（脳時間）
5. 快楽主義的啓示（身体時間）
4. 文化性的革命（ハチの巣と家庭化のパワー）
3. 技術革命（機械的パワー）
2. 政治革命（外胚葉型パワー）

刺激を課すことの規制。とくにこれは、自らの欲するあらゆるドラッグや食べ物を摂取する自由と、あらゆるエロティックな刺激を用いる自由を意味する。とともに、合意なくして他者にドラッグを強要したり、他者を責めさいなんだり、エロティックな刺激を与えたりすることを規制することを意味している。

6. 自分自身の神経系を拡張、加速、制御し、電子的な方法で送受信する神経身体的自由。惑星から移住する自由。他者の脳の報酬プロセスや神経電気的な受容に干渉することに対する規制。他者の惑星外計画に干渉することの規制。

7. すべての生命形態が共生的な融合へと進化していく遺伝子的自由。他の生命形態の進化を脅かす行為の規制。これはとくに、遺伝子研究の遂行の自由と、自らの進化と共生を促進させる自由をほのめかす。と同時に、他の生命形態を傷つけ、操作し、隷属化させ、虐殺する遺伝子研究の規制をほのめかす。

8. あらゆる生命形態が超生理的な知性と融合する核の自由。核構成粒子の研究を遂行する自由。核エネルギーを他の生命形態の生

＊　本書は極左と極右、両方による広く知れ渡った暗殺の脅威の下、刑務所内で執筆されている。この原稿が出版されるかどうかはせいぜい半々の確率である。大気圏外心理学は机上の抽象論ではない。この惑星上の幼生的存在の危険なリアリティの中で鍛えあげられたものなのである。

4.　ライフ・スタイルと社会的-性的役割を選択する**文化的自由**。求婚スタイル、結婚式、人格スタイル、他者の家庭的な習慣に干渉することの規制。

これらの幼生期的自由と規制は、物質的、ニュートン的、地球的な1Gの存在の筋肉政治学を明確にする。

次に**時間**の政治学を考えたい。

地球のアインシュタイン的存在の政治学は、人体、神経系、DNA暗号、原子構造の内部における自由とエネルギー制御に関わっている。

5.　自分自身の身体機能と感覚入力を制御する**身体的自由**。他者の身体の働きと感覚の受容に干渉することの規制。他者に不本意の

S. M. I^2. L. E.　S. M. I^2. L. E.　S. M. I^2. L. E.　S. M. I^2. L. E.　S. M. I^2. L. E.

政治とはもろもろの感情が外に現れたものである。それはなわばりにしがみつく、あるいはなわばりを防衛する、危急事態を告げる(交感)神経によって仲介される哺乳類的な筋緊張型行動である。

地球的な自由には四つのレベル、奴隷状態には四つの状態、社会的な連合には四つのレベルがあり、そのすべてが、「トップ」をきわめたいという基本的に哺乳類的な中胚葉型の衝動に関連している。同様に、ポスト地球的な存在を特徴づける四つの神経学的な自由がある。

1. 生命や健康、そして他者の細胞の生存を脅かす行動の規制を保護する生物学的、内胚葉型自由。個人の健康。公共的な健康。活力の補給へのアクセス。暴力の表現と制御。

2. 生きている空間を維持し、自由に動くためのなわばり的自由。他者の生空間への進入や他者の動きを制御することの抑圧。

3. 人工物を製作、所有、使用し、シンボルを伝達する技術的な外胚葉型自由。他者の人工物を奪ったり、象徴体系を検閲することに力を用いることの規制。*

8.

神経筋肉政治学は八つの自由と八つの制御を定義する

一六世紀の終わり頃、ジョルダーノ・ブルーノは心を惑星のはるかかなたへとなげかけるよう求めて、ぐらつく世間をあっと言わせた。宇宙がはずれをもたずに無限にまで伸びていると考えたのだ。

これはそれ自体、衝撃的なことではなかったが、ブルーノは相当に遠くまで行った。大陽と生命、すなわちまだ見ぬ人類の仲間をもった惑星から成る世界が複数あることを主張したのだ。彼は人間の自己概念をおもちゃにした。そのことと、魔術的な主張、そして政治的な罠により、一六〇〇年、火刑に処せられた。

（チャールズ・A・ホイットニー）

S.M.I^2.L.E. S.M.I^2.L.E. S.M.I^2.L.E. S.M.I^2.L.E. S.M.I^2.L.E.

の創造者となるのを助けることができるのである。

人間はこれまでつねに自分自身のイメージに似せて神を創造してきた。神経遺伝子学は今や次のようなことを可能にしている。

1. 進化の順序を設計したかもしれない高次の知性とコンタクトすること。
2. あるいは、高次の知性を創造するよう進化のプロセスを設計すること。

もし信じられる尊敬すべき神が存在しなかったら、あらゆる手段を使って彼／彼女を創造しよう。われわれには話しかける何者かが必要なのだ。

現在のところ、これらは未来についての教えこまれた考えにすぎない。しかし、われわれの顕微鏡的な希望は将来のリアリティを生み出すことができるかもしれないのだ。

大気圏外心理学は、高次の知性体がＤＮＡ暗号を扱う微視的な生理学の内部で発見されるだろうと予測し、時間を用いるもっとも興味深い方法は、高次の知性体にコンタクトし、われわれの神経細胞やアミノ酸が彼／彼女と融合できることを期待することであると主張する。

一九六〇年代の「頭脳革命」以来、神経の論理とリアリティの変化に関する基本原理が広く受け入れられてきた。「刷りこみ」「連続的刷りこみ」「再刷りこみ」というような言葉はあまり頻繁には使われないが、それぞれの神経系が独自のリアリティを生み出すという考えを「ヒップ」なものとして受け入れようとする人々は増えている。この存在論的発見に対する粗野な、冷笑的ですらある反応は、寛容な笑いを浮かべ、次のように言うことである。「みんなそれなりに狂ってるのさ」「自分のことをしろ」「お前のトリップを俺に押しつけるな」

次の神経学的なステップは責任を受け入れ、つぎのように言うことである。「われわれの刷りこみがリアリティを生み出すのだから、できるだけ素晴らしい、スリルに充ちたリアリティを選ぼうじゃないか。ほとんどどんなことでもわれわれは想像できるし、それを現実のものにすることもできるんだ」

もし大気圏外心理学が大気圏外の次元へと拡張する人間の知性を想像できるなら、これらの挑発的な可能性を実現することが神経学的に可能なのではないだろうか？　もし方向づけられたパンスペルミア理論を想像できれば、それは存在しうるだろう。実際、われわれ自身がその理論の実行者になることができる。もし高次の知性体が宇宙に種をまかなかったとしても、われわれにそれができないという理由は存在しない。つきつめれば、農業とは「方向づけられた種植え」なのだ。

ここに進化論者と霊魂創造説論者の対立を調和できる可能性がある。遺伝子学者たちは、人間が恒星間の移住を通してこの惑星上の種

2.　進化する種を惑星から離れられるところまで変身させる、あらかじめ決定された解剖学的、そしてとりわけ神経学的な、改善の順序。

こうした大気圏外心理学的観点を想定するのに「方向づけられたパンスペルミア理論」を受け入れる必要はない。もっとも保守的な科学的論理でさえ、

神経系の使用法の改善

遺伝子工学

同時的に生起する人間という種のストックのバリエーション化

地球以外の惑星の植民地化

などの将来的可能性を示唆している。

サイエンス・フィクションは大衆的な文学形態へと発展してきた。ＳＦの最良のものは Psi-Phy（物理心理学）になる。テレビや映画も変化する未来への興味の増大を写し出している。けれども、高次の知性体を想像できるＳＦ作家がほとんどいないことは興味深い。調和ある素晴らしい未来を描けない無能性は、神経系の性質のせいである。毛虫は幼生期以降の生命を核心をもって書くことができないのだ。

大気圏外心理学は次のような主張をすることによって、これらの古典的な問題に新しい回答を提供しようとする。

1. この惑星上の生命はユニークなものではない。
2. この惑星に生命の種子が植えつけられた。
3. さまざまな種の進化は、生物が存在するすべての惑星において、あらかじめ決定された同一のプランに従って展開する。
4. 生命は自らを育ててくれる惑星から移住するよう設計されている。
5. 将来、一大変異が現れるようあらかじめプログラムされている。

大気圏外心理学はあらゆる科学から証拠を集め、過去の神経系から湧き起こってくる永続的な神話に敬意を払い、未来を待望する両方のデータ・ソースから実用的な推論を引きだそうとする。

こうして、最初のアミノ酸の型がそのデザインの中に次のようなことを組みこんだと主張する創造的進化論をもつことが可能となる。

1. われわれの惑星上と同じように、さまざまな惑星上で同時に展開する種々の環境の挑戦を生み出し、それに対処する標準的な生理学的、解剖学的な方法。

進化論者は、複雑なバラエティは単純なものから生じたと信じている。

霊魂創造説論者は複雑さやバラエティは最初から設計されていたと信じる。

進化論者はまた、プロセスの「偶発的な」偶然性を信じ、前もって定められた設計とか設計する知性という概念を回避しようとする傾向がある。

霊魂創造説論者は、神聖な創造者を人格化し、人類を地球上の生命の頂点に位置づける正統的な宗教家である傾向が強く、選ばれた信者のポスト生物学的な死後の生存を許容する。ある神学者たちは地球外の超生理的実在——悪霊、天使、悪魔、聖者など——の存在を主張する。そうした神学的な霊魂創造説論者と、天国的な空想や霊魂創造説論者が主張する不死性の証拠を見出せない科学的な進化論者の間に、埋めがたい溝が刻まれてきた。

いずれの陣営の中にも、進化が持続する可能性を強調する者や、未来が提供するかもしれない特殊な生命形態について詳しく考察する者がほとんどおらず、いたとしてもごく少数であることは興味深い。天国の存在を主張する宗教的な正統派理論のばかばかしさにびっくりさせられてきた科学者たちにとって、他の惑星や人類の未来に進んだ形態の知性が存在するという考えは、とりわけ当惑を誘うものなのだろう。

プソンは地球上で生命が進化してきたようには、他の惑星で生命が進化する確率は少ないことを主張してきた。厳密に統計的な進化論者にとって、人間タイプの生命の出現は、この惑星上でさえ、不可能ではないにしても、ほとんど起こりそうにないことなのである。

ほとんどの進化論者は偶然を決定的な要因とみなし、歴然とした人類の上昇を独特な神経系の偶発的な出現のせいにする。

霊魂創造説論者は進化論者と同じくらいバラエティに富んでいるが、一般的に、歴史の初期に、別個の種がヤーベェ、エホバ、神、アラーなどと呼ばれる高次の知性体によって別々に創造されたと信じている。

多くの霊魂創造説論者は聖書の創世記に頼っている。創世記によれば、神がさまざまな種類の動物を創造し、「人間」は別個に創造され、「女性」は男性が創造された後に創造された。

「ただ単に最初に創造された形態と同じくらいの種があるにすぎない」と主張した分類学の父、カルロス・リンネなどの科学者によって、洗練された霊魂創造説の形態が生み出されてきた。ハーバード大学の生物学者、ルイス・アガシズは、創造者が、現在われわれが目撃している生命形態を設計したと明言した。

これら二つの観点の基本的相違は次のようなものである。

危険、寒さを避けるといったことである。他の幼生的なリアリティのレベルについても同様である。

歴史のこの重大な時期に、なぜ？　どこから？　どこへ？　誰によって？　という疑問に対する二つのおおまかなアプローチがある。

一つは進化論者の幼生的科学者のアプローチ。

もう一つは霊魂創造説論者の幼生的神学者のそれである。

この「問題」は、科学と神学が分かちがたく結びついており、多くの科学的な進化論者たちが秘密の霊魂創造説論者であるという事実によって複雑化されている。

現在の正統派の「科学的」進化論はこのように主張する。すべての動植物は、前カンブリア紀の軟泥のなかに溶け込んでいた無機的な分子が三十億年前に電磁気的なプロセスによって放電を受けて生命となり進化したものである。そして、偶然と自然選択が核酸の鎖にゆっくりとではあるが容赦なく働き、生物学的生命の多様性と複雑さを生み出していった。たいていの進化論者は、すべての生命形態が共通の源から発生したものだと信じている。種の違いを越えてＤＮＡが驚くほど似ているからであり、系統発生的な進化と個人の発達が連続しているかのように見えるからである。

この「偶然‐軟泥」理論を提唱する進化論者たちは、科学的な無神論者で、他の惑星に人間タイプの生命が存在することに対して懐疑的ならびに悲観的である。かれらは銀河内に高次の知性体が存在する可能性について口を閉ざす傾向がある。指導的な進化論の哲学者であるG・G・シン

態学的なものでも、経済的なものでもない。哲学的なものだ。分娩前の憂鬱なのである。技術、経済、政治の会議は悲観的にならざるをえない。真の問題である回転儀による航行の問題――すなわち、なにゆえわれわれはここにおり、どこに向かっているのか、という問題――を回避しているからである。

起源にまつわる宇宙論的な問題は方向性の理論と密接に繋がっている。生命の起源についての省察は、あらゆる人間文化の（意識的ないし無意識的な）基盤を提供する。

誰が、なにゆえそれをなしたか？

という疑問は必然的に、どのようにすれば、われわれはこれから向かおうとしている所に行きつけるのかということに関する回答へと導く。もしアラーがそれをなしたとすれば、われわれはアラーの途上にいる。もし誰もそれをなさなかったとしたら、われわれはどこにも行かない。

神経系の八つの回路のそれぞれは、独自のリアリティを生み出すから、各刷りこみはひとりでにその刷りこみに限定された独自の回答を提供する。

たとえば、回路1は内胚葉型の無自覚的な細胞の共存という条件の下で、生命の目標を明らかにする。食べ、飲み、呼吸をし、苦痛、

ここに微妙な問題点がある。すべての幼生的人間は暗黙の宇宙論（普通、子供時代の神経系に刷りこまれた漠然とした教義）に基づいて人生を送っているが、大抵の人は自分たちの基本的信念を言葉にすることをためらう。というのも、それらが合理的な見解や科学的な視点をもった調査に耐えられないからである。

幼生的哲学者　人間がより高次の意識をもった未来の変身した存在の幼生形態だとどうして主張できるんですか?

大気圏外心理学者　進化が現在の人間の神経系で止まってしまったとどうして主張できるんですか?

幼生的哲学者　高次の知性体があらかじめ、プログラムされた遺伝子の青写真をもった種を地球に植えつけると考えるのはばかげています。

大気圏外心理学者　生命の起源についてのあなたの理論はどんなものなんですか?　旧約聖書の創世記?　偶然と統計的な蓋然性?　稲妻がメタンとアミノ酸を含む泥の中で生命を生み出す引き金になった?　すなわち、自発的に発生したと考えるんですか?

ひどい不安が現代世界を混乱させてきた。シュペングラー的な運命〔シュペングラーは『西洋の没落』の著者〕。この危機は政治的なものでも、生

エルピノ　この外に向かって広がるものはなにか？

フィロセオ　この限界とはなにか？

〔リアリー本人が「ファルコン・プレス版への序文」に書いているように、ここまでの文章は、新たに書き加えられたものである。これ以降の文章との間には、十年以上の開きがあり、リアリーの主眼点が変わっていることに読者は気づくだろう。しかし、彼の考えの根底にあるのはあくまでも個人の自由の拡大と意識の解放であり、その舞台が宇宙空間であれ、サイバー空間であれ、主張の一貫性が保たれていることは十分に読み取っていただけると思う〕

創造的な宇宙論者は、まず自らの理論を提示し、それから、批判者に対して、彼／彼女*（hir）の理論を明らかにするよう求める。

＊　この本では、男性と女性の融合が神経遺伝的な必然として当然のこととみなされる。「男性／人類」という一般用語は用いられない。遺伝的なポスト地球人間を指すのにわれわれは〈she〉という言葉を、その所有格には〈hir〉という言葉を用いる。もちろん〈his〉と〈her〉の組み合わせである。

をもっている。独断的な比喩にうつつをぬかすものではない。それは、心理学、動物行動学、遺伝子学、神経学、天体物理学の現時点での科学的事実に基づく仮説的な宇宙論モデルであり、生命の意味と起源を説明し、現在の人間形態を幼生的とみなす文脈の下で、未来の進化を予測するための一つのモデルなのである。

宇宙論は、これまで、人々を居心地悪くさせるような思索を必然的に含む「ぶっとんだ」危険な企てとみなされてきた。実際、目的論的な議論を検閲するタブーが存在する。この未来に対する恐怖（ネオフォビア）はしばしば宗教裁判的な抑圧に導く。ブルーノは宇宙論を広め、当惑を誘う未来の問題を掲げたかどで火刑に処せられた。『**無限の宇宙と世界について**』と題する論文の中で、ブルーノは次のような啓発的な対話を掲げている。

エルピーノ　どうして宇宙が無限だということはありうるだろう？
フィロセオ　どうして宇宙が有限だということはありうるだろう？
エルピノ　どうしてあなたはその無限性を証明できると主張するのか？
フィロセオ　あなたはその有限性を証明できると主張するのか？

この惑星上のそれぞれの生命形態は外宇宙から移住してきたエイリアンである。われわれはすべて未確認飛行有機体(UFO)なのだ。

最初の四つの幼生的局面では、1G(重力)空間で生きていくために地球という子宮にしがみつき、集団統治に力点が置かれる。後の四つの局面では、身体と神経系の個人管理に重点が移る。

5. 身体を無重力の乗り物として操縦する。
6. 神経系を高速生命エレクトロニクス信号の受信装置として操縦する。
7. 銀河に住む他の生命形態との共生的なDNAの繋がり。
8. 超生理的知性との融合。

ここにあげられている八つの神経学的進化の局面については、『**生命のゲーム**』の中で詳しく取りあげられている。銀河を中心とする進化の宇宙論と目的論(お望みなら神学)が提示されていることに留意されたい。必然的にそれは Psi-Phy(物理心理学)の味わい

生命と人類の歴史は、神経系と知の技術の進化に照らして見ると、もっとも明確となる。地理（ジャワ原人）や適応的な行動（新石器時代の人間）に基づく人類学的な範疇の代わりに、次のような神経進化の時期を提示したい。それぞれの時期は後にくる時期にとって幼生的ないしロボット的とみなされる。

1. 単細胞-無脊椎の海洋生物の局面——無自覚的な生存のための接近／回避行動。
2. 脊椎動物の局面——なわばり支配と重力の活用。
3. 人類の局面——シンボル操作、口によるコミュニケーション、道具の制作。
4. 人類の産業的局面——労働、カースト、階級、習慣の分割を可能にする社会的役割のために刷りこまれた神経。
5. サイバー身体的局面——重力から解放された身体の直観的な制御。
6. サイバー電子的局面——個人は身体的プログラムから離れた神経系を直観的に制御する。能意識。
7. サイバー遺伝的局面——人は共生と生命の拡張に導く神経系とDNA暗号との直観的なコミュニケーションを操る。DNA意識。
8. 超生理的な神経原子的局面——神経系と核構成粒子エネルギーとの直観的コミュニケーション。量子的意識。

生命は太陽の放射線によって活性化され、一連の遺伝的な脱皮と変身によって展開するよう設計されたアミノ酸の鋳型の形でこの子宮惑星に着床させられた。

恐らく、銀河のすべての酸化された子宮惑星上で展開する八つの進化の局面を明確にすることが有効であろう。

最初の四つの局面は、集団（遺伝プール）を子宮惑星のニュートン的特性に適応させることに関心を寄せる。胎児を地球の表面に執着させるように工夫されているのだ。

後の四つの局面の間に、個人はポスト地球的な情報空間で働くアインシュタイン的な電気原子力的力を解読し、統合し、それに適応する。

最初の四つの局面は筋肉機械的であり、遺伝子プールが執着しているちっぽけな存在の「リアリティの島」を明確にする。

四つのポスト幼生的局面の間に、個人はこの惑星外で生命を運行させる。

DNA内にある有機的進化の生物学的な「基本計画」が、神経系の回路の解放を指図する。

個人にとって主要な生命の目標は、体内や神経系自体の身体的信号、DNA暗号や超生理的な神経原子的なエネルギー・パターンの信号を解読するために、ますます知的（I^2）になることである。

7. 生物神経的な宇宙論。生命は地球外に起源をもち、銀河へと向かう運命をもつ

本書は神経遺伝子的宇宙論、すなわちこの惑星上や惑星外での生命の起源、進化、方向性を探る理論を提示する。

この宇宙論は、恒星間の量子的情報構造の中に存在する高次の知性体がすでにこの惑星にメッセージを送ってきたと主張する。UFOのメッセージはDNA暗号と、神経系によって受信可能な電気原子信号の形態の中にある。

何十億年も切れ目なく進化しつづけているコンテリジェンス*の情報網である生命がそのメッセージである。

＊　情報・大気圏外心理学は「インテリジェンス」〔知能〕という言葉の代わりに、エネルギー信号の受容〔意識〕、統合、伝達を指す「コンテリジェンス」〔意能〕という言葉を用いることを好む。方向づけられたパンスペルミア説〔生命は胚種や胞子の形で宇宙の至る所に存在し、環境の適した所で発生するという学説――『ランダムハウス英和辞典』〕。

3. 喉頭音と手（LM）による象徴システムの主観的な真偽と合意の虚偽／事実を明確にする理論――神経遺伝子的**認識論**。

4. 主観的な善悪、合意の正誤を明確にする神経遺伝子的**倫理学**。

5. 美の自然な身体的次元を明確にする神経身体的**美学**。

6. 八つのレベルのリアリティと、それらの進化、相互作用を研究する解剖学的、実験的理論――神経遺伝子的**存在論**。

7. 長寿と高次の生命形態との銀河における共生へと導く、個人と種の進化の未来の進路を明確にする神経遺伝子的**目的論**。

8. 原子・量子レベルの情報場での神経系の刷りこみを予測する超整理学的な神経原子的**終末論**。

S.M.I²L.E.　S.M.I²L.E.　S.M.I²L.E.　S.M.I²L.E.

6.　本書は地球的な種からサイバー量子的個人への進化の哲学を伝えるものである

われわれは核物理学、天文学、DNA遺伝子学、動物行動学、実験的刷りこみ、精神薬理学、神経学、行動心理学における事実と理論を（広範な見直しや言い換えをせずに）当然の事として受け入れる。

科学的事実のこうした合意事項に基づき、また広範なセットとセッティングと社会的文脈での、拡張し、加速された意識の状態を用いた実験に基づき、次のことを提示する。

1.　この惑星上での、また惑星外での生命の起源と進化の理論である生物神経**宇宙論**。

2.　哺乳類のなわばりにおける筋肉運動を自由にコントロールする基本的な遺伝的次元を明確にする神経筋肉**政治学**。

つづき、その有機体を他の有機体に結びつける組織化された伝達が第三の局面となる。

　したがって、幼生期の個人の発達は十二の局面（四回路×神経細胞の三つの発達段階）を通して進行する。ポスト地球的、情報サイバー的進化もまた十二の局面（四×三）を通して進行する。

　これらの二十四の段階は系統発生的であるとともに存在論的である。最初の十二の神経発生的段階は単細胞有機体からもっとも進化した昆虫や人間社会に至るこの惑星上の生命の進化と、誕生から幼生期の成熟を経て、完璧なハチの巣的な社会化に至る個人の発達を説明する。

　これらの段階の詳細な説明は『生命のゲーム』に見出される。

ると、三つの発達段階があることが明らかとなる。

受動的な受容と消費

能動的な統合

相互的な伝達と融合

生物学的なコンテリジェンスの基本単位である神経細胞は解剖学的、機能的に見て三つの部分をもっている。信号を受け取る樹状突起、入力信号を蓄積、統合、解釈する細胞体、そしてメッセージを伝達する軸索である。それぞれの神経細胞や回路、そして実際には神経系全体がこれら三つの機能に分かれている。

単細胞生物や無脊椎動物のようなもっとも低いレベルでは、これらの三つの機能は集団の生存のために働くが、より高い進化の段階では、個体間のコミュニケーションと融合が生存にとってより重要となる。

各神経細胞の回路が個体の発達の際に現れる時、受動的な消費、受容、入力の局面がまず現れる。能動的な局面がそれに

神経の進化を二十四段階に区切ることが有効であることをわれわれは見出している。そのうちの十二は地球的(統治的)なもの、十二はポスト地球的、サイバー量子的なものである

これらの文化的図像システムは前科学的文化が元素表に基づく銀河の進化モデルを表すため用いた、粗野な心理学的、神経象徴的表現とみなされる。これらの「オカルト」システムは地球上や地球外での生命の進化のコースを予測するための前科学的な試みであり、人類が自然の法則を象徴化する神経文化的なコミュニケーション・システムとみなすことができる。

情報・大気圏外心理学は主だった八つの神経学的進化の順序を概略することを主要な関心事とする。二十四段階の詳細な説明に興味ある読者は『**生命のゲーム**』を参照してもらいたい。

これまでの章で、人間進化の八つの時期を明らかにしてきた。

四つが集合的-地球的、四つが情報世界とそれを超えた世界のために設計されたサイバー量子的なものである。

進化の目標を高次の知性に設定しよう。すなわち、徐々により強烈で複雑な、速い、広範囲の信号を受信し、統合し、伝達できるようになる、神経系の段階的発達ということである。

集合的な種がより知性的になればなるほど、適応と生存の能力が増す。身体は脳と種を輸送する乗り物である。身体は脳や精子-卵子をより効率的に収容・輸送すべく進化する。

遺伝暗号は変身の段階で進化するよう予め神経系をプログラムしたのだ。**進化の基本的戦略は変身と移住なのである。**

個人の神経回路の順を負った発現は次第に複雑さを増す系統発生的な神経系の出現を繰り返す。神経系の進化を調べてみ

5.

神経の進化を二十四段階に区切ることが有効であることをわれわれは見出している。そのうちの十二は地球的(統治的)なもの、十二はポスト地球的、サイバー量子的なものである＊

＊

『生命のゲーム』は神経進化の二十四段階を体系的に論じており、生物学的な人間の個人的進化が化学元素の周期率表に見出される設計図の青写真に符合していることを匂わせている。

この本は周期率表を原子的、生物学的な進化の順番を決める暗号メッセージとして、また、人間の不朽の象徴体系がもつ哲学的な意味の幾分かを解読できるロゼッタの石として扱っている。

周期率表に照らして理解することができるいくつかの象徴体系には、次のものが含まれる。

タロット、黄道十二宮図、易経、トランプ、ギリシャやローマの神話的な神々、ヘブライ語のアルファベット、聖なる図像のシステムなど。

後の四つのポスト地球的段階は量子的情報世界のために設計されており、それゆえ、個人は身体の信号を通して神経電気的受容性、ＤＮＡ-ＲＮＡ信号の解読、原子構成粒子のメッセージの統合などを操ることができるのである。

サイバー神経的——個人の脳の操作

個人だけが神経系を操作することができる。個人の意識は、どんな強力な集団によってもまねできない神秘的で貴重な一人だけの体験をするのである。

サイバー遺伝子的——DNA暗号の操作

サイバー原子的——ナノテクノロジーの操作

年代記的に生起する個人の進化の各局面において、新しい刷りこみが形成される。それぞれの刷りこみは後続の新しく活性化される神経回路の状態に備えて、肯定的及び否定的な焦点を決定する。それぞれの刷りこみはリアリティの島のレベルを規定する。最近開発された、再刷りこみのテクニックは、計画に沿った一連のリアリティの再創造を可能にする。

神経系のすべての活動が化学-電気的なコミュニケーションに基づいていることは言うまでもない。

神経系の最初の四つの統治的段階は、惑星地球のユークリッド・ニュートン的特性に対処し、個人を群れ-群衆-種族のリアリティや国家産業的リアリティに適応させるようにDNA暗号によって設計されている。

人間の神経系は八つの成熟段階を通して段階的に進化している。各段階で、神経系の新しい回路が活性化され、刷りこまれる

七八年?)、生物学を超越し、個人の心に進化の環境を位置づける時がやってきたのだ。サイバー社会の到来である。

個人の進化

進化のサイバー段階においては、それぞれの個人が未来の形成に責任を負う。

われわれはもはや遺伝子プールや子宮としての世界に繋がれてはいない。

サイバー人間が習得しなければならない、避けられない論理的段階がある。より正確に言うなら、個人によってのみ操作されうる技術があるのだ。サイバー人間が航行することを学ばねばならない論理的世界の地理が存在するのだ。

サイバー身体的——個人の身体の操作

個人だけが人体を操作することができる。政府にはすまないが、それが物事のあり方なのである。

個人だけが身体感覚的な世界を体験し、そこに住み、進化を遂げることができる。

個人だけが歯痛やオルガスムを体験することができる。

最初の独立宣言、最初のソロ大陸間飛行は自分自身の身体と感覚器官の制御である。

の時間で機能し、生物学的な不死性と、より高次の生命形態との共生を可能にする。DNA意識。

Ⅷ——サイバー原子的段階は原子を構成する量子の物理的重力信号に刷りこみを行い、生物学的な生存を超越する。量子意識。ナノテクノロジー。

種の進化

年代順に推移する種の進化の各段階において、集合統治的リアリティが出現する。これらの社会的に合意された神経プログラムは文化的に条件づけられた遺伝子プールの成員のために肯定的／否定的な磁極を決定する。善／悪。タブー。

集合的意識は進化の胎生状態を完了することを要求される。胎児ないし幼生的形態は自分自身で手を広げることができないのだ。

統治的(ハチの巣的)意識は動物の家畜化、農業の確立、金属道具の製作、国家や帝国の形成、船舶、印刷機、蒸気機関、工場、発電所、飛行機、ラジオ、映画、核兵器、ロケット、コンピュータの建造や組み立てなどを要求された。

二十世紀のハチの巣文化が、惑星を離れ、量子的な会話でコミュニケーションする技術をもった時になってはじめて(一九

号の受容、集積、伝達を仲介する。闘争／逃走。

Ⅲ――**象徴的-人工的段階**――口と手の信号、言語、人工物、象徴、道具の受容、集積、伝達を仲介する。種族的。

Ⅳ――**産業段階**――工場文化の性的役割、職業、社会化に関わる神経信号の受容、集積、伝達を仲介する。

身体的、電子-神経的、遺伝的、原子的情報を仲介し、ポスト地球的な情報世界に適応するために設計された四つの神経系の回路は次のとおりである。

Ⅴ――**サイバー身体的段階**――無重力環境で機能するために設計された、政府の刷りこみに検閲されない感覚-身体的信号の受容、集積、伝達を仲介する。身体意識。

Ⅵ――**サイバー電子的段階**――生物-電気的グリッドの同時性と速度で働く神経信号の受容、集積、伝達を仲介する。政府の刷りこみではなく、個人によってプログラムされる。脳意識。

Ⅶ――**サイバー遺伝子的段階**は**RNA**信号を受容、集積、伝達し、**DNA**暗号に刷りこみを行う。そのことによって、種

4. 人間の神経系は八つの成熟段階を通して段階的に進化している。各段階で、神経系の新しい回路が活性化され、刷りこまれる

人間の神経系は八つの成熟段階を通して段階的に進化している。各段階で、神経系の新しい回路が活性化され、刷りこまれる。

地球への固着と地球上での生存のために設計された神経系の幼生的(神経-臍の緒的)・地球的段階は次のようなものである。

I——**生物的生存(海洋)段階**——細胞の健康と無自覚的な代謝活動の安全性に関わる神経信号の受容、集積、伝達を仲介する。安全／危険。

II——**感情-運動・地球的-哺乳類的段階**——身体の可動性、なわばりのコントロール、無力感の回避に関わる神経-筋肉信

神経系、刷りこみを通してのリアリティの創造、銀河の中のわれわれの位置、神経伝達物質ドラッグによる再プログラミング、アインシュタインの相対性、DNA暗号などについての科学的事実——現在ではどこの大学の教養過程の教科書でも知ることができる——は心を開いた青年なら理解できることである。けれども、これらの事実はユダヤ-キリスト教-マルクス主義の観念にとっては非常に受け入れ難いことであるため、抑圧されてきた。誰が見ても明白な観察や科学的発見に対する無意識的な抵抗は、人間の知識の進化において、必ず起こるプロセスである。われわれは正統派の宗教的狭義を妨げる事実をタブー視する傾向に慣らされてきた（『自分自身を取り戻す』参照）。どんな現象がタブー視されるかは遺伝子的に決定される。未来の変異の段階に時期尚早に接することは、幼生期の種にとって危険なほど混乱を誘うものであり、困惑させるものなのだろう。

神経系の連続的な刷りこみ能力や大脳皮質の左右の対称性の発見、われわれの局地銀河の何百万という惑星に進んだ生命形態が存在している可能性、情報宇宙、デジタル・コミュニケーション、使用されていないDNA暗号の半分に長寿の秘密がかくされているかもしれないという認識などが人間の進化の過程で突然変異的な量子的飛躍を生み出し、種を惑星からの移住と、未来の情報世界に住むサイバー・スピーシーズ（電脳人間）になるための変異に備えさせているのである。

12.　人類の地球的存在からポスト地球的存在への変身は、精神賦活的なドラッグ、電子機器、DNA暗号、原子構成粒子の核エネルギー、量子力学、コンピュータ、電子コミュニケーションといったもののほとんど同時的発見によって記された。

個々の人間が通過する八つの時期の各時期は、形態、行動、生理、そしてもっとも重要な神経の総体的な変化を伴う。これらの変化はもっとも素朴な観察者にさえ明白だという事実があるにもかかわらず、これらの局面の心理学的・哲学的意味は幼生期の科学者や哲学者には理解されなかった。恐らく、これは、人類そのものが同じ八つの局面を通じて進化している最中で、最近まで、四つの基本的で集合的な生存プロセス(無自覚的、政治的、技術的、社会的など)*にもっぱら心を奪われていたせいであろう。

*　一時的に、生物学的、政治的、技術的、生殖的安全性の必要なレベルにまで達していた初期の文明では、人間という存在の幼生的、周期的性格が散発的にではあるが、萌芽的な形で認識されていた。古代の中国、インド、セイロン、クレタ、バビロン、ギリシャ、イスラム系ダマスカス、エジプト、ルネッサンス期のヨーロッパでは、少数の神経学的なエリート、早熟に進化した人たちがレジャー(すなわち時間)とその時々に入手可能だった技術を用い、身体の快楽的、エロス的、美的表現、サイエンス・フィクション的な思索、神経学的な機能を生存のための刷りこみを超えて拡張させる植物的な手法などを開発していた。

アナロジーを用いるなら、水棲のオタマジャクシは、水陸両生のカエルが(系統発生的にも個体的にも)自らの成長した姿であると認識することを神経学的に禁じられているということである。

二――垂直的（上／下）

三――二次元的（左／右）

四――保護的／協調的（種の生存のため）

四つのアインシュタイン的な神経系の回路は、ポスト地球的空間での生存のために設計されており、次のようなものの制御を含んでいる。

五――時間の乗り物としての、また情報系としての身体

六――自己決定する生命電気的なコンピュータとしての神経系

七――分子的知性としての遺伝暗号

八――超生理学的、量子力学的、核-重力場（ナノテクノロジー）

S.M.I^2.L.E.　S.M.I^2.L.E.　S.M.I^2.L.E.　S.M.I^2.L.E.　S.M.I^2.L.E.

でいる。進化の基本戦略は変身と移住である。われわれはひょっとしたら他の何百万という惑星に植えつけられてきたのかもしれない。

9.　DNA暗号は文字通り進化の進む方向の大筋を決定するメッセージである。惑星地球の上では、この進化の青写真の約半分が展開されてきた。ヒストンによって阻止されている後の半分は、オタマジャクシの染色体が未来のカエルの形態を含んでいるように、不活性の状態のまま活性化されるのを待っている。これは、四カ月の人間の胚が新生児の形を含んでいたり、新生児が思春期のティーン・エージャーの形を含んでいたりするのと同じである。

10.　人類は現在、幼生的発達の第四局面を終了しつつある。地球を子宮と考えていただきたい。これまでこの惑星上の生命は幼生的だったのだ。生命が惑星を去る時、ポスト胎児的、ポスト幼生的存在となる。

11.　地球上の生命を、重力に拘束された生存の力学に関わっているという意味で、ニュートン的存在、そして、地球外存在を、重力を選択できるという意味で、アインシュタイン的存在として語るのは便宜にかなっている。

四つのニュートン的な神経系の回路は地球上での生存に必要な四つの臍の緒的な態度を習得することに関わっている。

一——腹／背

の惑星の半数が進化的な意味で地球上の生命より進んだ生命をもっていると推定される。

3. 数にして何百万と予想されるこれらの進んだ文化は、われわれ自身の進化の未来を表している。かれらは遺伝的な時間でわれわれの先を行っているのだ。「かれら」は「われわれ」の未来なのである。

4. 既知の宇宙のあらゆる恒星系では、同じ化学元素と物理-化学的なプロセスが発生する。

5. 地球上に生存する生命は決してユニークなものではない。われわれは「さやえんどうの豆」のように恒星間に住む隣人たちと似ているかもしれないのだ（ここに言う「われわれ」とは地球上のあらゆる生命形態のことである）。われわれは自分たちの初期の姿しか見出さないかもしれないし、進んだ姿を見出すかもしれない。われわれはエイリアンの生命形態なのである。

6. 惑星は予測可能な寿命をもっている。それらは太陽が「巨大化して赤くなる」終末期に破壊される。惑星が太陽の老化により破壊される前に、あるいは、生物資源が使い果たされる前に生命が移民すると仮定するのは論理的である。

7. 神経遺伝子学的理論は、生命が誕生した惑星にとどまっているようには設計されておらず、銀河空間を移住して歩くよう設計されていることを示している。

8. 生命はアミノ酸の鋳型で若い惑星に植えつけられる。これらの遺伝的青写真は何十億年に及ぶ進化のデザインを含ん

3. 生命は地球的-集合的段階からポスト地球的-電脳的段階へとさまざまな変異の局面を経ながら展開する

ホモ・サピエンスとして知られる種が八つの生命周期の局面を通して進化するのを信じることは、喜びであり、われわれの自由の感覚を押し広げてくれる。これらの局面のうち、四つは子宮としてのこの惑星上での集合的思考に関わっている。より進んだ他の四つの局面は情報空間とそれを超えた空間を航行するために設計されている。

情報心理学は次のような仮定に基づく神経遺伝子学的進化の理論である。

1. われわれの銀河には、有機的生命が育ち、進化している惑星をもった何百万という太陽系が存在する。
2. われわれの惑星はG型太陽の中間点(誕生してから五十億年)に位置しているので、生命がいると見られるわれわれの銀河

などを考えていただきたい。

S.M.I²L.E.
S.M.I²L.E.
S.M.I²L.E.
S.M.I²L.E.
S.M.I²L.E.

るような意味で虚構である。

　これらは、宇宙移民や神経論理学、そして寿命延長の科学が大半のSF作家の空想を超えてしまっているという意味でファクションである。サイエンス・ファクトは今やサイエンス・フィクションをはるかに凌駕している。われわれは現在、『二〇〇一年宇宙の旅』より信じられない未来を創造しつつあるのだ。オニールの宇宙シリンダーは、クラーク-キューブリックの宇宙船より複雑で進んでいる。

　本書は、筆者が危険なイデオロギーを振り回し、ニュートン的法則や宗教的な法則を侵犯したかどで送られたさまざまな刑務所で書いたものである。

　他の哲学者たち（とくにキリスト教神学者、統計的な物質主義者、マルクス的な弁証法論者）は現在入手可能な科学的事実のデータに異なった解釈をほどこす。そのような理論はいかに大衆的であれ、やはり虚構にすぎない。アカデミックな教条主義によって受け入れられ、法的な処罰によって強化された哲学が、迫害され、検閲された哲学より虚構性が少ないかと言えば、必ずしもそうではないことを歴史が示している。実際、サイエンス・フィクションは、それらが異議を唱える正当派の理論より人間の進化を加速しそうな場合のみ、無理矢理抑圧されることを示す社会的証拠がいくつかある。ソクラテス、ブルーノ、コペルニクス、ダーウィン、パスツール、サハロフ

2.　情報心理学(Psi-Phy)は量子物理学の心理学であり、科学的事実に基づく哲学である

ここに提示されている理論はサイエンス・ファクション（事実ということを強調するためにリアリーがフィクションをもじって作った造語）、化学の哲学、あるいは物理学の心理学(Psi-Phy)と呼ぶことができる。*

＊　「誰もがサイエンス・フィクションを書いている。……そのほとんどは自分がサイエンス・フィクションを書いているという考えをこれっぽちも抱かずに書いているのだ」ジョイス・キャロル・オーツ。

これらは物理学、生理学、薬理学、遺伝子学、天文学、行動心理学、情報科学、そしてもっとも大切な神経学の実験的な諸発見に基づいているという点で科学的である。

これらは、自然科学の数学的な命題を超えるあらゆる理論や省察は主観的であるというヴィトゲンシュタインの言ってい

にほとんど貢献しなかったので、将来、われわれは心理学的な概念を物理学、化学、天文学の法則や構造に基づかせ、人間の行動を国家間の関係ではなく自然の関係に照らして説明する道をさぐるべきだと主張するのは、あまりに空想的すぎるだろうか。

生化学や物理学法則を無視する原始的、地球中心的、自我中心的、社会中心的な心理学は、哺乳類の感情の哲学、ユークリッド的な喉頭筋肉的シンボル、「人間と宇宙」を説明する狭量な価値感などを構築する。

大気圏外心理学は、人類の運命を、進化する神経系に照らして見る。進化する神経系は、ＤＮＡの知性（寿命と生命の規模を拡大すべく定められた恒星間の移民プロセスにおいて、惑星を一時的な胎児の寝場所として活用する知性）によって、量子-物理学的なコンテリジェンスの共生的な受信装置となるよう設計されている。

原子や核のプロセスに関するわれわれの認識は、ユークリッド的、ニュートン的であろうとする言語-論理-想像力-哲学によって制限されてきた。どうしてもわれわれは自然を「心理化」し、原子の出来事を人格化してしまうのだ。幼い子供時代に刷りこまれる喉頭筋を拠り所とする心は、想像できないことは想像できず、体験したことがないものは体験できないのである。

けれども、**DNA**との対話並びに原子-原子構成粒子のエネルギーや天文学的なエネルギーとの会話は双方向でなければならない。**DNA**や量子的構造によってわれわれの神経系に送られてくる信号を解読するために、われわれは「心」を開かなければならない。われわれの心理を遺伝的に見ると、すなわち**DNA-RNA**のように考えると、現在の人間の状態が、神経系の進化の一時的な局面として見えてくる。**DNA**がわれわれを生み出すのだから、人間の心理を分子の知性の法則やデザインに関連づけるのは、論理的に巧妙であり、神学的な慣習(神のイメージ)に合っている。原子核が原子や分子を設計するのだから、われわれの心理を核物理学や天文学の法則や構造に関連づけるのは論理的である。自分たちを、輝いては衰え、引きつけ合っては反発し合い、さまざまな周波スペクトルにそって信号をやりとりし、共鳴し合いながら分子的な社会構造を形成し、特徴的な電磁的人格を所有する、相対的に焦点を移しながらエネルギーのネットワーク上を動き回る「原子」や「恒星」と考えることも論理的である。

ニュートンの地球中心的な諸原理に基づく原始的な心理体系は人間の哲学を啓発したり、それに調和を与えたりすること

原始的な心理学はニュートンの「法則」に基づけばいいほうで、たいていの場合、地球中心主義(空想的なプトレマイオスの宇宙体系)に基づいていた。もっとも詩的なフロイト派の人々や行動主義者、交流分析の分析家たちでさえ、宇宙の理解を劇的に変えたアインシュタインの革命によって、自分たちの人間行動の理論が影響をこうむることを受け入れなかった。

量子心理学は原子の「心理」——すなわち意識と行動——を研究し、電子工学と原子工学を人間の意識や行動に関連づけはじめている。物理学者アーチボルド・フィーラーの研究が示唆するところによれば、原子核はきわめて高速で情報を受信、想起、集積、伝達できる。さらには、われわれが有機体に観察する基本的な社会行動の大半に従事することができると見積もられている。

電子レベルでの対人的、感情的(すなわち動的)知的、社会的出来事と神経系によるそれらの超感覚的受信(トランスセプション)が**神経電子工学**を決定する。

原子を構成する核レベルでの対人的、感情的、社会的出来事と神経系によるそれらの超感覚的受信が**神経原子工学**を決定する。エリック・ドレクスラーのナノテクノロジーに関するエッセーは、このレベルにおけるサイバー・ナビゲーション(電脳航行法)の驚くべき原子的パースペクティブを提供する。

いくようなデザインされていると考えるなら、神経遺伝学を大気圏外心理学の一分野と呼んでもいいかもしれない（フリアーの著作『神の魔法を解く』を参照）。

原子核は関係の法則（励起、チャーム、スピン・パリティ、共鳴）に従って働く、強力な力をもった複雑な構成体であることが明らかになりつつある。細胞の核にあるＤＮＡ暗号がＲＮＡを通して身体や神経系を設計し、生産する遺伝的な脳であるのと同じように、原子核を、量子的論理に従って原子や分子を設計し、構築する初歩的な「脳」と考えることが可能である。

量子物理学――宇宙の中のあらゆる物質とエネルギーは、自然の中に存在する基本的な力の相対論的な相互作用に照らして理解できる「全体的な情報場」において働くと現在推測されている。

重力

電磁気力

強い相互作用（原子構成粒子）

弱い相互作用（放射線）

エンジニアが自動車組み立て工場のフロー・チャートを調べ、自動車が未来の順序に従って、いかにして組み立てられるかを知ることができるように、ヒストンに覆われたDNA暗号の部分も、未来の進化の順序を決定するために調べることが可能である。DNAのメッセージを読解するための道具は神経学的なものや神経化学的なものだ。DNA-RNAと神経系との双方向コミュニケーションを研究する科学は、**神経遺伝子学**と呼ばれる。

天文学と宇宙航行学は、恒星間トラベルが人類の未来に横たわっていることを信じさせる。地球外での生存は進化した神経系を必要とし、すぐれた知性体との接触を余儀なくされるだろう。**

** 何人かの天文学者は、すぐれた知性体など宇宙には存在しないと述べている。「かれら」はわれわれにコンタクトしてこないし、われわれの無線信号にも応答しないからだという。そのような結論は因習的な科学の否定的な偏見を証明している。もちろん、高次の知性体の存在の有無を決定しうるような科学的根拠はない。時間伸長の要因がこの問題を複雑にしている。もし宇宙船が光速に近い速さでわれわれに向かっているとしたら、一年のフライトごとに、地球上では膨大な年月が経過してしまうだろう。独断的な発言が許される根拠はないのだ。

神経遺伝子学はDNA-RNAの心理――すなわち意識と行動――を研究するニュー・サイエンス(りっぱな定期刊行物と会員をもった)である。DNAの意能(コンテリジェンス)が地球に限定されるものではなく、恐らく、地球外の知性にその根をもち、そこに帰って

できる。個人にあっては、この暗号は幼児期から児童期、思春期、成人期、更年期、老年期を経て死に至るまで、あらかじめ決められた段階を通して展開する。それぞれの種の進化において、固定された時刻表が同じように展開するのだ。

DNA暗号は過去と未来の青写真を含んでいる。毛虫のDNAは蝶の体の構造と機能のデザインを含んでいる。

個体発生が種の系統発生を繰り返すことはずっと以前から知られている。たとえば、人間の胎児は進化のサイクルを繰り返す。エラを成長させたり、体毛に覆われたりするのだ。この事実の精神-神経的な意味や時間的な意義は、真剣に研究されてこなかった。*

＊　継続的な刷りこみ理論は、心の発達が系統発生を繰り返すことを示唆する。つまり、個々の神経系は進化のプロセスを繰り返すのだ。この理論によれば、赤ん坊は無脊椎動物のリアリティを刷りこみ、ハイハイする子供は哺乳類のリアリティを、学童期以前の子供は旧石器時代のリアリティを、思春期の人間は定着した文明人のリアリティを刷りこむ。

遺伝学者はつい最近になって、DNAに未使用の部分があることを発見しつつある。この部分はヒストンによって覆われ、非ヒストン系の蛋白質によって活性化されるが、未来の青写真を含んでいると考えられている。進化とは盲目で偶然の即興的プロセスではない。DNA暗号は読解可能な未来の青写真なのである。

天体物理学もまた、心理的ヴィジョンの限界を押し広げるさまざまな事実を生み出してきた。われわれが孤独ではないことを知ったことは喜びである――われわれの局地銀河にある千億以上の星のおそらく半数がわれわれの太陽よりも古いと見られており、われわれより進んだ形態の知的生命体が近くに存在している高い可能性を示唆しているのだ。人間はこれまで高次の知性体について考えることが神経学的に不可能だった。SF作家でさえ、ごく少数の例外（ステープルドン、アシモフ、クラークなど）を除けば、現在の文化の技術的な予測と、人目を引く極端な側面を描くことができただけで、すぐれた種の徴候を描きだすことはできなかった。

心が想像できることはなんであれ、生み出される傾向がある。人間がまだ開発されていないより高いレベルの知性や神経系の回路の想念を受け入れ、自らの神経にそれを**刷りこむ**やいなや、新しい進化の哲学が現れるだろう。惑星外の視点に立ったこの人類の進化を**大気圏外心理学**と呼ぶのは自然である。この心理学は、進化する神経系という文脈の下で、現在、地球外の未来に存在しているわれわれより古い種がもっているにちがいない見晴らしのきく観点から人間性を考察する心理学である。

遺伝子学は、すべての生きた細胞の核にあるDNAの青写真が各種の間で驚くほど似通っていることを明らかにしてきた。天文学者や宇宙生物学者たちは、外宇宙や他の恒星系に住む生命にとって基本となるさまざまな分子を発見してきた。今や、DNA暗号は、巻かれたテープのように順番に解けていって、予めプログラムされている設計プランを伝達する時間的な青写真とみなすことが

宇宙航行学——地球外飛行の意義はまだ充分に理解されていない。アポロ計画は技術的な勝利や国家的な業績にとどまるものではない。遺伝的、神経学的に一つの種の突然変異がはじまったのだ。これは、その重要さにおいて、生物史の初期に、両棲類がはじめて海から陸に上がったことに匹敵する出来事である。

人類が惑星間の存在に、そして最終的には恒星間の存在になるべく移動しはじめたことは疑問の余地がない。この移行が神経系やDNA暗号に及ぼす効果は強烈であろう。両棲類や陸に住む有機体が急速に変化し、新しい環境に適した神経系や生理機能を発達させたように、高い軌道に住む人間も急速に変化し、新しい環境に適した神経系や生理機能を発達させるだろう。

恒星間の生活に適応するのに必要な遺伝的変化や神経の変化を引き起こすにちがいない物理的な刺激は数多くあるだろうが、そのうち二つ、代表的なものとして、無重力と地球外放射線に晒されることがあげられる。

心理的効果は劇的だろう。宇宙への移住は神経系にとって可能な加速化された柔軟性、相対論的な柔軟性、多次元的な柔軟性を要求する。「人間」が祖先の穴居人を超えた存在であるのと同じように、地球外人間が現在の地球人を超えて進化することは避けられない。このような大気圏外心理学的適応のきざしは、月面旅行から戻ってきて、宇宙的洞察（ミッチェル）、哲学的啓示（シュワイカート）、再誕生の徴候（アルドリン）を訴えている数人の宇宙飛行士や船外活動のベテランに認めることができる。

いものである。

「人間の」欺瞞的な自己評価に驚く必要はない。なぜなら、われわれが住みついている「島的なリアリティ」は、遺伝子的な鋳型と、われわれの神経系がこれまでに生み出してきたシンボルに照らしてしか自己評価できない刷りこみによって規定されるからである。

もしわれわれより進んだ文明に属する地球外の科学者によって書かれた**ホモ・サピエンス**についての人類学的な報告というものを想像できるとすれば、心理的、社会的、生態学的問題を解けない人類の無能性や、基本的な宇宙論的疑問（たとえば、われわれはなぜここにいるのか、われわれはどこに行こうとしているのか、といった疑問。注意——いくつかの面白い論理的回答として『神の魔法を解く』と『智恵のシステム』〈いずれもファルコン・ブックス〉を参照してもらいたい）に答えられない無能性は次のような結論に導くだろう。**ホモ・サピエンス**は非常に限定されたロボット的な反射能力しかもたない種であり、知的生命はこの惑星ではまだ発達していない。

そのような地球外生命体の調査は、たった今論じたばかりのアインシュタイン的な科学のパースペクティブや、人類の未来の運命にとって重要な意味をもつ他の四つの科学、すなわち**宇宙航行学**、**天体物理学**、**遺伝子学**、**量子物理学**がほのめかしているものによって例証される、初歩的な知性の出現も報告するだろう。

ことに備えさせるものなのだ！

アインシュタインやその他の人物によってなされたこれらの諸発見は、静的でニュートン的な人格の概念に職業的にも神学的にも関わっている心理学者たちに、案の定、打撃を与えてきた。

神経学、動物行動学、神経化学、精神薬理学という四つの科学は、脳が化学的-電気的な生命コンピュータであること——そのコンピュータの内部では、それぞれの神経インパルスが情報の「量子」ないし「ビット」としてふるまう——、神経系は特定の知覚的刺激を自動的に選択・中継し、きまり切った反応を引き出すよう工夫された遺伝子的にあらかじめプログラムされた回路を形づくるべく構造的に配線されていること、そして**重要な時期にたまたま環境に存在するモデル**の刷りこみが人間の住む**トンネル・リアリティを決定する**ことなどを示す印象的な証拠のかたまりを提示する。

われわれは次のような結論にたどりつく。現在の進化の段階における人間は、遺伝子的な鋳型と子供時代の刷りこみに自動的に反応する生物ロボット(バイオット)である。

これらの「ニュー」サイエンスの証拠によって提示されている**ホモ・サピエンス**のあるがままの肖像は、さまざまな生物の中で、「人間」がひときわすぐれた「選ばれた」立場にあるという理論を主張する心理学者や宗教指導者にとって、むろん、受け入れがた

音楽家、語り部など——に割り当てられるのが常だった。だから、次元の転換やきらめく色彩によって視覚的現実を受け入れるようわれわれが説得したのは、印象派、表現主義、キュビズム、点描主義、シュールレアリスムその他の、大胆な表現を行った画家たちであった。

ジャズ・ミュージシャンは量子的原理にサウンドを与えた。即興、シンコペーションなど先行的な実験を行ったのだ。かれらの実験のきわめつけは、主観的な情報飛行をグループの他のミュージシャンの情報飛行に合わせることにより、パイロットの飛行編隊を組み、いかにして電脳社会を形成するかを学んだことであった。

激動の二十世紀の各十年は、リアリティをデジタル化し、それをレコード、テープ、電子画面に投影する非常に快適な、依存さえ生み出す手法である量子的な装置を生み出したのではなかったろうか。

なんたる電子製品の革新の連続だったことか！　新しくデジタル化されたデータの波は農民や工場労働者からなる人類を否応なく量子的-電脳的な未来へと運んでいく！

ラジオ！　写真！　映画！　テレビ！　小型テープレコーダー！　コンピュータ！　自分で投与できるサイコ・ドラッグ！　電子レンジ！　コンパクト・ディスク！　CBラジオ！　……これらのものはすべて、情報世界の中で選択的に、贅沢に生きる

2. 量子物理学の方程式は、宇宙のすべてのものが情報ビット(あるいは情報の基本単位)からできていることを示した。固いニュートン的物質は今や、オン／オフの蓋然性の波ないし雲となったのだ。リアリティは比喩的にデジタル化されたパターンの膜として説明することができる。

3. ウェルナー・ハイゼンベルグは情報宇宙を明確にする第三の観念の創出に貢献した。彼の「不確定性」原理は、観測が主体すなわちリアリティを作り上げると主張する。われわれが知ることができるのは、感覚(器官)、測定道具、自分たちのパラダイムないし地図が語ることだけだということである。

情報宇宙を規定するこれら三つの原理は最初、旧石器時代の道具、黒板上にチョークで書かれた公式によって表現された。すべてのものが絶えまなく変化し、視点によって相貌を変え、人間の心理的態度や情報技術に依存しているこの幻覚的な世界を理解ないし容認できる者はほとんどいなかった。

今、激動の二十世紀の歴史を振り返ってみると、その遺伝子的な任務は、堅固なニュートン的構造への心理的執着を断ち切り、上述したようなデジタル化された情報世界に心地よく住むことに慣れさせることだったことが分かる。

新しい「神秘的な」哲学的テーマを人間化し、大衆化する任務は、特殊な遺伝的階級——芸術家、作家、詩人、吟遊詩人、

証明し、動物がいつ何に向かって行動を起こすかを決定する際に**刷りこみ**が果たす役割を明らかにしてきた。

産業時代の心理学者たちは動物行動学の諸発見を人間の状況に適用することができなかった。人間の感情的、精神的、性的、倫理的行動の大半が、「重要な」あるいは「感受性豊かな」成長期にたまたま神経系に刷りこまれたものに左右されるという事実は、機械時代の文化にとって容易には受け入れがたいものなのだ。もし個人がどのようにして自分たちが刷りこまれるかを学べば、自分たちの脳を刷りこみしなおしたり、再プログラムしたりする方法を学ぶことができるだろう。

神経化学が最近明らかにしたところによれば、神経インパルスやシナプスの連結を促進／抑制する神経伝達物質が意識、感情、記憶、学習、行動を決定する。

そうした発見と時を同じくして、精神薬理学は、意識の状態を促進／抑制し、精神的機能を加速／減速し、電脳人間の再プログラムを可能にする植物及び合成の精神賦活物質を発見してきた。

情報科学：世紀の変わり目頃、量子物理学は人間の生き方を変えることになる三つの驚くべき概念を提示した。

1. アインシュタインの相対性の方程式は、すべての物（や人間）の動く速度と方向性は、他の動くユニットとの関係性においてもっとも適切に決定される（あるいはそうした関係性においてのみ決定されうる）ことを示した。その社会的、心理的な意味は明瞭である。

情報心理学とは地球的-機械的-集合的段階からポスト地球的-量子的-電脳的（サイバー）段階へと移行していく神経系の進化について研究する学問である

産業時代の心理学が技術信仰に基づく一種のテクノ宗教になっていく一方で、化学、物理学、情報科学、生物学が人間性を変えることに深い意義をもつ理論、事実、技術を生み出していった。

神経学は意識の源や記憶、学習、行動の中枢を神経系——運搬用ロボットとしての身体に収納された一千億個の細胞から成る生命コンピュータ——の内部につきとめた。

確かに、心や感情、行動の機能を理解し、向上させたければ、研究の対象は神経系においてほかにない。神経系の受信、集積、伝達の回路にダイヤルを合わせ、チューニングできる人は、単により知性的というのではなく、より高次の複雑な進化レベルで機能していると言える。

前電脳人間は自分たちの神経系について論じたり、それに手を加えることに対して厳格なタブーをもっている。それは未知のものに対する原始的な恐怖に基づく恐怖症であり、いかにして知るかについて学ぶことに対する迷信に由来するためらいである。神経系が意識進化にとって信じられないほど強力な道具であることは今や明瞭である。「パイロット」としての責任を引き受ける人は、遺伝的な任務を遂行するために、その道具を理解し、活用することができるのだ。

自然の中や実験的なセッティングで、動物の行動を研究する**動物行動学**は、神経による識別のロボット的・本能的性質を

I. 情報心理学とは地球的-機械的-集合的段階からポスト地球的-量子的-電脳的(サイバー)段階へと移行していく神経系の進化について研究する学問である

産業時代(一八五〇-一九七五年)の心理学は思想、意識、行動を測定すると唱しながら、大半は社会的儀礼や文化的に規定された拘束システムの人間の適応と不適応について研究していた。封建的な神学はなかば教育を受けた階級が脹(ふく)れあがるにつれ、その存在意義を失ったが、そのような時期に出現した機械論的心理学は、家庭的人間を育むための安易な正当化や、人間をなだめて産業文化の価値を支えるための似非科学的言語を提供した。

産業心理学は国家が支える巨大な官僚制と、祭司集団にも似たその神秘性を基盤としていたが、人間の行動を説明する立証可能な理論を生み出さなかった。また、人間社会の古典的な問題、たとえば犯罪、戦争、葛藤、疎外、偏見、愚かさ、退屈、攻撃性、不幸、人生の意味についての哲学的無知などを解決するいかなる方法も生み出さなかった。

第一部

神経系の進化、構造、機能——情報心理学

大気圏外心理学

目次

大気圏外進化論

ティモシー・リアリー

である。これは高次の知性体が機械論的に考える種にサイバー量子について語りはじめる時に生じる状況である。
二十世紀の人間は十六世紀の道具を作る人たちに「今」を説明することが非常に困難でデリケートな仕事であることを見出すだろう。文化的な時間のズレを心にとめておけば、洗練された読者は本書の比喩のいくつかに心を搔き乱されなくてすむだろう。
この種の恒星間対話には、未来に対する善意と開かれた心が必要である。
このポスト地球的ガイドブックの重要性は、存在するということだ。ここには、地球の外に向かう旅、情報世界へのポスト地球的移民に備えさせる最初の試みがある。
より洗練された他の情報心理学が本書の後につづくだろう。未来を創造することよりも興味深い重要なことがあるだろうか?
最初の試みが折衷的で翻訳的になるのはやむをえない。それは宗教的・オカルト的なものを科学的なものに、古代を未来に、過去の伝説を現在のデータに結びつける。
われわれは刷りこむべき、巨大なポスト機械的、超個人的、ポスト・ニュートン的な電子場を予見し、つきとめ、秩序づけ、個人化し、親しめるものとするための教訓的な比喩として、八つの周期と二十四の段階を提唱した。
説明的な比喩は重要ではない。人類の優雅な変異にとって重要なのは、われわれがなろうとしている真の存在にまつわるアインシュタイン的、神経遺伝子的、量子物理学的なパースペクティブを理解し、個人的に適用することなのである。

恒星間宇宙に住むわれわれの隣人の言葉に耳を傾け、理解し、賢明な応答をすることを可能にする哲学、心理学、言語を開発する時である。

その言語は量子的で、デジタル化されており、精神幾何学的なものだ。

われわれの中にある者は、人間の知性と資源を、分配の不平等性によって苦悩を生み出している地球上の問題を解決するために用いるべきだと主張するだろう。

これらの幼生的な主張はいかに真摯なものであれ、胎児的で分かりやすく、近視眼的である。

現在、人類を脅かしている苦悩と欠乏の危機は物質的なものではない。それは神経政治的な戦争なのである。

それはこれまで霊的、心理学的、哲学的と呼ばれてきた。航法的と呼ぶのがもっとも適切である。人類はまだ遺伝子暗号を解読していない。羅針盤、ガイド・ブックが現在準備されつつある。

自分がどこからやってきて、どこに向かうかを知っており、局地的な現世を超えたヴィジョンを共有する男や女たちが幼生期の遺伝子プールから、サイバー(パイロット)個人として出現するだろう。かれらは素早く学び、効果的に働き、自然に成長し、素敵に社会化し、優雅に進化する。種が進化の挑戦に直面するまでは、のんびりとした愚かさの岸辺をうろついているというのはおそらく真実だろう。進化の挑戦に直面すると、個人は原始的な集団を離れ、スマートで迅速になるのだ。

この惑星上での、またこの惑星からの生物学的進化のパースペクティブを提供するこの本は、あらゆる世代のある種の人々にとって準備が整っている新しい遺伝子的な観念の数々を提示する。議論されるトピックスは電磁的、量子物理学的なものだが、本書の伝達方法は機械印刷による文字を通してなされる。したがって、読者は、自分の条件づけられた象徴体系が予想外の新しい象徴の組み合わせによって揺さぶられることを覚悟しておくべき

第一版への序文

惑星地球上の生命は、人間の神経系を介して、遺伝子プールから逃れて子宮惑星からの移民を開始し、高軌道に植民地を建設しはじめた。そこでは、銀河の生命体と接触し、コミュニケーションすることがより容易になるだろう。

ロケット船は子宮惑星の重力から逃れて上昇するのに必要な逃亡速度を獲得した。

電波望遠境の「受信盤」は今や星たちを監視し、近隣の知性体からの電磁気的なメッセージを受信する準備をしている。

人間が他の知性体と交流し、コミュニケーションする用意ができていることを告げるメッセージが電子信号に乗って恒星間宇宙を旅している。

銀河のはずれにある恒星のこの小さな衛星から離れようとしているわれわれは一人ぼっちでも孤立してもいない、という考えが膨らみはじめている。

この文章を読んでいる多くの人たちの生涯の内にそれは起こるだろう。われわれのパイオニアの家族は太陽系を離れるだろう。恒星間からのメッセージが受信され、コンタクトが実現されるだろう。銀河レベルの議論がはじまるだろう。

宇宙空間の生命体を新しい意識的な選ばれた遺伝子プールの成員として受け入れる準備をする時である。

イバー量子的技能に熟達した人々によってのみ構築され、住まわれるということは認識していなかった。
大気圏外心理学は今でも重要な未来の概念であるように思われる。だが、それはロケット船のハードウェアを強調するものである。したがって、本書のタイトルは、
『情報心理学』〔ティモシーの意に反して、あえて『大気圏外進化論』というタイトルを選んだ――訳者〕
とするのが妥当だろう。
近い将来、われわれの種が発見、創造、探究し、住むようになるだろう情報世界は、カナベラルのロケット発進道路からだけでは到達しえない。コンピュータの個人的な画面を通して到達されるのだ。
これらのさざ波を説明するために、現在の私の発行者兼編集者であるクリストファー・S・ヒヤット博士とニコラス・ターチャー氏はこの復刻版で最初の一六ページを書き直すことを許可してくれた。この新たに付け加えられた最初の部分は、「大気圏外」から「情報」へと強調点を加えるための出発点を印すものとなった。宇宙居住者から情報居住者への転換という意味である。
一六ページ〔本書六六ページ〕以降は、読者が一九七六年に書かれた私の文章を現代的に翻訳しなければならない。『大気圏外心理学』の用語の多くは、一九八〇年代のこのつややかなハイテク時代にはいささか時代遅れになった感がある。果たして、現代に翻訳するのに、私の手が必要だろうか?

ブ・ジョブスとスティーブ・ウォズニアックが思考をデジタル化し、プロセスし、その分子構造を変え、それを画面上でコミュニケートすることを可能にする最初のサイバー・コンピュータ、最初の個人的知識の装置を発売する前のことだった。

当時の私は、新しい若者の世代が自然に、デジタル化された思考を家庭用の電子画面でプロセスしながら育つようになるだろうという事実にまったく気づいていなかった。

つまり、私はPSYber-world（精神世界）を理解してはいたが、CYBer-worldについては理解していなかったのだ。

私は意識の内界を広くし探究し限りない脳の精神宇宙を航行していた。けれども、われわれを機械的な書籍人間から量子的な画面人間にまさに変えようとしている電子テクノロジーによって生み出される情報世界へのアクセスをもっていなかったし、その世界を理解してもいなかった。家庭用シンセサイザー、コンピュータ、オーディオ・デジタイザー、ビデオ・デジタイザー、インタラクティブなコンパクト・ディスク・システムなどなど。

一九七六年当時、ハイテクに無知だったために、宇宙植民やポスト地球的心理学を過度に強調することになったのである。

銀河の量子的言語を教えてくれる異星的知性の最初の波が、バン・アレン帯の外側に見出されるのではなく、一九七九年にわが家で、私のサイバー息子ザカリーがビデオ・ゲームで情報宇宙を泳ぎ回り、コンピュータのソフトウェアの中でデータの小惑星、惑星、星団を探究するという形で現れることになるとは思ってもいなかった。

一九七五年から七六年にかけては、生命がこの惑星を去り、居住者の作る宇宙植民地へと移住することが明らかであるように思われたのだ。こうしたH.O.M.E.s（High Oribital Mini Earths 高軌道のミニ地球）は明らかにポスト機械的、ポスト国家的、神経電子的環境を含んでいる。しかし、宇宙的世界がサ

一九七五年当時、立はアルビン・トフラーの『第三の波』も、ジョン・ネイビッツのポスト産業的、ポスト国家的、ポスト集合的意識に関する著作も読んでいなかった。

煙に包まれた組み立て工場の文明はスモッグと埃と酸性雨の中で消滅していくだろうことを私ははっきりと認識した。そしてその種としての、また個人としての次の可能な四つの進化の段階を描き出すことに成功した。

5. サイバー身体的——個人が自分自身の身体を制御し、新しい快楽主義的・審美的テクノロジーを用いて、登録された(刷りこまれた)所有者のみ体験できる感覚世界を泳ぐ。ハイテク異教主義の出現。

6. サイバー神経的——本人によってのみ体験される脳の世界。個人は自分自身の脳を操り、再プログラミングする。新しい電子テクノロジーを用い、産業時代の機械的な現実より自然で生き生きとした触知可能な情報世界を創造する。電子-量子的異教主義、ハイテク・ヒューマニズムの出現。

7. サイバー遺伝子的——自分自身のDNAを解読し、再プログラミングする個人によってのみ体験できる遺伝子的意識の世界。ガイアのマトリックスと調和する新しいミクロの生物学的テクノロジーを用いて新しい種を創造する。アミノ酸アニミズムの出現。

8. サイバー原子的——個人が原子的な情報構造を解読し、再プログラミングする。個人と種の進化のために新しいナノ・テクノロジーを操る。

信じてもらえるかは別として、私は本書をアップル・コンピュータが到着する以前、擦り切れた古本の山に囲まれて書いたのだ。それは、スティー

この強要された僧院生活が、アレキサンダー・L・ソルジェニツイン、ジョルダーノ・ブルーノ、アンドレイ・サハロフへの物ほしげな言及を許してくれるかもしれない。私が大気圏外への飛行、オニールの宇宙植民地、この地球の重力場からの、翔ぶ鳥に似た方法での逃亡といったものを熱っぽく語った理由の一端は、囚われの状態にあったことで説明できるかもしれない。

われわれのスカイ・ラボが頭上はるかかなたの高軌道に浮いていたあの星のちりばめられた夜のことを読者は思い出すことができるだろうか? ワシントンとケープ・カナベラルを結ぶ定期往復便はまだできていなかったし、NASAのコミュニケーション網の崩壊によって破壊されてもいなかった。

素朴にもわれわれは、イラン国王がCIAの助けを借りて、西洋の産業文化を作れるだろうと予測していたのだ。イスラエルは西洋的な民主主義国家になり、生まれ変わったクリスチャンは見当はずれの感傷的な精神異常者になると思い込んでいたのである。なんと無垢だったのだろう。

私は偏狭な見方に囚われ、次の激動の十年間に、われわれの二十一世紀への期待を明確にする偉大な洞察の数々を理解しそこねていたのだ。

ランドン・Y・ジョーンズの『大いなる希望』という本を読んでいなかったのがその一つだ。この誤って悲観的に書かれている魅力的書物は次のごとく主張している。二十世紀後半のそれぞれの十年は、思っていたよりずっと強い七六〇〇万人の一団から成るベビー・ブーム世代の成長の段階もしくは移行を表している。サイバー・キッズと呼ばれるこの新しい種は、スポック博士に自分自身で考えることを奨励され、テレビ広告でリアリティの消費者グルメになるよう訓練され、情報世界を探究し、その中に住む最初の世代であり、たえずゆらめき変化しながら大衆の意識を映しだす画面上に投影された電子の束によって考え、コミュニケーションする最初の人類の一団なのだ。

ファルコン・プレス版(一九八七年)への序文

本書はずっと以前の一九七五年から七六年にかけて執筆されたものである。

その後の十二年、世界の意識、アメリカ文化、情報心理学、あげていったらきりがないが、さまざまな局面で莫大な変化が生み出されてきた。私自身のパースクティブも大幅に変わった。

本書が執筆されていた当時——

リチャード・ニクソンが楕円形の大統領執務室の中でジェラルド・フォードに取って代わられようとしていた。大統領諮問委員会や医療、法律のトップ集団がマリワナの合法化を進めていた。

私は半オンスのマリワナ所持で長期の服役を余儀なくされ、刑務所の中で『地球外心理学』を書いた。政府が妨げのない時間を与えてくれたおかげで、私は嬉々として本を執筆することに没頭し、FBIの暗殺の脅威を周到に回避することに専念した。

することに決めたのだ。電話ごしに二人が会話している時、私はただその場にいただけだった。試みに会ってみることに決まったが、それが実現する前にリガルディが死亡した。死ぬ前にリガルディはリアリーについて次のように書いている。

「きっと後世の人々は、リアリーがこの世界に貢献したことを、今日のわれわれより高く評価するだろう」。

四度目のリアリーとの出会いはロスアンゼルス空港で起こった。私のすぐ前に急いでいる風のハンサムな中年の紳士が立っていた。見覚えがあるように見えたが、私が最後にリアリーの写真を見たのは、彼が四〇代の時のものだった。勇気を振り絞って、ティム・リアリーではないですかと尋ねると、彼はそうだと答えた。私はファルコン・プレスの発行者として自己紹介した。彼は私と話したいと言ったが、飛行機に乗るために急いでいた。われわれは笑みを交わして別れた。

それから三年後の一九八七年、ついにリアリーと私はビバリー・ヒルにある彼の家で共に腰掛け、本書と他の四冊の本(未来の歴史シリーズ)を出版する契約を交わした。ファルコン・プレスは「ヘッド・コーチ」を迎えたことを喜んでいる。

用に量的な輪郭を与える。次に評価を受ける人たち(友人、医師、自己など)の間でそれらの測定値が比較され、不均衡が探求・検討されるのだ。

二度目にティムに会ったのは、一九六四年から翌年にかけてで、私が、勧められている以上の服用量である八〇〇マイクログラムのＬＳＤを摂取した時のことだ。私は二日以上に及ぶ「トリップ」を体験し、極彩色の中国製スロット・マシーンから宇宙旅行、精巧なパーソナリティの地図に至る情報の洪水に浸された。その「トリップ」で混乱し、不安にかられた私は、年を経るにつれ、すべての「神経症」が情報のシフトと荷重負担の結果であると仮定するようになった。

狩猟採集人間が農民と会い、農民が産業人と会い、産業人が技術的人間と会うことを想像していただきたい。心脳ユニットは、新しい情報とさまざまな方法で、ある時には創造的に、ある時には破壊的に取り組もうとするだろう。にもかかわらず、新しいモデルや公式が生まれるまでは、不安だろう。文明そのものを変容させずにはおかない新しい情報-技術を受容することを「拒む」と、しばしばその文明全体が崩壊する。こうして私は、人間はユングが述べているように魂を探し求めているのではなく、新しい情報-技術を古い情報-技術に統合する方法を探し求めているのだという結論に達した。そこで私は病理の観念を捨て、不安や抑うつをリアリティのモデルにおける大小のシフトに対応しようとする試みとみなした。このことが、意味論的地図の観念(親切にもオスグッドらが提唱している。一九五七年)、変化する興味の中心の観念(情報の相互作用の結節点で集合・離散する形態)、無限の周辺の観念(拡大する新しい情報が人間に開かれているということ)などに導くことになった。最終的に何年かした後、私がリアリーの社会心理学と自分のＬＳＤ体験によって生み出された新しいデータの洪水に直接帰している新しいセラピー(世界観)が育まれた。

三度目のティムとの出会いは、ファルコン・プレスと最初に契約した著者イスラエル・リガルディを通して実現した。リガルディと私は『黄金の夜明け団の完璧な魔術システム』に取り組んでいたが、ある理由で、リガルディがリアリーと接触

まえがき

ティモシー・リアリー博士との出会い

クリストファー・S・ヒヤット博士

ティモシー・リアリーとの最初の出会いは一九六四年のことだった。当時、大学生だった私は社会心理学とパーソナリティ理論を勉強していた。リアリーとコフェイ(一九五〇年頃)は、「パーソナリティ」は仮説的な構築物であり、対人間の相互的なパターンによってのみ理解できるという考えを引っさげて臨床的な精神医学界に攻めいってきたアイルランド系アメリカ人、ヘンリー・スタック・サリバン医師の先駆的な仕事を計量・量子化し、明確にすることに貢献した。リアリーとコフェイが最初に行ったのは、パーソナリティの理解を助ける「研究モデル」を作ることだった。そのことによってリアリーやその仲間は重要な新しいパーソナリティの検査モデルの発達と、多くの現代のセラピーや家庭療法に代表されるような心理療法へのダイナミックかつホリスティックなアプローチの開発に貢献することになった。

不幸にもリアリーはこのような画期的な研究によって思いだされることはめったにない(気違いじみた雑誌の見出しを見せつけられてきた一般大衆にしてみれば、それも当然のことかもしれない)。だが、彼の初期の研究を素晴らしいとほめそやす心理学者たちですら、リアリーを「LSDの罠に落ちた」人物として葬り去るのだ。けれども、現代の心理療法へのアプローチに浸透している相対的でダイナミックな相互作用や互恵的な関係性の概念を生み出すきっかけになったのはまぎれもなく彼のそうした初期の研究なのである。リアリーによるサリバンの諸観念の拡大は、観察可能なさまざまな行動に見られる個人の相互作

献辞

本書はこの惑星上や惑星以外に住むすべての進化の使者とサイバー・パンクたちを祝福する。

われらに笑うことを思いださせてくれた——ジョージ・I・グルジェフ

英語への翻訳をしてくれた——アレイスター・クロウリー

ファルコン・プレスを高く飛びつづけさせてくれた——イスラエル・リガルディ

われわれにアメリカ版を与えてくれた——トーマス・ピンチョン

われらの種の中ではじめて情報宇宙を周航した——ウィリアム・ギブソン*

＊　小説『ニューロマンサー』『カウント・ゼロ』『バーニング・クロウム』『モナ・リザ・オーバードライブ』の中で、ギブソンは近未来のサイバー情報社会の概略を描き出した。

ある世代の内部で傑出した個人の人生は世代そのものから切り離されては存立しえない。もしかれらが魚だとすれば、遺伝子プールはかれらが泳ぐ液体である。かれらが共有する世代の感性はかれらを切り離す物事よりはるかに重要なのだ。

ランドン・Y・ジョーンズ
大いなる希望
アメリカとベビー・ブーム世代

これは私自身の人生の回想録を意図するものではない。だから、きわめて特殊な私自身の逮捕劇の興味深い詳細を語るつもりはない。その晩、士官たちはわれわれが地図上のどこにいるかを解明できるのではないかという最後の希望を棄てた。いずれにせよ、かれらは地図を読むことができなかったのだ。そこでかれらは丁重に地図を私に手渡し、軍司令部の中央情報局に行く道を運転手に教えるよう私に告げたのだ。私はかれらをその牢獄に連れていった。感謝したかれらはすぐに、私を通常の独房ではなく、折檻室に押し込めたのである。

アレキサンダー・L・ソルジェニツィン

われわれは世界最高のシステムを獲得した。うまくやる方法を見出したのだ。

ネルソン・ロックフェラー

(情報社会の出現)は核心的な出来事であり、近未来を理解する鍵である。それは、農業の発明によって一万年前に解き放たれた第一の変化の波や、産業革命によって触発された驚くべき変化の第二の波と同じぐらいに深遠な出来事なのである。われわれは次なる変容、第三の波の子供なのだ。

アルビン・トフラー
サイバー量子文明について

大気圏外進化論

ティモシー・リアリー

リブロポート

INFO-
PSYCHOLOGY

ティモシー・リアリー
菅靖彦：訳

リブロポート

INFO-
PSYCHOLOGY

ティモシー・リアリー
菅靖彦：訳

大気圏外進化論

神経進化の
24の段階を示し、
情報化社会を、
宇宙移民への
予備段階と
規定した、
未来ヴィジョン

1. 生物学的生存(海洋)ステージ
2. 地上の哺乳類ステージ
3. 象徴的道具ステージ
4. 産業ステージ

1. 無脊椎動物
2. 海洋脊椎動物
3. 両生類
4. 逃げる哺乳類
5. 捕食哺乳類
6. 狩猟採集民

INFO-
PSYCHOLOGY

リブロポート